
ツイン～クエストヒーローズ?～

RYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイン〜クエストヒーローズ〜

【Nコード】

N0779B

【作者名】

RYO

【あらすじ】

強大な魔力を持つ不良少年の陽河悠夜^{ひかわゆうや}と、無邪気な陽河光喜^{ひかわみつぎ}の双子が繰り広げる冒険、やる気もほとんどなく脱力ムードの悠夜とハイテンションな光喜、そして彼らとその周りの人々に少しずつ暗雲が立ち込めます。

ブログ 「世界に失望する者」 (前書き)

昔投稿小説として書いた小説のキャラを使いまわした小説です、タイトルのツインとは、そのシリーズという意味でついています。

プロローグ 「世界に失望する者」

排気ガスによんだ生ぬるい風が吹き抜けた、

長い黒髪は風に揺られ、煙草の煙は細い糸のように風に流されている。
く。

「——神殿では、この1ヶ月で魔法使いへの転職が3割を占め」

巨大なビルに取り付けられたモニターには、女性リポーターが

雑学にもならないようなくだらぬ情報を流し、その眼下には

まるで、アリのようにつじやうじやとコスプレ衣装みたいなカッコの人間や

剥いで売れば高そうな毛並みの亜人どもが行き来している。

「うざいんだよな・・・」

俺はそういいながら、風で乱れた黒髪を整えると携帯のモニターを見た

あいつと約束した時間から15分過ぎた。

俺の名前は陽河^{ひかわ} 悠夜^{ゆうや}、長い黒髪をしているが

れっきとした男だ、目は黒色、身長は高いほうで、衣服は黒いコートを羽織って――

いや、それよりも、このいかれた世界について話す必要があるな・

小さな頃、誰もが正義のヒーローに憧れ、ワクワクする冒険や手に汗握る戦いをしてみたいと思ったことがあるのではないだろうか？

この世界は言わば人の夢を具現化した世界……

何をバカなことを言ってるんだ、と思う奴もいるだろう、

だが俺はいたって正常だ、おかしいのこの世界の方だ。

最近の子供は冒険に憧れる一方、変なところで現実を直視している

その矛盾が生んだ世界、それが、高層ビルが立ち並びながらも

勇者や魔法使いや魔物などが町を闊歩するこの世界だ。

俺はそんな世界に迷い込んだ一般人ではない、生まれて十数年間

ずっとこの世界に生きている。

ただ、俺はこれでも有名な魔法使いで、他の世界を覗ける力まで持っている

そのおかげで、この世界がいかにバカらしい世界なのかが分かった
まあ、分かったところで俺にはどうすることも出来ない、

魔法戦士の俺がどうあがいても、この世界は正常な姿に戻らないし
この世界が正常な世界に戻ったとき、他の世界は夢も何もないくだ
らん世界になってしまうわけだ。

「悠夜〜」

などと、世界にいちやもんつけていると待ち人が着た

こいつの名前は、陽河ひかわ 光喜ひかり

俺と同じ黒髪に黒い瞳、少し長めの髪をウニみたいにツンツンに立
てている

身長は俺より30cm程度低い、それでも俺の双子の弟だ、

双子でなんでこんな身長差があるかというと・・・まあ、ファンタ
ジーな夢の世界では

何があっても驚かないのが、この世界なりのマナーというもののなの

だ。

「ふえ？ どうしたの？ なんか眉間にしわ寄ってるよ？」

「生まれつき、こういう顔なんだよ」

俺が言うと、光喜はボケーツとした童顔で顔を覗き込んでくる

「やっぱり、遅刻したこと怒ってたりする？」

「そんなに怒ってねえよ、ただ、お前の手を灰皿代わりにでもしてやろうかと思ってたところだ」

「うゝ、ごめん」

俺が睨むと、光喜はしゅんと縮こまってしまっ、一応言っが本気で
はない

まあ、俺らの間での挨拶みたいなものだ。

「ほら、ダンジョン行くんだろ？」

「ふえ・・・うん」

さつきまで縮こまっていた光喜が、ニパツとした笑顔をしながら小さなバッグから剣を取り出した。

どう考えてもバッグの方が小さいのだが、一定の種類の数までならどんな大きさでも入るというバッグだ、いろんな種類を一個ずつ入れると

15種類くらいしか入らないのに、同じ種類なら99個入れても平気という

まさにツツコミどころ満載のバッグなのだが、ファンタジーの世界のメルヘンな4次元バッグにツツコミを入れたところで、この世界の誰一人として

これを不思議とは思ったりしない、まさにご都合設定な世界だよ・

「じゃあ、行こうか悠夜」

光喜の無邪気な笑みに誘われて、俺は啜えていた煙草を排水溝に捨てる

排水溝の中には、既に何本もの煙草の吸殻があった

ファンタジーの世界が呆れるぜ、中途半端に現実的過ぎるんだよ。

「悠夜、速く」

待ち合わせの時間に遅れた奴が、ぬけぬけと抜かしやがるぜ・・・

こうして、俺たちの目的も何も分からないダンジョンへの冒険が始まった。

ああ、始まってそうそうなんだが、俺は未成年だが、

これを読んでいる未成年の諸君は、煙草はマネするな、あと、酒もダメだ

俺のように二日酔いに悩まされるような日々を過ごしていると、立派な大人になれないぞ。

ちなみに、俺はメルヘンの力でそのへんは大丈夫だ・・・多分な・・・

ブローグ 「世界に失望する者」 （後書き）

ブローグなので、世界観だけ分かってもらえればそれでいいです、今回は悠夜視点ですが、たまに光喜視点になるかもしれませんが、極力悠夜視点をキープしたいのですが、困難かもしれないですね。

まだまだ至らないところもあります、何かアドバイスや注意点がありましたら、ご教授願います。

第1話「ダンジョン探索」(前書き)

本編が開始したので、行を少しつめています。

プロローグのみ、行間を広くしているので、第2話以降はこの話と同じような行間となります。

第1話「ダンジョン探索」

都心から少し離れた場所、それは見渡すばかりの青々した草葉が生い茂り

たまに吹く風もとても心地のいい、後ろを振り返ればまだ灰色のコンクリートジャングルを

見渡すことが出来るのだが・・・都心と自然が両極端なんだよな、この世界はよ・・・

「光喜、置いてくぞ」

俺は道端で薬草を探している光喜に言うと、お構いなしに進んでいく

「ふえ、待つてよ悠夜」

光喜はパタパタとした足取りで俺の後を追ってくる、俺は煙草の箱から煙草を取り出し

ライターを探してコートのポケットを探った。

——スライムが現れた——

そのとき、どうやらモンスターとの戦闘が始まったようだが、俺は気付かず歩き続けていた

そして、グチャという気持ちの悪い音と、足の裏にこべりつく感触に嫌悪感を抱きながら足元を見た

「チツ・・・最悪だ・・・」

どうやらスライムを無残にも踏み潰したようだ、これでモンスターとの戦闘に勝利したわけだが

俺の足元には、スライムの破片が飛び散り、少し前の方には目が・・・いや、この話はよそう。

「よかつたね、13Gもらったよ」

「うれしかねえよ・・・」

光喜が後ろではしゃいでいるが、靴はスライムの肉片に・・・スマン、文章にする気になくなってきた

ともかく、不快な状況になっているのだ、その程度の報酬じゃ割りに合わん・・・

ちなみに、貨幣価値を換算すると1G＝約10円程度だ。

「缶ジュース買えるよ」

「靴代の方が高いんだよ」

というか、スライムがなぜ金を持っているのだ、こんな知性の欠片もないような下等生物が

金銭を持っていたところで、有効利用できるとは思わね、例えばスーパーに買い物に来ても

偶然通りかかった勇者様に、スライムというだけの種族差別の前に無残に散っていくのだ
世の中厳しいものだ。

——スライムが現れた——

「うぜーっ！っ！」

俺は手の平をかざすと、そこから黒い闇の球体が生まれ、それは

飛んでいくとスライムに命中し
やや青っぽい透明な肉片が辺りに散らばった。

まあ、これが俺の魔法なのだ、俺の得意分野は闇属性、呪術、幻術など、普通の魔法も使えるが
やはり、闇属性の魔法のほうが強い、絶対に勇者にはなれないタイプだ。

「容赦ないね」

ちなみに光喜は、俺と血肉を分けた双子であるというのに、光属性と時間操作の魔法が得意という、
武器を持たない俺と違い、腰には立派な剣をたずさえているし、子供っぽいところに目をつぶれば

勇者に見えなくもない、まさに俺たち双子は勇者&魔王みたいなパーティーなのだ。

「悠夜、ダンジョン見えたよ」

光喜がニコニコした顔で俺に向かって言う、前方にはレンガ造りのいかにも地下への入り口がある、
なぜこんなダンジョンに来たか、俺はそんな質問を光喜にぶつけてみた。

「そこに、ダンジョンがあるからだよ」

そんな哲学的な答えは求めていないのだが、そんなことを考えながら光喜の満面の笑みを見る

十数年間一緒にいるが、こいつの考えはどうも読めん。

まあ、ここまで来たんだ、歩きたびにぐちゃぐちゃと不快な音を立てるようになった靴代ぐらい

罪のないモンスターたちから奪わないと割に合わん。

というわけで、ダンジョンの中に入る、壁には誰かが定期的に薪を添えるわけでもないのに

年がら年中燃え続けているタイマツが辺りを照らし、床には誰が掃除するわけでもないのに

苔やキノコの類は生えていない、こういった技術でこのダンジョンを作ったのか是非とも教えて

欲しいものですな。

「このダンジョンの一番奥にはね、魔法の大福があるんだって」
食べると、魔力が全回するんだよ」

光喜がニコニコとした表情で俺を見る、絶対にそれは腐つてると思うぞ、それとも俺の知らない間に

大福は発酵食品へと変わり果てたのか、まあ、そんなツツコミなどこの世界では無意味なことを俺は知っている
なので、口を出さん、そして大福を口に入れることはないだろう。

そんなことを考えていると、前方からゴブリン・・・いや、インプだったか・・・まあ、なんでもいいが
何かモンスターが3体ほど現れた。

「ギシャーーーーー!!」

奇声を上げながらモンスターは一斉に飛び掛ってくる

「○▼×!」

一瞬、こいつ、ついに宇宙人でもお友達になったのかと思いたくなるような呪文を光喜が唱えると

光のバリアが現れモンスターの攻撃を防ぐと、そのあと、光は衝撃波となりモンスターを一掃した

「やったー」

光喜が上機嫌に飛び跳ねる、というかモンスターの質が悪くないか、せめてレベルに見合った

ダンジョンに行こうぜ、だいたいダンジョンの最下層にまでいって大福という名の消費アイテムじゃ

気合がはいらんだろうが、せめて、伝説の剣とかそういう武器をだな。

そんなことを考えていると、急に目の前にあった壁が吹き飛んだ、砂埃のせいで視界は防がれ何が起こったかわからない。

「こんな強い攻撃するモンスターは、ここには居ないはずだけど・・・」

光喜が砂埃の中でそういう、つまらないと思っていたら少しは楽しめそうだな・・・

そう思いながら砂埃の晴れた前方を見る。

「ゲッ!!」

そこには、長い金色の髪をなびかせ、澄んだ蒼色の瞳をした少女がいた

俺はこいつを知ってる・・・かわいい娘なのだが、できれば会いたくなかったよ。

第1話「ダンジョン探索」（後書き）

今回は、2人の能力をさわりだけ紹介しました、これから少しずつでもわかってもらえればいいです。

天使？ 悪魔？（前書き）

ファンタジーの世界に住みながら、現実的な思考回路を持つ魔法戦士の陽河悠夜。

子供っぽい、というか見たまんま子供な悠夜の双子の弟である陽河光喜。

2人は、魔法の大福なるアイテムを目指して、レベルの低いダンジョンに乗り込んでいた、なぜこんな低いダンジョンに乗り込んだのか・・・それは、そこにダンジョンがあったからだ。

そして、2人はダンジョンの中で見知った少女の姿を見つけた。

天使？ 悪魔？

その少女のすぐ側には、真っ青な顔をした男が三人ほど腰を抜かしている

どうやら、この娘のことを知らずにちよっかいかけたようだな。

彼女の名前はメア、正式にはメア・アスフィードだったかな、いつも愛称のメア
としか呼ばないから記憶が曖昧だ。

「な・・・なんだこの女・・・」

腰を抜かしていた男A、もうすぐ、被害者Aとなる男がそういった。

「キャーーーーー！！！」

メアが悲鳴を上げる刹那、俺と光喜は反射的にしゃがみながら壁に隠れた

すると、悲鳴が聞こえてきた瞬間に、周りの壁が次々と崩れていく、その断面は

驚くほどにキレイに整っていた。

これが彼女の能力、声を刃に変える力だ、声が聞こえた瞬間には刃は迫っていて

しかもその攻撃は、広範囲にそして無作為に放たれるという、迷惑この上ない攻撃なのだ

「ぎゃあああああー！！」

男の断末魔が三つほど聞こえてくる、この前メアとパーティーを

組んだとき、

この音の刃に巻き込まれた、言っておくが俺がドジなのではない、この攻撃は

本当に無作為に声の届く範囲に繰り出されるのだ、そして、それは音速で、

つまり時速にして1200kmの見えない&音なので防御も出来ない刃が飛んでくるわけだ。

「…………ぐすっ」

ボケーツと放心状態でいると、メアのすすり泣くような声が聞こえてきた、どうやら

男たちは死んだらしい、今頃はどっかの神殿で蘇生の儀式の順番待ちだろう。

この世界では死んでも神殿で復活できるのだ、それでは世界の人口は減らずいつか

人間で溢れかえるぞ、そして、それだけ現実離れなことをしていて、順番待ちという

現実的な理屈を唱えられるという、なんともやるせない。

「おい、メア」

俺はその場から立ち上がりメアに呼びかけた、すると、メアは涙を拭いて俺のほうを見る

蒼色の澄んだ瞳がまっすぐに俺に向けられる、知らない仲じゃないんだし、そんなにじっと

見つめるなよ。

「こんな低レベルなダンジョンで会うなんて奇遇だな」

俺はメアに向かつて投げやり気味にそういう、レベルの見合わないダンジョンで、知り合い同士が、ちょうどナンパ現場？に遭遇する確立とはいったいどの程度のものなのだろうか、

決して高いとは思わんね、それこそ宝くじで10万円当てるほどの確立しかないのではないだろうか

「メアも大福狙いなの？」

光喜がぴよこつと現れメアに尋ねる

「・・・・・・・・」

メアは何も言わずにコクリと頷いた、さっきまでアレだけ叫んで暴れていたにも関わらず

まるでヒマワリのような神々しい笑みを浮かべてだ、この笑顔を見ていれば天使にも見えるが

一度さっきのように錯乱状態に陥れば、悪魔か死神としか言いようのない殺戮劇を見せてくれる、

天使と悪魔の二つの顔を持つ女、それがメアだ。

「じゃあ、一緒に行かない？」

おい、光喜・・・さっきの惨劇を見てお前はメアを誘うのか？さっきの惨劇を見てメアを誘う男なんて

たとえばアマゾンの奥地や、ピラミッドの隠し部屋まで隅々探してもいないと思うぞ。

「・・・・・・・・」

メアは何も言わないまま、眩しいまでの笑みを見せて頷いてくれた。メアは小走りで俺たちに近寄ってくる

その後俺の顔を覗き込んで少し不安そうな顔をする、普段から俺は目つきが悪いのだが、さっきのこともあり普段異常に怖い顔になっているようだ。

メアは少し脅えた表情で俺の目をじっと見つめている、その目は少し涙で潤んでいる。

「まあ・・・なんだ・・・足は引つ張るなよ」

俺がそういうと、メアはすぐにニツコリと笑みを浮かべる、そして俺と光喜の腕をギュツと抱き寄せた、本人は何も意図していないのだろうが、俺の肘にはやわらかい感触が嫌でも押し付けられている、

こいつは一応俺たちと同じ年なのだが、そうとは思えないほどのスタイルをしているのだ。

「ほら・・・いいから行くぞ」

俺はメアから腕を引き剥がすと淡々と歩き出す、メアと光喜も後ろをポテポテとついてくる

まるでカルガモの親子のようだ、俺が右に曲がるとまったく同じルートを歩いて曲がってついてくる

数年前のRPGじゃないんだから、パーティーは全員一列に並んで歩くことはないんだぞ。

すると、突然モンスターが数匹現れた、だが俺たちは構わず前進する、そして通過するついでに

モンスターをあしらっていく、メアと光喜は剣すら抜かずにモンスターを撃破していく、まったく、

なんでこんなモンスターが弱いのかね、そして、なんで敵わないこ

とが解っているのに向かってくるのだ
モンスターにはモンスターなりの信念があるのだろうか、あるなら
捨てる、信念だけで世の中渡れるほど
甘くない。

「じゃあ、次の階にいくのか」
「……………」

後ろの2人がウキウキとした様子で俺を見ている、俺はそこまで
乗り気じゃないのだが、できれば
こんなつまらない場所おさらばしたいね。

「ここまで来たんだし、最後までいかないかね」
「……………」

光喜の言葉に、メアは無言のままコクコクと頷く、そこまでやる
気があるならなぜ先頭を歩かないのだ、
やる気の無い俺が歩くよりダンジョン攻略が早くなると思うぞ。

俺の提案はすぐに受け入れられ、先頭は光喜が歩くことになった。

数分後、俺は光喜を先頭にした事を後悔していた、壁から槍が飛
び出たり、床が落とし穴になったり
宝箱だらけの部屋は、実は全て擬態したモンスターだったり……

「えっと……北はこっちだね」

ダンジョンの地図を見ながら光喜が言う、光喜……北は常に前
じゃないんだぞ、地図はコンパスを見ながら
見るか、曲がるたびに地図の向きを変えないようにしないといけな
いと思うぞ。

「もういい・・・メア、お前がやれ・・・」

俺は光喜の地図を取り上げメアに手渡した、メアはしばらく地図と睨めっこをしていたが、ゆっくりと歩き出した。

数分後、メアは地図で折り紙の兜を作ってかぶりだしたあたりから、地図は再び俺の手元に戻ってきた、
てめえらは、なぜダンジョンに来ているのだ。

そんなこんなで、ダンジョンの最初の階から抜け出すことが出来たのは1時間以上後のことだった。

天使？ 悪魔？（後書き）

3人目のキャラのメアが登場です、ほんととは後数人、メインキャラとなりうるキャラがいるのですが、一気に出ても混乱するだけなのでゆったりと出していきます。

悠夜は軟弱？（前書き）

ダンジョンの中で知り合いのメアにあった陽河兄弟。

一緒にダンジョンを攻略しようとするが、すぐに迷子になる光喜、地図を見ることが放棄するメア、そして、いまいちやる気のない悠夜・・・果たしてこの3人はダンジョンの最下層へ行くことができるのか？

悠夜は軟弱？

「さて・・・この階の地図はないな」

俺はそういうと、手に持っていた地図をしまい周囲を見渡してみる、さっきの階と大差ない風景が俺のやる気をドツと削いでいった。

「はぁ・・・とりあえず、しらみつぶしに歩くか」

そういいながら俺は後ろを振り返った、さっきから静かになっていたので光喜もメアもだいぶ疲れが出ているだろう。

「・・・」

「おいしいね」

前言撤回、光喜はニコニコとした満面の笑みで、メアは黙りこくったままモギユモギユとまるでリスのように両手で、でかいバームクーヘンを持ち食べている、静かだと思ったら、てめえら緊張感というものがないのか。

俺が呆れてみていると、メアが俺の視線に気付いたのか食べるのを中断して俺を見つめる、そして、自分が持っていたバームクーヘンをちぎって俺の方に差し出した。

「別にいらね——」

俺が言いかけたとき、メアの手がグイッと伸びてきて、俺の頬にバームクーヘンが押し当てられる。

「だから、いらな——」

俺がメアに視線をやると、メアの視線がまっすぐに向けられている、俺がバームクーヘンを頬に押し当てられた状態で固まっていると、その目はだんだんと潤んできて、口をへの字に曲げだし、ほっといたら泣くんじゃないかと思う。

「わかったよ・・・食べばいいんだろ」

俺がそういつてバームクーヘンの破片を受け取ると、ニパツとした笑みを浮かべて目をキラキラさせて俺を見る、俺は仕方なくメアによる監視のもとで別に食いたくもない砂糖の塊のようなブツを口に入れた。

「・・・・・・・・」

メアはそのまま視線をそらそうとはしなかった、仕方がないので俺が一言「おいしい」といつてやるとまるで子供のような笑みを浮かべて、自分のバームクーヘンをまたちぎって俺に手渡した。

「はぁ・・・とにかく行くぞ」

そういつと、俺はまたカルガモの親のような気分で先頭を歩き出す

「これおいしいよね、どっかで買ったやつ？」

光喜がメアに尋ねると、メアはフルフルと首を振った、もしかし

て、自分で作ったのだろうか？

そう考えるとあれだけ俺に食うことを勧めたことが説明できる、せっかく作ったのだから誰かにウマイと言って

欲しいと思うのは当然の理だ、そう考えながらも俺はもう一口バームクーヘンを頬張った。

「・・・屍の草原で拾った」

「ぶはあ！！」

俺は思わず口のことを嘔出してしまった

「悠夜、きたない」

光喜が笑いながら俺を茶化す、メアは不思議そうな目線を俺に送ってくる。

ちなみだが、屍の草原とは、ゾンビやゴーストとかうねうねした触手のようなモンスターがわんさかいるようなステージの名前だ。

「そんなものに勧めるな！！」

俺はどなるようにしてメアにいうが、メアはバームクーヘンにかぶりついたまま首を傾げるだけだった。

そんなメアに脱力感を覚えながら一歩前に踏み出した、その時、俺は反射的に後ろに飛んだ。

俺の頭があった場所には鈍い銀色の閃光が走り、それが大きな鎌だと解ったのはそれが壁に斬撃の跡を残したあとだった。

「・・・・・・・・」

言っておくがこの三点リーダーの連続はメアのものではない、無論メアは黙ったままだが俺の目の前にはメアと同じぐらい寡黙そうな奴がいた、いや、表情に変化があるだけメアのほうがまだ可愛げがあるな。

そいつは黒いマントに身を包んだ骸骨で、目・鼻・口の穴からは薄気味の悪い紫色の光が漏れている、これがなんなのか、教わらなくても分かる、死神だ。

「へえ、少しは手ごたえのありそうな奴いるじゃねえか・・・」

普通、こんなレベルの低いダンジョンに死神はいないのだが、そんなことどうでもいい、雑魚ばっかしでイライラしていたところだ、ちょうどいい腕ならしだ。

「行くぜ!!」

俺はそついいながら、手をかざし巨大な黒い魔力の球体を放った、その後素早く前方へ飛び上がった、死神が鎌で魔力の球体をかき消したのを死神の頭上で確認する、死神は魔力の球体が邪魔したおかげで俺が飛び上がったのを見ていない。

俺が奴の頭上で魔力を溜めていると、死神は自分の前方に鎌を振り回す、鎌は何もない空を切り死神はあっけに取られている、どうやら魔力を放つ前にかけた幻術がうまくかかったようだ、先ほど死神は自分に向かってくる俺の幻術を切ったのだ。

「終りだ!!」

意外とあっけなかったな・・・そう思ったとき、俺は急激な眩暈を覚えて空中で体制を崩しその場に倒れた

「くそ・・・何か呪術をかけられてた——」

俺はすぐに訪れた体の変化によって壁際まで走った、胃の中からすっぱ苦いものがこみ上げてきて

俺はその場で嘔吐した、そして確信を持った、これは死神の力ではなく、あのバームクーヘンのせいだ

多分、いま俺のステータスには異常効果として毒が追加されていることだろうね。

「悠夜危ない!!」

光喜が叫びながら俺に走り寄ってくる、俺の背後では死神が鎌を振りかざしていた、とりあえず鎌を回避し

死神から距離をとり死神の頭上に向かって魔力の弾丸を放つ。

「光喜、やれ!!」

俺が言うのと光喜は魔力を高めていく、すると死神の頭上の瓦礫は空中で静止した、これが光喜の力で

周囲の時間をとめることが出来る、魔力を持たない、または光喜に比べると無いに等しい生き物なら一緒に

とめることも出来るが、今の光喜なら死神の時間を止めることはできないだろう。

「はぁああああ!!」

光喜は声を上げながら死神に切りかかった、連続で3回ほど切り

つけると死神は鎌を振り上げた
その瞬間、空中で静止していた瓦礫が再び落下運動を始め死神に降り注いだ。

「倒してみたいだね」

光喜は瓦礫の山を見ながらそう呟いた、俺はその場ヨロヨロとしやがみこんだ

「悠夜、だいじょうぶ？」

光喜が間の抜けた声で言ってくる、俺は光喜とメアを見た、俺は医者ではないが2人が健康体なのが見て

分かる、俺は俺以外の人間の胃袋がどういった構造で出来ているのか知りたいものだね、お前らは平気なわけ？

とりあえず俺は治療魔法で異常効果を取り除き、鋼鉄の胃袋を持つであろう2人を連れて歩き出した。

悠夜は軟弱？（後書き）

マジメな戦闘が少し入りましたが、やっぱりその他の割合の方が多いですね、もっと敵らしい敵が出てきたら戦闘シーンの割合も増えるでしょうが、序盤は戦闘があってもこの程度だと思ってください。

ダンジョン？（前書き）

悠夜、光喜、メアの三人がダンジョンを探索していると、レベルの低いダンジョンには居ないはずの死神が現れた、悠夜は死神ではなく、メアからもらったバームクーヘンにより毒を喰らっていたが、けっこう余裕で死神を倒した。

ダンジョン？

結局その階には死神が1匹いただけで、特におもしろいものは何もなかった、

次の階への階段を探すのも特に苦労しなかった。

さあ、いきなりだが、諸君はダンジョンの定義というものを知っているだろうか？

ダンジョンとは元来の意味では『地下牢』などの意味で使われる、だが、ロールプレイングなどというダンジョンとは、もっと広い意味での使われ方をするのだ。

ここで、俺流のダンジョンの定義と現在の状況を検証してみよう、なに、かたっ苦しいことじゃない

ただ、俺の愚痴に付き合ってくれということだ。

俺流定義¹

侵入者の目的達成を拒むために、迷路、トラップ、モンスターなどが用意されている。

モンスターはいいとしよう、トラップがないのも、経費削減の関係だったと諦めよう、だが……

「なんなんだこれは……」

俺は壁に張ってあるポスターを見る、それには矢印と丁寧なダンジョン案内が書いてある、

最初は畏かと思ったが、わざわざ宝箱の位置と中身まで書いてると

来てる。

「ラッキーだね」

光喜が無邪気な笑みを浮かべた。

俺流定義2

ダンジョン創設後、他者によって作り変えられてないこと

俺の手には缶コーヒー、光喜はスポーツ飲料のペットボトルに口をつけ、メアは炭酸飲料の缶に口をつけたあと刺激の強さに身震いする。

無論こんなもの持ってきたわけでもない、近場にあった自動販売機で買ったのだ、誰が設置した

こんな人もこない場所に設置したところで、赤字だった帳簿が黒字になるとは思わんね、

こんな酔狂なことをするくらいだったら、自分の庭で石油を探し続ける方がマトモに見えるね。

次が俺の定義の最後だ

俺流定義3

ダンジョンとは閉鎖的な空間であること

だがどうだろうか？俺たちが階段を下りた先は、どこかの谷底のようで一面の花畑ともう季節は秋を過ぎ

冬に近づこうとしているのに、地球温暖化という嫌がらせを律儀に続けている太陽が見える。

「そろそろ、俺の結論を言わせてもらってもいいか？」

「なんのはなし？」
「・・・・・・？」

俺の言葉に2人して首を傾げる、こいつらはまだこの花畑のどこかに、魔法だか伝説だか秘伝だか、何かよく分からん大福があるとでも思っているのだろうか？

「大丈夫だよ！諦めずに探せばきつとあるよ！」

光喜はグツと親指をたてて俺を励ますように言う、別に挫折したわけじゃない、探す場所を変えないかと提案しているのだが、こいつにはそれが伝わらんのだろうか？

「・・・・ふぁいと」

少々訂正、こいつらにはそれが伝わらんのだろうか？

俺が開いた口がふさがらなくて、この開いた口をどうするか考えていると、花畑の中から何体もの人影のようなものが飛び出してきた。

「悠夜、敵だよ、ボーっとしてちゃだめだよ」

光喜がそういいながら剣を抜く、誰のせいでボーっとしてたんだろうね、それをまず教えて欲しいものだよ光喜君。

俺が周囲を見渡したとき、あたりは死神の群れに囲まれていた、こいつらでポーカーをしたらフルハウスが3回はできそうだよ。

「さっきの死神もそうだが、なんでダンジョンのレベルに見合わない

「い奴がゴロゴロいるんだろうね」

そついいながら、ポケットから煙草を取り出し口にくわえると火をつけた、火をつけるために出したジッポライターを閉めて、カシャという金属音が鳴った瞬間、奴らは一斉に襲い掛かってきた。

「ラ～ラララ～ラ～——」

すると、メアが澄んだ声で歌いだす、もしもこれがストリートの真ん中で歌っているなら、その場に歌い終わるまで立ち止まり、その後にお茶にでも誘うね。

「おい、ここで使う気か!？」

俺は歌いながら死神の攻撃を舞うような剣技でさばっていくメアに語りかける、だがメアはずっと歌ったままだ
光喜も剣で死神をあしらっていつている

「邪魔だ————!!」

俺は叫びながら魔力を一気に放つと、俺の前方に立ちふさがっていた死神が吹き飛んでゆく、それと同時に
その道を俺と光喜は走り出し、岩陰へと飛び込んだ。

メアは死神たちの真ん中でまだ歌っていて、その剣には輝くばかりの魔力が集中されていた。

「ザ・スピリット・アドミレーション
精霊の賛美」

メアが小さくそう言った瞬間、あたりの花びらは舞い目の前の景

色が変わって言った、谷の岩の壁は
どんどん削られ、切り付けられ、花畑の花は宙に舞い、死神の骨
の破片も流れる景色のように吹き飛んでいく
地面もまるで地割れのような跡がドンドンとついていく、無差別的
な破壊行為が終了された後、俺たちは立ちあがった。

「やりすぎだろ・・・」

俺がボソつというと、メアは首を傾げる、メアの背後にあったダ
ンジョンの出入り口は無残に崩れ去り
ユートピアに思えた花園は、地獄絵図のようになっている。

これはメアの技の1つ、声を斬撃に変えるのがメア的能力だが、
歌によりその斬撃を剣に閉じ込め
その後、いつきに放出するものだ、歌が長ければ長いほど威力&射
程も比例するようにあがっていく、
この前、興味本位で計算してみたが、彼女が5分歌うと都市が半壊
するようだ。

「たく・・・まあ、無事だったからよしとするか」

俺がそういつて隣を見たとき、半透明な光喜がそこで照れるよう
な笑みを浮かべていた、その足元には
なんとも無残なものが転がっている。

「死んじやったみたい」

光喜が笑いながら言う、この世界にいと死という概念が薄れて
いくよ、町に戻れば蘇生も出来るしな、
まあ、現在に至るとおり、メアのこの技は普通味方がいるとき使う
べきではない、死人が出る、というか出た。

「……はい」

メアがささやくように言うと、かわいらしいピンク色の絆創膏を取り出した、そしてそれを光喜の死体に張った。

「かなり無茶がないか？」

「ありがとう」

俺がツツコミを入れている間に、光喜の死体は一度消え、光喜の幽霊が光ると、光喜は復活した

最近の絆創膏は便利になったものだね、というかどんな絆創膏だ、魔法の絆創膏か、伝説の絆創膏か？

「……不死鳥の羽」

メアはそういいながら、先ほど光喜に使ったのと同じ絆創膏を俺に見せてくれる、不死鳥の羽はいつから

ビニール生地になったのか教えてくれないか？ それとも、そういう商品名の絆創膏なのか？

俺のツツコミはことごとく虚空へと消え、俺たちはメアがダンジョンの出入り口を壊したため帰ることができないので半ばヤケを起こしながらも一本道の谷底を歩き出した。

酒も煙草もする不良少年だが、切実に願おう、もう帰りたい。

ダンジョン？（後書き）

悠夜の皮肉度がMAXに近づきつつあります、それにともないそろそろダンジョン？探索も大詰めです、さっさと攻略しないと他のキアラが出てこれないので、というわけであと1・2話で攻略すると思われます。

終わりよければ全てよし？（前書き）

悠夜&光喜&メアはダンジョンから抜けた、谷底で死神の大群に襲われる、メアの大技により一掃することができたが、かわりに光喜は戦闘不能となった。

しかし、メアの持っていた不死鳥の羽（絆創膏）で無事に蘇生を遂げた。

終わりよければ全てよし？

さて、その後俺たちがどういう状況に陥っているかというところ、聞くは失笑、語るは涙的な展開を繰り広げていた

この手の物語にはトラブルがつき物だが、そんなにも律儀に次々と起こる必要はないと思うね、トラブルの女神

がいるとするならば、是非ともゆっくりとお茶でもご一緒しようではないか、働きすぎは体に毒だぜ。

「悠夜、ボーっとしないでよ！！」

光喜の声が俺をイヤでも現実に戻す、俺は女神のような笑みを持つ女性との喫茶店での楽しい談話の

シーンの妄想を剥ぎ取ると、現実を目を向けてみた。

そこには頭の中にあった女神のような笑顔ではなく、もっと妖艶な笑みを持つサキュバスが何体かと、

下半身だけ蛇で上半身がグラマーな女性のラミアという名のモンスターが3体ほどだ。

「強いんだから、悠夜も手伝ってよ」

光喜が剣を振り回しながら言う、光喜も精神的にバテているようで、まったく腰がはいっていない。

「悪いがたとえモンスターでも、女を殴るのは気が進まん」

俺はそう言うと、持ってきていたアルミの水筒の口を開けると、中に入っているブレンダーをがぶ飲みする、

ちなみに、この小説を見ている未成年はマネするなよ。

「フッフ・・・優しいのね坊や」

サキュバスの一体がさういうと俺に向かってきた、そして、俺に向かつてピンク色の魔力を放つ

「私の虜になりなさい」

サキュバスがさういうのと同時に俺はピンクの魔力に包まれた、まあ、攻撃魔法でもないので俺は避けもせず酒を飲み続ける、たしかこの魔法は相手のステータスに魅了の異常効果を与えるんだったな。

「悠夜、暴れないでね」

光喜がなげやりな感じで俺に言う、メアは淡々とラミアを刻んでいる、ラミアの目から放たれる光を浴びると石化してしまうのだが、石化しきる前にメアは確実にラミアを倒してしまうのだ。

で、俺はというと、この程度の低俗魔法で異常効果を受けたりはしない、バームクーヘンで毒をくらった男が何を言っているのだと思う奴もいるだろうが、過去のこととは水に流そうではないか、俺はもう台風が直撃したナイル川に流したね。

俺は酒の入っているアルミの水筒にふたをすると、軽く魔力を放出しあたりを漂っていたピンク色の魔力をどす黒い魔力で吹き飛ばす。

「悪いけど、俺は清楚な女の子が好きなんだね」

俺はそういうと右手から魔力を放ち、きわどいカツコで飛んでいく、俺の好みとは少しズレたサキュバスを吹き飛ばし
一瞬で戦闘を終了させた。

「鬼だね」

「・・・鬼」

光喜とメアの視線が俺に向けられる、手伝えといったのはお前だろう、光喜。それにメア、お前の戦いのほうが
よっぽど情け容赦ないと思うぞ。

「いいから先に進むぞ」

俺はそういうと、どんどん奥へと進んでいく。

しばらくして、真っ暗な洞窟に差し掛かった、その洞窟の前には
それっぽい石版が置いてある、石版には

日本語、韓国語、英語、それにご丁寧なことに点字までついてやがる、それによると、この先は見て分かるように

真っ暗で、洞窟の中を進むには壁にある松明に火をつけ、明かりを
確保することが必要らしい。

「じゃあ、火がいるね、石版の地図によるとこの先の火山の火口の
火を取ってこないといけないみたい」

光喜が地図と睨めっこしながらそういった、メアもその隣でコク
コクと頷いている、その間にも俺は松明にジッポライター
をかざし火をつけた。

「ああー！！！」

すると、光喜が俺を指差しながら大声を張り上げる

「ずるしちゃいけないだよ」

知るか。何処の誰が書いたかも分からん石盤の言うことを律儀に聞くほど俺は義理と人情に溢れた人間ではないのだよ、
第一、火山の火口から火を取ることがどれほど危険なことか知っているのか。

俺は後ろからの非難の声もものともせず、ズカズカと洞窟の中に足を踏み入れた。

洞窟の中をしばらく探索していると、宝箱のようなものを発見した、それも普通の宝箱ではない、メアと光喜を一変に詰め込むことが出来そうなくらいでかい宝箱だ。

「きつとアレだよ！！」

光喜がパタパタと宝箱に近づいていった、その時、闇に閉ざされていた天井の方で何かが蠢く気配を感じた

「戻れ、光喜！！」

俺が叫ぶと光喜は振り向く、その時、光喜と宝箱の間になんかやたら巨大な何かが降りてきた、それは巨大な岩のブロックを幾つもつなげて作ったような巨大な人形だ、十中八九ゴーレムで間違いないだろうな。

さて、ここで1つの疑問が浮かぶ、ゴーレムはかなりの重量がある、翼はないし、浮遊能力もない、さて、どうやって天井にいたのだろうか、忍者のように天井に張り付いていても天井が崩れそうなものである。

ああ、ついでにもう1個、大福を守るには少々オーバーなのではないだろうか、そんな疑問を誰かにぶつける暇もなく、ゴーレムは俺たちに襲い掛かってきた。

「・・・・・・・・勝つ」

メアはやる気満々な表情で剣を抜いた、言っておくがここでお前の能力は使っな、洞窟が崩れて生き埋めになるぞ。
俺の忠告を聞くと、メアは急にしゅんとしたしおらしい顔つきになっってしまった、どうやら使いたかったらしいな。

「そんな顔すんな、どうせすぐに終わらせてやるよ」

俺はそういうと、ゴーレムの前に立ちはだかった、そして俺が魔力を高めたとき

「魔法の大福ゲット」

ゴーレムの後ろにいた光喜がにこやかな顔で宝箱の中身を持っていた、どうやらゴーレムを倒さなくても手に入ったらしいな、だが、少し楽しそうな相手だし遊んでいくことにして、俺はゴーレムに向かって構えた。

「・・・・・・・・天空のオカリナ」

すると、俺が魔力を放つ瞬間、メアは天空のオカリナという街へ

の帰還アイテムを使った、おい、せつかくやる気を出してたのに・

じゃなくて、このタイミングでそれを使うと！！

俺たちは光に包まれ、一瞬にしてもといた廃棄ガス臭い空気の街に戻っていた、そしてそれと同時に俺の手からは魔力が放たれていたしかも、今までの魔力の球体のダークではなく、魔力をバスターのように放つダークバスターという技だ。

その後から大変だった、俺の目の前の高層ビルには巨大な穴が開き、瓦礫は道路の車を次々と破壊し、消防や警察がわんさかと集まる大騒ぎになった、俺たちかというと俺の幻術によって、その場からなんとか逃げたという状況だ、中には何人か幻術にかからなかった

奴も居たが、そういう周りの空気を読めない奴には俺の鉄拳制裁をプレゼントし、俺たちの事を無理やり忘れてもらうという合理的な方法をとらせてもらった。

かくして、俺たちは大福を手に入れ、その代償として街のビルをただの瓦礫の山に変えてしまったのだった。

「人生うまくいかないな・・・」

俺は水筒に入っていた酒を全て飲み干しながらそう呟いた。

終わりをければ全てよし？（後書き）

やっと、第1章、終了といったところですね。

次の話からは、また次の冒険に出てもらうことになります。そのとき、他のメインキャラも出す予定です。

第2話「ある日常の風景」(前書き)

皮肉屋の呪術&幻術&魔法使いの陽河悠夜と、子供っぽい、時間魔法使いの陽河光喜、この2人の冒険は始まりそうで、特に始まっていなかった。

第2話「ある日常の風景」

昔の偉い人はよく言ったものだ、「触らぬ神に祟りなし」と、俺はようやく気がついた、いや、はじめから気が

付いていたのだが、実行に至るまでに到達していなかったのだ、ダンジョンへ行くたびに光喜のドタバタに

つき合わされるくらいならば、何処にもいかなければいい、冒険なんてしなくたって、コンビニかどっかで

バイトをすれば生活は困らんし、レベルアップにあたふたする時代はとうの昔に終わったのだ。

「と、いうわけで行かん」

「えゝ、いこゝよ」

俺はベタバタとくつついてくる光喜を無視してテレビのリモコンをいじりながら、白髪のジジイが政治うんぬんを

語っていたニュースから、新人美人リポーターが初々しく中継をしているニュースに変える。

「今度のダンジョンには、装飾品の青い貝殻があるんだよ」

光喜は語尾をルンルン気分にして言う、んなもん海岸にいつて探して来い、ダンジョンに行かなくてもありそうなものだろうが。

「それを装備しているだけで、運が5もアップするんだよ」

光喜が目を丸くして、右手の指を目一杯に広げて5という数字を主張する、ちなみに俺のステータスを見ると

全ての値が軽く1000を越している、5アップしたところで俺には何の関係もないね。

それに、運がアップするアイテムなんているか、そんなに欲しいならどっかのわけのわからない宗教に入れ、青いだけの貝殻より、いかがわしい幸運のツボの方がまだ信用性があるね。

俺が肩を揺さぶる光喜を無視して、ニュース番組から料理番組に変える、今晚の晩飯の参考に出来ればいい
と思ったからだ。

ここまで話を進めておいて、いまさらだが、ここで俺の家族構成について話しておこう、母親は小さな頃に他界、父親は仕事狂でめったに家に帰ってこない、そして、双子の弟の光喜、以上が俺の家族だ。

なので、家事全般が出来ない光喜は戦力にならないので、家事は俺がしている、不良少年が家ではせつせと
メシの仕度をしているわけだ、いい笑いもんだぜ。

そんなこんなしているうちに、家に備え付けてあるインターホンがなった、それと同時に光喜がパタパタと玄関に駆け出していく、俺がテレビに集中していると、またパタパタ光喜が帰ってくる気配が背後からする、いや、それ以外の気配もするが、無視でもいいだろう。

「新聞なら断れ、誰一人として読まん」
「そう、今なら地獄への片道切符がついてくるんだけど」

光喜、男らしさにかける奴だと思っていたが、声まで女になっているぞ。

「料理番組なんて見なくてもいいわよ、今晩は私が人肉ハンバーグでも作ってあげるわよ」

「シャリーナ落ち着いて・・・」

さっきまでの声とは別に、もう一人、控えめの女の声が聞こえてきた

「うつさいわよ、私はいつだって冷静よ!!」

「ひひゃいひひゃい、ほへんはい」(痛い痛い、ごめんなさい)

俺はテーブルにおいてあったコップに酒をついで後ろを振り返る、すると、そこには女にしては背が高く、長い金髪をツインテールにし、エメラルドグリーンのキレイな瞳をしているが、目つきが悪い女がいた、まあ、目つきの悪さなら俺のほうが上なのだろうがな。

その女の両手は、もう一人の小さな女の子の両頬を引っ張っている、その女の子は魔法使いですと言いたげな

黒い三角帽子をかぶっており、栗色のショートヘアに、同色の瞳を持った光喜よりも小さな女の子だ。

「なんだ、お前らか・・・」

俺が言つと、背の高い女は手元の女の子を解放してやる、彼女はシャリーナ、本名はシャリーナ・ディスレントだな、

まあ、本名を覚える必要は無いだろう、誰一人としてディスレントの名で呼ぶ奴はいないからな。

もう一人の女の子は両頬をいたわるようにさすっている、彼女はエルル、本名はエルル・エルザート、エルルとは

彼女の本名を縮めたものだ、こっちも本名を覚える必要は無いだろう、何しろ自己紹介でエルルと名乗るほどエルルと

いう名前がしつかりと定着しているのだから。

「で、何かようなのか？」

「用がないと来ちゃだめなの」

なぜか誇らしげな雰囲気でシャリーナが言う、若い男しか住んでいない部屋に若い女が尋ねる、あまりお勧めできることではないと思うね。

「悠夜お兄ちゃんにこれ返そうと思って」

そういうとエルルは装備品の魔よけのお守りを俺に手渡した、この2人とは幼馴染で、シャリーナは俺と同じ年、エルルは俺より1歳年下だ、血の繋がった弟である光喜でさえ、兄と呼んでくれないのに、俺の事をお兄ちゃんと慕ってくれるいい子だ、シャリーナは見ての通り男勝りな奴だ、こいつとは一度、漢として雌雄を決する必要があるかもな。

「こんなもん貸してたか？」

「おととい借りたのよ、勝手にね」

無断でかよ・・・俺たちの住まいは小さい一軒家暮らしだ、それで、隣の部屋にはシャリーナとエルルが同居している

彼女たちの両親は昔の内戦で死んでしまったらしい、ファンタジーの世界でもそんな暗い過去を持つ人間はいるものだ。

「ねえ、みんなでダンジョン行こうよ」

「却下だ」

光喜が話を蒸し返してきたので、瞬時になかったことにする。

「いいじゃない、あんまり家にいると引きこもりになるわよ」

シャリーナが俺に嫌味つたらしく言う、その言葉は全世界の引きこもりをバカにしているぞ、今から全員に謝礼文を書く練習でもしたほうがいいんじゃないか。

「昔の人がよく言っただでしょ、触らぬ祟りにご利益なしって」

「シャリーナ違っよ、触らぬ神に祟りなしだよ、それに、今その言葉は適切じゃ」

「エルル」

シャリーナの間違いを正したエルルは、シャリーナに両頬をつねられながら涙目になっている

「ほ、ほへんははい」（う、ごめんなさい）

俺はコップの酒を飲み干すと、瓶の中が空だったことに気が付く、家の中もうるさくなってきたことだし買い物にでも行こうか。

「じゃあ、俺も行く」

光喜が飛び跳ねるように俺に飛びつこうとする、だが、その襟首はシャリーナによって捕まれ引き戻された、心なしがシャリーナの微笑がたくらみに満ちているのは気のせいだろうか。

「あんたは私とダンジョンに行くのよ、エルルは悠夜と待機ね、帰ってきたとき用に晩御飯を用意しておくこと」

シャリーナはそういうと、有無を言わさないまま光喜を引きずっ

て俺より先に家から出て行ってしまった

「なんだあいつ？」

俺が半分あっけに取られていると、隣にいるエルルがおどおどしているのに気が付く、俺と光喜で身長が30cm以上

差があるので、光喜より低いエルルは俺の眼下で困っている様子だ、光喜と同じくらい子供っぽいからな、いや、体系を

見れば光喜よりかは大人かな、育つところは育ってるみたいだし。

俺はふとエルルと目が合い、レディーに失礼なことを考えるのはよすことにした、それにしても、エルルといるとなんとなく

庇護欲を煽られるのも俺だけではないだろう。

「仕方ねえな、買い物に付き合ってくれるか？」

「・・・う、うん」

エルルは視線を足元にもって行きながら照れくさそうに言う、俺が歩き出すとエルルも俺の少し後ろをゆっくりとついてきた。

第2話「ある日常の風景」(後書き)

第2話というより、第2章といった感じかもしれませんが、とりあえずは、メアとの冒険は終了し、新キャラのエルルとシャリーナの登場です、結構重要なキャラなんで覚えてあげてください。

デート？（前書き）

悠夜と光喜の家に尋ねてきた、強気で男勝りな正確なシャリーナと、シャリーナと対照的でおどおどしている年下のエルル。

なぜかシャリーナは光喜を連れて、ダンジョンに行くと言い出し、部屋から出て行ってしまった、残された悠夜とエルルは冒険するわけでもなく、ただ、普通の買い物に出かけた。

デート？

「じゃあ、商店街の方に行こうか」

「え・・・あ、うん」

俺が言つとエルルは顔を隠すように帽子を深くかぶりなおして囁くように言つた、人通りの多い道を2人で歩き出す、そして、数秒としないうちに俺は小さなため息を漏らした。

なんなんだあいつらは？

「・・・うまくやりなさいよエルル」

「ねえ、ダンジョンは？」

「後でね」

背後から妙に聞きなれた声が聞こえるのは俺だけだろうか、ふと隣を歩くエルルに視線をおろして見るが

どうもそわそわと上の空で心ここにあらず、といった感じだ、どうやら追跡者に気が付いているのは、俺と

俺の後ろでザワザワとしている雑踏の中にいる人々だけだろう。

そんなことを考えていると、エルルが急に立ち止まりポケットをこそこそとあさりだし、間もなくエルルは

緑色の光をチカチカと放つ携帯電話を開いた。

内容はどうやらメールのようで、一通り読んだ後、俺に視線をやると、俺の視線が自分に注がれていることに

気が付いたようで、顔を赤らめて視線を逸らした、その後、エルルの視線は俺たちの背後に向けられた。

「待つててやるよ、何か用ができたんだろ？」

「え・・・あ、うん、ありがとう、ちょっと待ってて」

エルルは急いで俺たちが来た方向に少し走ると、すぐ近くのビルとビルの隙間に入っていた、俺は気長に待つことにして、煙草を一本取り出して火をつける。

「えー！ー！！無理だよそんなこと！！」

「静かにしないさい！！いい、やらないとあんたに明日はないと思いなさい！！」

火をつけ終わると同時に、ビルの隙間からは叫び声が聞こえてくる、前者はエルル、後者は・・・まあ、本人は隠れているつもりらしいし、分からないということにしてやろう、俺は心が広いんだ。

そう考えていたとき、背後から誰かがぶつかる感触がして、目つきが悪さをMAXにして振り返る、するとそこには俺の身長の2倍はあるだろう、巨大な狼の亜人が鎧と大斧を装備して立っていた。

「なんだその目は」

俺の目つきの悪さがカンにさわったのか、その亜人も立派な犬歯を見せながら睨み返してきた、いい度胸だなこら、言っておくが、俺のコートに少しでも汚れをつけるような野郎は、万死に値するぜ。

そして、1・2分後。

「ごめんね、お兄ちゃん」

エルルがそういいながらひょこつとビルの間から出て来た、その顔は少し緊張しているようだったが、一瞬にしてその顔は驚愕の表情へと変わった。

「ず……ずみ、ません」

「よう、遅かったな」

俺は首根っこをつかまれ、口や鼻から血を流して懺悔する亜人を投げ捨てて、エルルへと歩き出す。

「ど……どうしたの？」

エルルの顔が引きつっている。

「なに、少しおいたの過ぎるワンちゃんに躰をしていただけさ」

俺がエルルに向き合った状態していると、背後で金属が擦れるような音がする、どうやら背後でワンちゃんが斧を振りかざしているようだ、漂ってくる殺気から、周りがいまいち見えていないらしい。

「ぐおおおおおおー！！」

振りかざされた斧を俺は軽々と止めた、少し手に魔力を込めて斧を握ると、斧はせんべいみたいにバリバリと砕けていく。

「てめえ、エルルごと斬ろうとしただろ」

俺が睨むと亜人はあからさまにびびっている、俺は亜人の腹部へポディーブローを入れる、すると鎧は砕け亜人の巨体は

数メートル後ろに吹っ飛んだ、おとなしくしていれば良かったのに、心の広い俺ならあのまま見過ごしてやってたんだぜ。

「俺に連れに手を上げんじゃねえよ」

俺は中指を突きたてながら、完全に意識がぶっ飛んで聴いているはずもない亜人にそういった、そして、エルルの方に振り返る、啞然、その一言がぴったりの顔をしている、口を半開きにして目線は空をとらえている。

「大丈夫か、エルル？」

「へ・・・あ、うん、大丈夫だよ」

エルルは我に返って俺と視線を合わせた、だが、すぐに顔を逸らして、気まずそうに上目遣いでこっちを見たり、視線を逸らしたりを繰り返している、いつもこんな感じだな、嫌われているわけではないのだが、どうも、俺が苦手らしい。

「さあ、行こうぜ」

俺はそういうと、煙草の煙を深呼吸ついでに噴出してきびすを返して歩き出した、すると、俺の袖がクイツと引っ張られた、振り返るとエルルが俺の袖を掴んでいる。

「どうかしたか？」

「えっと・・・その・・・」

エルルは何か言いたそうにしていたが、言葉を飲み込んで手を離れた

「なんでもない」

少し不思議に思ったが、まあ、エルルが言うんだから追求することもないだろう。

「あゝ、それじゃダメじゃない!!」

背後から何か声が聞こえた気もするが、そっちもそっちで無視してしよう、というかこの追跡者Aはエルルに何をさせたいんだ？

「ねえ、やつぱりいきなりは無理だと思うよ」

追跡者Bがそういつている、こいつも声が大きいんだよ、追跡する気があるのか？いや、少なくともBには無いだろうな。

「あの亜人さえいなければ・・・」

「そんなもんかな」

俺はなんかやるせなさを感じたが、とりあえずオール無視で歩き出した。

デート？（後書き）

今回はエルルと悠夜がメインで、後ろの追跡者A・Bはオマケです。

イベント開始？（前書き）

悠夜と光喜の幼馴染のエルルとシャリーナが遊びに来て、その後、悠夜とエルルは成り行きで2人で買物に出かけることになったが・
・そのきっかけとなったシャリーナは光喜と共に追跡を始める。
だが、その追跡に気が付いていないのはエルルだけだった。

イベント開始？

その後とは言っと、エルルが躓いて俺とは反対方向に転んだり、会話の節々でエルルがうつむいたりする

たびに、後ろの追跡者Aが「そうじゃないでしょ!!」、「あゝ、じれったい!!」などという声が飛んでくる、丸聞こえ

だぞ、俺の聴力が人並みはずれている可能性は高いが、それでも、もう少し声量を抑えることを覚える。

「じゃあ、少し待っててくれるか」

俺はそういうと、酒屋の前でエルルを待たせておいて居酒屋の中に入ってしまった。

店の中には見知った定員の姉ちゃんが酒の瓶を破れないように紙袋に入れてくれる。顔見知りの人なので

俺が未成年というところには触れずにいてくれるいい人だ、まあ社会的にいい人なのかどうかは分からないがな。

代金の清算を済ませて紙袋を持って店の出口へ振り向いたとき、

エルルの腕の中には小さな黒猫が抱かれて

いた、赤い首輪をつけているからどこかの飼い猫なのだろうな。

すると、エルルの傍に黒いスーツに黒いサングラスという、いかにもといった服装のゴツイ男が数人現れた

どう見てもエルルが脅えているように見える。

そして考えるより早く、俺の足は奴らの方へと走っていた。

「・・・そうなんですか、じゃあ」

エルルが何か言いかけたとき、俺は店のドアを勢いよく開けて男たちの中でも一番偉そうな奴を俺の偏見と

直感により選び出しその顔面にシャインングブレードを決めた。

サングラスが音を立てて砕け、黒服の男は手足をピクピクと痙攣させながら固いコンクリートの道路に倒れた。

「アニキ!!」

男の一人がそういう、やっぱこいつがアニキなのか、俺の偏見と直感もなかなか冴えてるな。

「てめえ、何しやが……」

男の一人……じゃあ分かりにくいか……。アニキさんが男Aで、アニキ!!と叫んだのがB、今話していたのがCとしよう。

今俺によって銘々された男Cは失礼にも俺の顔に向かって指を刺す、人を指差しちやいけないって教わらなかったのか、人間としての道徳心を疑うね。

「こいつこの前、事務所を潰した奴ですよ!!」

事務者？はてなんのことだろうか、俺はお前らみたいなヤクザかマフィアが良く分らない奴らの事務所を襲撃した覚えは……。

いや待てよ、もしかして、この前メアとの冒険から街に帰ってきたときに壊してしまった馬鹿デカイ建物の話をしているのではないだろうか？

そうだとすれば、記憶転換の呪術が失敗してたのか、事後処理がうまくいっていなかったようだな。

「なんだとこらあ!!」

新キャラ男D登場、気にしていなかったがこの訳のわからん集団は野球チームが出来そうな人数いたようだ
店の中に居たときは陳列棚が邪魔で見えなかったよ。

「ただで済むと思ってないだろうな」

そういいながら男E、いや立ち居地で言うとF・・・まあどうでもいいか、ともかくそいつは懷から拳銃を取り出した。
すると、飛び立った仲間を見た渡り鳥の群れのように次々と同じ動作を繰り返した。

「たく・・・あんま街中で暴れなくなかったんだが仕方ないか」

「てめえから仕掛けてきたんだろぅが!!」

俺の言葉に男Gぐらいが俺にどなるように言う。まあその通りなのだが過去のことはいつまでも引きずるもんじゃないぞ。

俺が腕に魔力を集中したとき、エルルが俺のコートの袖を引っ張ってきて俺は後ろを振り返った。

俺の視界はコンクリートの道路よりも、モコモコした絨毯のようなものの方が多く見えるね。

「コイツですよ、お頭!!」

そういったのは先ほど俺が更生してあげたワンちゃんだ。こいつは亜人Bとしよう、お頭と呼ばれた奴の方が偉いだろうから、そっちが亜人Aだな。

それにしても、今度はラグビーでも出来そうな人数を連れてきたな・・・。プロテクター代わりに鎧なんて着ちゃって、それにしてもラグビーって14人で出来たっけ？少し足りない気もするが別に構わんさ。

「てめえらは、ギルド『シルバーウルフ』」

男Bが言う。

「貴様らは、ギルド『玄龍組』」

お頭である亜人Aが言う。ちなみにギルドとは、まあ何かを目的として集まっている組織のことだ。

「そうか・・・てめえらがデータを盗んだのか」

「なるほど、うちの若頭をやってくれたのは貴様らの差し金か」

事情は分らんが話がかみ合ってなくないか。そして、なぜ両者とも俺をピュアな気持ちで微塵も感じられない目で睨んでいる。

俺は手に込めていた魔力を足元に向けて放った。あたり一面には砂埃が舞い、俺は猫を抱いたまま硬直していた
エルルの手を引いて走り出した。

「あつ・・・悠夜お兄ちゃん!？」

エルルはまだ頭の中が混乱しているようだ

「いいからさっさと逃げるぞ」

俺がそう呟いたとき、発砲音が幾つも聞こえてきた。俺はすぐに防御用の魔法を使おうとしたが、すぐに異変に気が付く。

「な、なんじゃこりゃあ!?!」

それは空中で銃弾が静止しているのだ、どうやらどこかで時間操作の魔法が得意な奴が助けてくれたようだな。

すると今度はでかい鎧を着た亜人が走ってくる。

そこに、おそらくはたまたま通りかかった見覚えのある通行人が近づいてきた、その金髪ツインテールの通行人はマスクにサングラスに帽子を装着していた。

彼女は俺たちに接近してくる亜人の鎧にぶつかるかのように触れた。

「ぐおおお!!」

亜人はまるでつぶれた蛙のようにコンクリートの道路にへばりついていた。

「シャリーナ!!」

エルルがそう叫んだが、通行人さんは無視して歩き続けて次々と亜人にぶつかっていく、そしてぶつかった亜人たちは次々とその場にひれ伏した。

「何だ貴様は!!」

1人・・・というか1匹の亜人が斧を振り下ろすが、通行人の女性には斧を片手でつまむように受け止めた。

「あら、ごめんなさいね!!」

そついいながら、通行人は巨体の亜人を簡単に投げ飛ばしてしまった。

ちなみに本人は変装しているつもりらしいので気付かないことにするので関係のないことだが、シャリーナの能力は説明してなかったよな。

シャリーナの能力は重量・質量の変化、つまりは物を重くしたり軽くしたりする力だな。

「死にさらせー!!」

近くでは亜人と男たちの激しい攻防まで繰り広げられていた。俺はさっさと行けというジェスチャーをする通行人の忠告に従うことにして、エルルを連れてその場から逃げていった。

イベント開始？（後書き）

まあ、街中でのイベント開始です。

シャリーナの能力も一応は明らかになり、近いうちにエルルの能力も明らかになりたいと思います。

撃退？（前書き）

エルルと2人で出かけた悠夜、だが、その途中で事務所を壊した恨みがあるヤクザたちと、お礼参りにきた亜人の群れに出くわした。シャリーナと光喜の力によりなんとかその場から逃げることができたが・・・

撃退？

「はぁ・・・はぁ・・・あの人たちなんだったんだろうね？」

エルルが息を切らしながらそういった。俺たちは先ほどの場所から少し離れた路地裏に来ている。

エルルの腕の中にはあの黒猫が抱かれていて、エルルの話によると、あのヤクザのような奴らは

エルルの抱いていた猫を、事務所で飼っていたが逃げ出した猫といって引き取りにきたらしい。

そして、エルルが猫を渡そうとした瞬間に俺の神がかり的なシャイニングウィザードが炸裂したとい

うわけだ、いやはや、なんともよく出来た寸劇だな。

「この猫、返してこないと」

そういいながら、自分の腕の中でゴロゴロと喉を鳴らす猫の頭をなでる。近くで見ると毛並みのキレイな黒猫で、赤い首輪には鈴の変わりに六角形の真つ青な宝石のよ

うな石がつけられていた。

俺はおもむろにその宝石を猫の首輪からはずして眺めた、宝石の側面には日本語でも英語でもない

やたらと角ばった箇所が多い文字列が書かれている。

「いや、この猫はあいつらの猫じゃないだろう」

俺が言つとエルルは首をかしげて理由を尋ねてきた。

「これは伝令用の魔術がかけられてる、あいつらが魔法を使えると

は思えんしな」

全て俺の勘に基づいた意見だ。宝石の側面の文字を指でなぞってみると、何箇所か傷で文字が消えかけている場所があることに気が付く。こりゃあ、中に込められたメッセージを解析できないかもしれないな。

そんなことを考えながら宝石を見ていたとき、猫はエルルの腕から逃れて裏路地を疾走しだした。

「あつ！！ 待って！！」

エルルはそういいながら猫の後を追っていく、仕方がないので俺は宝石をポケットに入れて一緒に走り出した。

しばらく走った後、建物の角を曲がったとき、猫は皿に入れられていたミルクを飲んでいた。その猫の目の前には牛乳パックを片手に持ったメアがいた。

「・・・・・・・・飲む？」

つかれきつた顔をしていた俺を見て牛乳パックを差し出す。俺を猫と同じ扱いにするのはやめてくれないか。

「お前の猫なのか？」
「・・・・・・・・ミケ」

別に名前は聞いていないのだが・・・。

「・・・・・・・・野良」

メアの口からやつと本来の回答が帰ってきてホツとする。こいつとはなかなか会話のペースが合わないよ。

そんなこんなしているうちに、路地裏の向こう側から無数の足音が聞こえてきた。

「もう追ってきたのか・・・仕方ねえ、出迎えてやるか」

俺はそういつとミルクを満足気に飲んでいる猫を見ながら、嬉しそうな笑みを浮かべていたエルルに耳打ちする。

俺は一人で路地裏に立っていたメアはさっさと建物の裏口から中へ入っていった、そういえばあいつの家がどこか知らないな、ここに住んでいるのか？ そんなことを考えながら自分の腕の中にいる黒猫に目をやる。現在の状況を考えてあいつらの目的はこの猫なんだろうな。

「アニキ！！ 居ましたよ！！」

声が聞こえて前方に目をやると、すでに5人ほどの黒服の男たちが拳銃を構えて立っていた。

男たちは俺を見ながらジリジリとこちらににじみ寄ってくる。

「ちよつと待ってくれ！！ 参った、この猫は返すよ」

そういつと猫をその場に放した、猫は俺を振り返りつつもアニキ

分の男の元へ駆け寄っていった。

男は猫を抱き上げると、真っ先に首輪につけられていた青い宝石を確認しニヤリとした笑みを浮かべた。

そして、予想の範囲内であつたが俺に向かって銃を向けた。

「やつぱ見逃してはくれないか」

「当たり前だろうがよ」

そういつてアニキ分の男が引き金に指をかけたとき、猫の体が光に包まれる。

男たちはその光に驚き一瞬目をつむった。その間にも、光の中から猫ではなくエルルが現れる。

これがエルルの能力、メタモルフォーゼ、要するに変身能力といったところだ。

エルルの手には俺が店で買った酒の瓶が握られていた、エルルはそれを男たちにぶっかける。

「くそ！！　だましやがつたな！！」

男はそういいながらエルルに銃を発砲した。

ガン！！　という金属音が当たりに響く、銃弾はエルルの皮膚を貫通せずに兆弾したのだ。

「バカな！！」

男が驚いたように言う、エルルは姿はそのままだが、皮膚を鉄のように硬く変化させていたのだ。

そして、俺は火のついた煙草をその男へと投げ捨てた。

「ぐあ　あああああ！！」

アニキ分の男とその隣の男が炎に焼かれて悶える。そして、消火しようとしていた残りの男たちは目を丸くした。

アニキ分の男が持っていたはずの青い宝石は、手榴弾に変わっていた。これはエルルの能力ではなく俺の幻術で手榴弾を宝石に見せかけていたのだ、相手が魔法の使えないような人間ならば手触りなども幻術でごまかすことが出来るのでとても楽だよ。

俺がエルルの手を引いて建物の陰に隠れたとき、裏路地に爆風が吹き荒れた。

「少しやりすぎたかもしれないな・・・」

俺は新しい煙草に火をつけながらさういう、まあファンタジーの世界だ、また教会で蘇生してくれや。

俺は心のこもっていない黙祷を捧げると爆風で飛んでいたエルルの帽子を拾い上げる、炎で燃えて

穴が開いているうえに汚れまくっていた。

ため息をつきながら近くにあったごみ置き場に帽子を捨てるとエルルの頭をなでる。

「悪い・・・これから、新しいの買いに行くか」

俺がさういうと、エルルは軽く頷いた。その顔はどことなく赤くなっているのは、作戦の緊張からだろうか？

それとも、爆発の熱のせいかな？

そんなことを考えながらも俺はエルルと一緒にその裏路地を出て大通りに面した道に出た。

そして、もさもさとした毛並みの亜人とでくわした。

・
・。 そっ いえ ば、 おっ ちゃ んの 他 に も フン ちゃ んが い た ん だ っ た な ・

撃退？（後書き）

まあ、ヤクザといつても一般市民なんで悠夜からしたら、ただめんどくさいだけの敵です。

メアが出てきたのには、意味がある……といいですね。

トラウマ？（前書き）

無事、ヤクザ組みのような連中を一掃した悠夜とエルルだが、まだ亜人が残っていた！？

トラウマ？

俺の目の前には牙をむき出しにしている狼の亜人がいた、バカデカイ斧を構えたそのワンちゃんはどうやらかなりご立腹のようだ。

亜人の顔を見極めることは難しいが、多分こいつがお頭の亜人Aだろうな。残りの亜人がいないのは、光喜とシャリーナが頑張ってくれてるんだろっな、いや、今は追跡者AとBという設定だったか。

「貴様許さんぞ！！」

そっついながら斧を振り上げる、俺とエルルはそれぞれ反対方向に跳躍して攻撃を回避する。本物の黒猫をメアに預けて正解だな、今猫がいたら邪魔でしかたない。

「貴様は二度も我々のギルドに楯突くというのか」

亜人Aが俺にそっつい

「俺は初対面だと思うんだが・・・どこかであつたか？」

前世とか、お母さんのお腹の中に居たときとか、訳のわからんことだけは言わんでくれよ。

「とばけるというのか！！ 私は覚えているぞ、お前の背に刻まれた黒いツタの刺青を！！」

亜人がそういったとき、俺の中で何かのスイッチが入っちまった。

「ぐはああ!!」

次の瞬間には、俺の蹴りが鎧を砕き亜人の骨をボキボキと鳴らす。亜人の口からはおびたらしい

程の血が吐き出され、蹴られた腹部を押さえながらその場につずくまっってしまった。

俺はその頭をわしづかみにして、そいつの頭を上げさせた。

「言え、いつ、どこで、そいつにあった・・・」

俺が静かにそういうと亜人は唸るような声を出した

「12年前・・・この町でだ・・・」

バカ野郎が、12年前だと俺は幼稚園児だよ・・・まあ、このフアンタジーの世界では300歳まで生きる

人間がいたりもするから、見た目では年齢は分らんがな。

俺はそのまま亜人を睨みつけた。

「それは俺じゃない・・・そいつについて知っていることがあるなら、洗いざらい吐け」

そっぴいながら肋骨が折れたであろう腹部に軽く蹴りを入れる。唸り声を漏らしながら傷みをこらえているようだ。

「お・・・兄ちゃん・・・」

エルルが怖がつている様子だが、俺にはそれを気遣う心の余裕は残されていなかった。

「知らん・・・ただ、長い黒髪と背中にツタの刺青のようなものがあつたことしか・・・私のギルドはそいつに一度壊滅させられたのだ・・・」

亜人がそういい終わったとき、俺は乱暴に亜人の頭を解放する。

亜人は固いコンクリートの上でうずくまる
ひれ伏した。

『・・・俺が憎いか？』

つつ！・・・ズキズキと頭が痛みやがる、12年前のあの日にあつた奴の言葉が頭の中に何度も何度も木霊した。

やっと見つけたと思つたのに、俺と同じ呪印を持つ男を。

俺は自分の肩を握り締めた、かき消そうとしても頭の中にはあの日の思い出が次々とわいてくる。

薄暗く狭い部屋だつた、床の上に座り込む俺の目の前には俺の毎日寝ていたベットがあつた。

そのシーツは赤く染まり、壁にはベツタリと真つ赤な血がついている。

しばらく、それが何か分からなかつた。いや、分かりたくなかつた。ベットの上で無残な肉片となつたモノが着ている服は、母親の服に良く似ていた・・・違ふのは血で真つ赤に染まっていたということだけ・・・。

そして、それを見下ろすようにベットの傍には背中に黒いツタ状の模様がついた長い黒髪の男が立っている。

その男は俺に視線を落とし、その後俺の額に指を当て・・・

「お兄ちゃん!!」

俺はエルルの叫び声で現実へと引き戻される。

「大丈夫？」

エルルは涙目で俺の顔を覗き込む。

「ああ、平気だ」

俺は冷や汗をきながらも、営業マン顔負けのスマイルで答えてやる。まさか、あの日、この呪印がついた日のことを思い出しちまうとはな・・・そう思いながら肩を握り締める。

そう、俺の背中にもあの呪印がある・・・あの日、あの男が俺につけた呪印が・・・。

「さあ・・・帽子買いに行こうか」

俺は邪念を取り払いながらエルルの頭をなでた。エルルは心配そうな目で俺を見ていたが、俺が大サービスで微笑みかけてやるとエルルも嬉しそうに笑った。まったく、普段仏頂面しかしない俺がここまで自然に笑えるとは・・・自分でも驚いているよ。

しばらく、エルルと2人でそうしていてもよかったのだが・・・そんな2人のムードを無視して、けたたましいサイレンの音が街に響き渡った。

「やべえ、サツだ!!」

俺はとっさにエルルの手を握り締める。エルルは「アッ!」と小さな声を上げた。

「逃げるぞエルル」

俺がそういうと、エルルはにっこりと笑った。

「うん」

トラウマ？（後書き）

少しばかり、悠夜の過去に触れていきたかったのでこういう感じになりました、現段階では悠夜をピンチに追い込む敵は現れないでしょう

もしも、悠夜を追い込むとしたら、光喜とか、メアとか・・・まあ、味方でしょうね。

第3話「因縁の探し人」（前書き）

エルルとの2人きりでの散歩は、結局いいこともなく終わってしまったが、その途中で倒した亜人の話により、悠夜は過去のことを気にかけて始めていた。

第3話「因縁の探し人」

俺は深い、とても深いまどろみの中に居た。また、この夢か・・・

俺がうつすらと目を開けてみるが、目をつぶっているのと大して変わりのない暗黒の景色が

まるで俺を飲み込んでるように広がっている。

チャプチャプという水音と、ゆらゆらと揺れ動く体から、自分が水面の上を浮いていることを察することが出来る。

そして、俺の背後、つまり水中には殺意を秘めたような気配が漂ってくる。俺は水面に

浮いたまま、暗くてもあるかもどうか分からない空を眺め続けていたが、そこに何がいるか俺は知っている。

真っ赤な赤い3つの目を持ったクジラのように巨大な黒いサメだ。こいつは俺を食うわけでもなく、ただ俺の周りをグルグルと泳ぎ続けている。

すると、俺の頭上でかすかな光が差し込める。いよいよ夢のクライマックスのようなだ。

誰かは分からない、そこには暖かな光を体から発する女性が水面の上に立っていた。

やがて彼女は水面の上でしゃがむと、俺の頬に手を当てる。

『私の名前を呼んで・・・』

何もないのに、エコーがかかったような透き通った声が響く。

『私の名前は・・・』

彼女が言いかけたとき、俺の目の前の景色が変わった。俺がいるのは水面ではなく

ベットのうた、どうやら現実に戻ったらしいな。

俺はベットから起き上がると、カーテンの間から差し込める朝の光を見て、起きる決意を固める。

「・・・そういや、これどうするか」

俺は机の上に放置されていた宝石を見る、それはあの黒猫が持っていた物だ。

さて、ここで少し回想にでも入ろうか。なに、心配するな、俺の過去のドロドロ話ではなく、つい昨日の話だ。

俺とエルルは買い物を終えると、俺の家で待っていたシャリーナと光喜とともに食事をとり、その後解散した。俺は自分部屋に戻り、あの宝石のメッセージを再生することにした。数秒もかからず、宝石からは光が漏れ、3D映像のように中年の男が映し出された。

「これが・・・ということは・・・私は・・・世にはいないだ・・・」

想像していた通り、傷だらけになっていたせいで再生が不完全だな。だが、文脈からして恋文などの楽しい内容ではなさそうだ。

「・・・これには、盗みだ・・・リストと・・・の情報か・・・
てい・・・」

盗みだ、世にはいないだ、やな言葉の端々がうかがえるね。娘の
誕生祝のメッセージを
込めるとか、もっと気の利いたことが出来んのか。

「奴らは『魔女狩り』と・・・ている・・・メシアの・・・と・・・
幹・・・の・・・ようじ・・・」

だんだんと映像が荒くなり、単語も聞き覚えのない単語が多くな
ってくる。

「・・・ア・・・ゼパル・・・エル・・・えん・・・めじ・・・
・・・」

すると、ついには映像だけが残し、声が途絶えてしまった。どう
やら再生限度はここまで

のようだな。俺が再生をやめようとしたとき、映像の中にいくつも
の文字が現れた。

いくつかは読めなくなっているが、どうやら人の名前のようなのだ。

アキラ・・・アラン・・・イーゼル・・・イザナギ・・・イスミ・・・
・エリー・・・と判読できるものだけを

上から読んでいると、その文字で俺は硬直した。

「エルル・・・」

性格には、エリル・エルザートの名前がそこには書かれていて、
その横にはCという文字が
書かれている。俺はそのリストをドンドンと読んでいく。

シャリーナ・デイスレント・・・C、陽河光喜・・・A、陽河悠夜、俺は自分の名前を見つけて顔をしかめた、俺の名前の横にはXと書かれている、これをエックスと呼ぶのかバツと読むのかは定かではない。

「なんのリストなんだ？」

俺はその場に黙りこくって考える。男の語りとこのリスト・・・とても楽しそうな話題にはならないだろうな・・・いやな兆候の前触れじゃなかったらいいんだが・・・。

そんなことを考えていると、ヘリの音が聞こえてくる。人が考え事してるのにうるせえな・・・その音はだんだんと近づいてきて、日常生活では聞くことが出来ないほどになった。

「奴か・・・」

俺がそう思ったとき、俺の部屋の窓がノックされた。俺がカーテンを開けると、そこにはバイクのハンドルにプロペラがついたような機械で空を飛んでいる男がいた。赤く短い髪に黄色い目、クリーム色のタンクトップと迷彩色の長ズボンといった風貌の男だ。

「アニキー」

そいつは俺を見ながらそういった、俺はおもむろに窓を開けると『サルでも分かる家庭医学大辞典』を投げてやる。その分厚い書物は男の頭に命中し、男は落

ちていき、怪しげな機械だけが天へと昇っていった。

やっと物語がマジメな方向に向かっているのに、あいつをここで登場させるわけには行かない気がした。

ピンポンと、インターホンのなる音が聞こえたが無視だ……。

ピンポン、ピンポン、ピンポン！と3回ほど連続で鳴らされたが、無視していると、階段を上がって来るようなドタドタという足音が聞こえてきた。

「アニキー」

その声と同時に俺の部屋のドアは激しく開放され、バカ男が俺に飛び掛ってきた。

「鬱陶しい!!」

俺はその男に延髄蹴りを食らわすと、男は床にひれ伏し沈黙した。さて、出てきてしまったものは仕方ないので、こいつの紹介をしておこうか……。

こいつは鮫島さめじま 猛たけし、俺たちはタケシと呼んでいる、俺をアニキと呼ぶが別に血縁関係があるわけではない。年齢は俺より1歳年下で、エルルと同年だ。

能力はさつき見た機械だ、魔力を使って機械を生み出す力と、現実的な力と非現実的な力が合わさった異形な力だ。

俺はさっさと宝石をしまつて、そいつをずるずると引きずりなが

らリビングに降りた。

「たく・・・こいつは何をしに来たんだ・・・」

ちなみにだが、こいつと光喜の用事に付き合った日は、絶対に
くなくないことが起きる。

第3話「因縁の探し人」（後書き）

現段階でメインキャラとなる最後の一人です。
今回はタケシがメインになればいいのですが・・・多分、3話は悠
夜が全面的にメインです。

偽者？（前書き）

その朝、悠夜は巨大な黒いサメと不思議な女性の夢を見た、『私の名前を呼んで……』。

その言葉にもやもやした気持ちで起きたとき、窓から悠夜をアニキと慕うさめしま鯨島タケシ猛が現れた。

偽者？

「俺は心が広いんだ・・・用件だけは聞いてやる」

タケシと寝ぼけ眼の光喜を1階のリビングに引きずり降ろしてきて、俺は今、リビングとは

カウンターで仕切られたキッチンにいる。

リビングの壁には俺の黒いコートがかけられていて、今の服装は真っ黒のシャツと、同色

の長ズボンだ。別に黒以外の服を持っていないわけじゃないぞ、ただ、陽河家の正統後継

者は黒い衣服に身を包むという、訳の分からんしきたりがあるためそういう服が多いんだ。

まあ、俺自身も黒は嫌いじゃないからいいのだが、夜道ではほとんど透明人間状態だよ。

「いや、アニキがヤクザ組を1つ壊滅させたってうわさを聞いたんで」

タケシがやけにニコニコとしながらいう。俺はリアクションもそこそこに、白い質素なエプロンを

つける、今の服装で唯一黒くない部分だな。

「それにしても、すごいっすよね。今世紀最強の魔術師と呼ばれた男・・・もう、アニキの名前

を知らない奴はもぐりっすよ!!」

何のもぐりなんだよ・・・。俺は心の中でそうツッコミながら卵を割った。

「光喜、皿とつてくれ」

テーブルの前でうとうととしている光喜に呼びかける。適当に仕事を与えていないと二度寝する

からな。光喜はゾンビのようにヨタヨタと食器棚の方に歩き出し、なぜかラーメンのどんぶりを出

した。おいおい、それに目玉焼きを入れるのか？

「——そんなとき、俺は言つてやつたんすよ、お前らなんてアニキがらしたら昆虫以下だつて!!」

タケシよ、まだ喋っていたのか……。3分前からリプレイしていただけると助かるね。いや、やつ

ぱくだらない内容らしいのでリプレイはいらんか。

そんなことを考えている間にも、光喜は冷蔵庫から牛乳パックを取り出してラーメンのどんぶりに

注いだ。そして、ファラオの秘宝を持ち帰るミイラのごとくテーブルへと帰っていった。

「——やっぱ喧嘩は男の華つすよね!!」

タケシがまだ喋っていた。ほとんど聞いてないって……。

「俺は江戸っ子じゃねえよ……」

「エドツコつてなんですか？」

タケシがポカンとした顔で聞いてくる、そうだな、この世界には江戸はなかったんだな。

「パスタの名前だ」

「パスタ？」

説明が面倒なんで間違った知識をタケシに植えつけた、こんな感じでタケシの頭の中には、存在

しないはずの雑学が溜まっていつているのだ。そんな話を繰り広げているうちにも、光喜はラーメンの

スープを飲み干すように牛乳を飲んでいる。我が弟ながら、こいつはどんな寝ぼけ方をしているのだ。

「それで、結局は世間話をするだけのためにここに来たのか？」

俺がそついうとタケシが思い出した様子で顔を少し上げる。

「いや、実は変な情報を耳にしたんで・・・」

俺は焼きあがった目玉焼きを自分で出した、ラーメンどんぶりではない皿に移し変えながら聞いている。

「最近、アニキの名前をかたって冒険してる奴がいるみたいで・・・」

「俺の名前を？」

俺は目玉焼きの位置とベーコンの位置をそろえながら言った。はて、俺の名前を名乗って得すること

なんてあるのか？ 別に陽河悠夜という名前だからって、ダンジョンのモンスターが宝箱の引換券をくれるなんて経験ないんだがね・・・。

「そんな不届きものを野放しにするわけには――」
「ほっとけ」

俺は適当にそういった、別に俺は困らん。そりゃ俺の名前で悪事を働かれるのは迷惑だが・・・冒険するくらいどうってことない。

「でも、そいつ、黒い長髪で背中に呪印があっただっていう情報もあるんすよ!」

タケシがそういったとき、目玉焼きの皿をテーブルに置いた状態で固まっていた。

まさか、奴が・・・いや、奴だとしても、なぜ俺の名前を名乗る必要がある!? 奴の名前は知らんが、偶然同姓同名でしたなんて洒落にもならんオチがあるはずがない。だとしたらなぜだ? もしかして、俺を誘っているのか・・・あの日の復讐のチャンスでも与えるとしても言うのか。

『・・・俺が憎いか? 憎いなら、殺してみな』

また奴の言葉が頭の中で木霊する、どんな声だったかももう覚えていない・・・。どんな顔だったかも覚えていない・・・。あの時は分からなかったが、俺はあの時、呪印の他にも忘却術をかけられていたんだ。

だが、忘却術をかけられたのに、なぜ奴の言葉を思い出せる・・・。答えは簡単だ、奴が忘れさせなかったから。それは、なぜだ・・・。

いろいろと考えていると、急に頭から何か液体をぶっ掛けられる。俺が現実に目を向けたときに始めて

見たものは、ラーメンのどんぶりだった。

「悠夜、考えすぎ」

光喜も目が覚めたようでいつもの調子で言う、こいつは、あの場には居合わせなかったんだよな・・・。

「光喜・・・わりい、サン——」

俺は光喜に礼を言おうとしたとき、自分にぶっかけられた液体の匂いを嗅ぐ。そして、俺の頬が痙攣するのが分かる。光喜の顔も若干引きつっているようだ。

「てめえ!!　なに牛乳ぶっかけてんだ!!」

「ふえ!?　だってだって、悠夜が」

俺は光喜の頭をわしづかみにすると、アイアンクローをしながら光喜の頭を上下左右に振り回した。

とりあえず、光喜へのお仕置きも済んだので、俺は浴室へと足を伸ばした。シャワーの水温が暖かくなるのを待ち、ちょうどいい温度になってから壁に取り付ける。

「たく・・・光喜の奴・・・」

そういいながら、長い髪をかきむしる。ふと自分が移されている鏡に目をやった。俺の肩から肘との丁度

中間点ぐらいまで、黒いツタのような模様が書かれていた。足はふとももぐらいにまで伸びていて、その模

様は、背中にかかれた1つの不可思議な文字のようなものに繋がっ

ている。

最初はこの文字しかなかった、俺が強力な呪術や魔術を使っただけに、そこからツタ状の模様が伸びてくるのだ。

奴につけられたもの……。俺が一人前の呪術師となって調べたところ、これが俺の体中を覆い尽くしたとき、俺の理性は崩壊するらしい。そして、この文字のようなものの意味は『全てを奪う』という意味らしい。

これの解除方法は1つ、術者が決めたキーワードを言えばいい。

「奴が……。ついに奴が……」

俺は肩の呪印をなでるように触りながら自分の中で疼いている殺意の火種を沈めた。

偽者？（後書き）

特に回想もなく、悠夜の因縁の相手の話が来ていますが。まあ、そのうち回想みたいなのをする予定です。

正直、なくてもいいかも、見たいないい加減な気持ちもあるんですけど・・・。

決着の地？（前書き）

朝から夢見最悪なときに現れたタケシ。

彼が来た理由とは、偽者の悠夜がいるという噂を悠夜に知らせるためだった。

最初は興味のなかった悠夜だったが、その偽者の背中に母親の仇である男の目印・・・悠夜と同じ呪印が刻まれていると聞き、偽者を探すことを決意した。

決着の地？

シャワーを止めて浴室から出て服を着た後、スポーツタオルを1枚持って長い髪を拭きながらリビングに戻った。そして、リビングの光景を見た俺の思考回路はしばし停止する。

テーブルの上にはピリ辛のスナック菓子、ソファーには光喜がいるチリソース。このチリソースは世界一辛いといわれるハバネロがふんだんに使用された、いわば厳選された1品だ、あまりに辛いいため購買者が少なく買うのに苦労した奴だな。そして、絨毯にはタケシが転げ回っている。

「何やってんだ・・・」

俺は一目瞭然だが、一応事実確認のために聞いてみた。

「ポテチにね、こっそりこれをつけて食べさせたのよ」

光喜が輝かしいまでの笑みで俺に教えてくれた、分かってたよそんなこと・・・。

俺はタケシが水を求めてキッチンまで走っていったのを確認して、壁にかけてあったコートを羽織った。

「で、俺の偽者はどの辺りにでるんだ？」

俺はキッチンでまさに浴びるように水を飲んでいたタケシに聞い

た。

「か・・・かは・・・へ・・・」

タケシは声にならない声を出す。その後、タケシとともに会話が出来たのは15分後のことだった。さらに、タケシの証言を元に俺の偽者を探しに出たのは、1時間後のことだ。

「タケシのせいで遅れたね」

光喜が嫌味っぽく言う。

「お前のせいだろうが!!」

タケシが顔を真っ赤にして反論する。怒っているからか、それとも激辛モードがまだ続いているのか、どちらにしろ真っ赤な顔だ。

「いいから、さっさと案内しやがれ」

俺がタケシを睨みながら言う。

「俺のせいっすか!？」

タケシは口を開けたままでしばし固まり、その後、深いため息を着いた後歩き出した。その後、地下鉄という移動手段を駆使して目的地であるダンジョンに到着したのだった。

「おい・・・本当にこんなとこにいるのか？」
「うわさだとそうっすね」

そこは、かなりレベルの低いダンジョンだった。いや、レベルの低いのは目を瞑ろう、だがこれはないだろう・・・。

俺の目の前にはダンジョンというよりも、お菓子の家ならぬお菓子の城が立っていた。色とりどりに彩られた城壁の上部には、クリームのような装飾。城門はクッキーとキャンディーをイメージしたデザインとなっており、城を囲む溝にはオレンジジュースのような液体が流れている。

おい、俺の偽者よ・・・。なぜ、ここを選んだ。俺のイメージと、いつもの少しは考えて欲しいものだね。

「ピキヤーーーー」

そして、モンスターのご登場。容姿は・・・人型のクッキーを大きくしたかんじだ、それ以上でもそれ以下でもない。

「・・・・・・・・」

俺は無言のまま、道端の空き缶を蹴るかのごとくつま先で軽く蹴った。すると、モンスターの体はマジでクッキーのようにもろく崩れていった。

「・・・・・・・・本当にここにいたんだよな」

俺はタケシを睨むように見る。自分でも分かるぐらいにダークなオーラが体から立ち込めるようだ。

「ま・・・間違いないっすよ！！ やだなー、アニキってば！！」

タケシの額からは汗が滝のように流れている。まあ、疑っていても仕方ない。ここにあの男がいる
かも知れないんだ・・・行くしかないよな。

そして、俺たちはダンジョン攻略に向けて歩き出したのだった。

「ピキユ」

「ピキヤー」

「ピキユキユ」

門をくぐった瞬間にクッキーが3人前お出迎えに来た。

「タケシ・・・任せた」

俺がそういうと、タケシは魔力でなんかごつついガトリング砲を出した。

しばし、擬音のみでお楽しみください

ドドドドドドドド・・・ガガガガガ・・・バラバラバラ・・・

ボロ・・・ベキヤベキヤ・・・

クッキー3人前は脆くも全て砕け散っていった。

「ひどいことするね」

光喜はそういいながらも、モンスターの破片を口に入れていた。
落ちているものを拾い食いしちやい
けません。というか、それは食っても無害なのか？

俺たちは城の内部を目指して歩き出した。トラップもなく、分かれ道もなく、モンスターも他には出てこず、俺たちは驚くほどにあっさりと城の内部へと侵入していった。すると、内部に入った瞬間に3つほど道がそれぞれ伸びている。

「どれかな？」

光喜がおとぼけた声でそう言った。すると、タケシが鼻を鳴らして得意げに前に出た。

「まっかせてください!!」

タケシは俺にそういうと、今度は魔力で小さなネズミのような口ポットを5体ほど作り出した。

「マウスボムバージョン3・1!!」

コンマ1はなんだ・・・修正パッチでもあてたのか？

「こいつは偵察も出来るし、敵を見つければ爆発するという優れものなんですよ」

タケシはそういうと、ネズミたちを一斉に放した。

「ちょっと待っててください。すぐに階段を見つけると――」

タケシが言いかけたとき。その場からあまり離れない場所で爆発音が響く。すると、それにつられる

ように反対方向でも爆発音が響き、立て続けに5つも爆発音が城の中に響いた。

「全部敵にぶつかったみたいだね」

光喜が手の平を額に当てて、わざとらしくキョロキョロしながら言う。

その直後、ゴゴゴゴゴといやな地鳴りのようなものが聞こえてきた。なんとなくだが、俺は近くの壁を

蹴ってみた。すると壁はクッキーのように簡単に穴が開いた。いや、欠陥住宅にもほどがあるだろう、

寝室の天井どころか床までがアスベストで覆われ尽くした家だとしても、この城よりかは100倍住み心地がいいだろうね。

「おい・・・今の爆発で柱がなんか壊したんじゃないか？」

俺が頭の上ではてなマークを出していた2人に言う

「え・・・まじっすか？」

「ふえ？」

タケシ、光喜の順に顔が変化した。タケシは引きつった笑み、光喜は目を丸くして首を傾げる。

そして、天井が崩れてきたのはその3秒後のことであった。

決着の地？（後書き）

自分で書いててなんですけど男3人は華がないな……。まあ、ここまで来てエルルやメアを連れてくるのもなんだし貫き通すが、タケシを使うときはきを配るようにしないとな。

タケシは必要？（前書き）

タケシの情報により、悠夜の偽者を探したに來た悠夜と光喜とタケシの3人。

だが、その現場はキック一撃でバラバラに粉碎されてしまうようなモンスターや、お菓子の家ならぬお菓子の城なダンジョンだった。お菓子の城に入った3人にはタケシのミスで崩壊してきた天井が迫っていた。

タケシは必要？

俺は頭上から降り注いでくる瓦礫に向かって手をかざした。

「防御用魔方陣展開！！」

すると、空中に黄色い魔方陣が現れ瓦礫から俺たちを守る盾となった。魔方陣が少しブレるように振動し、瓦礫の重量が伝わってくるようだ。

「光喜、時間止める！！」

「ふえ！？ あ、うん」

光喜は放心状態から我に帰り魔力を放出する。俺は魔方陣を消したが、瓦礫は空中で静止したまま落ちてくることはなかった。とはいっても、このままここにいるわけにもいかないの、その場から離れてることにする。かなり離れた場所に来てから光喜が魔法を解くと、瓦礫が降り注ぐ音が聞こえてきた。

「タケシのせいで危なかったね・・・」

「グサッ！！」

光喜の言葉にタケシは何か突き刺さるような擬音を口で言っ
て体を反り返す。

「ほら、あっちに階段あるっすよ」

タケシはさつさと話題を変えると先頭を歩いて階段へと向かった。本当にあの男がここにいるのだろ

うか……。俺はあの男の実力を知らない。俺の記憶にあるのは、誰か検討もつかなくなってしまった母

の死体を見下している、背中に俺と同じ呪印があるあの男の姿。この呪印はかなりハイレベルな呪印

だから、きつとすごい魔術師だったに違いないのだが……。そんな奴がここにいたら、この城は崩壊しているのではないだろうか？

俺たちが階段を上がると、そこには誰かが立っていた。

「ん？ あれって——」

「偽者発見！！」

俺が言いかけたとき、タケシはバズーカータイプのエネルギーバスターを魔力で作り出し構えた。そ

して、俺が静止をかける間もなくエネルギーバスターをぶっ放した。

「転送用魔方陣展開！！」

俺は今度は緑の魔方陣を足元に出す。すると、俺の体は黒い光に包まれた。そして、一瞬でその人

物とエネルギーバスターの間に入り込んだ。この魔方陣は一定距離をテレポートするための魔方陣だ、

ただ、自分から離れた距離にある物を転送させることはできないので、ほとんど自分が対象となる。

「え？」

俺の後ろにいた人物が声を上げる。俺とそいつにはバスターが迫

っていたが、間一髪防御用の魔方陣が間に合った。

「アニキ!？」

タケシが驚いた口調で言う。俺の後ろではヘナヘナとその人物がその場に座り込んだ。

「なんでかばうんっすか」

タケシが俺を咎めるような目で見ながら言う。俺は手に魔力を集中させて、小さな黒い球体を作り出す。タケシに向かって投げた。タケシの腹部には黒い球体が沈み、奇声を上げながらタケシは階段を転げ落ちていった。

「たく・・・よく見えやがれ・・・」

俺は後ろにいた人物に目をやる。短い水色の髪をした、男か女か判別が難しい顔立ちの小柄な剣士だった。俺の探しているのは、黒い長髪の背の高い男だ。どうかんがえても、コイツは違うだろ・・・。

「背が縮んだのかもよ？」

光喜が妄言を吐いたが、気にせずにその子に手を差し伸べた。

「立てるか？」

俺が言つとその子は「はい」と一言いって、俺の手を取って立ち

上がった。声からして男だなこいつは。
俺たちが立っている、男の子が戦闘していたであろう、クッキーが襲い掛かってきた。

「しまった、剣を！！」

男の子がそういういながら、さっきの騒動で手放してしまった剣を拾おうとした。んなことしてたら間に合

わんど。俺はしゃがみ込んだ男の子の頭上に軌道を置いて、クッキーのもろい図体に鋭いけりを入れた。

案の定、クッキーはボロボロと碎けて散っていく。

「あ・・・」

男の子は放心状態でそのクッキーの破片を見ていた。

「わりいな、獲物取っちまって。賞金はお前にやるよ」

俺がそういったとき、男の子は俺を見上げるように立ち上がった。
なんか、やたらとキラキラした純粹な

目が俺に向けられているのは気のせいだろうか。

「危ないところをありがとうございました」

男の子がそういったと同時に、階段からタケシが復活したようだ。
というか、この子はやっぱり危ない状

態だったのだろうか・・・。正直このモンスター相手に、剣は必要ないと思うぞ。

「ボク、ダンジョンにくるのって初めてで・・・」

男の子がもじもじしながら言った。だと思ったよ、こんなダンジョンに来る奴は頭に電波を受信し続けているようや奴か、初心者しかいないだろう……。ちなみに、俺はどっちにも属さないぞ……。

俺はポケットから薬草と火炎の石、それから、チョコレートを出した。ちなみに、薬草は回復アイテム、火炎の石は敵に投げると炎属性の魔法攻撃、チョコレートは俺の気持ちだ酒でも良かったのだがな、さすがにそれはまずいだろう。そして、その三つをその子の手を持たせてやった。

「がんばれよ」

そついいながら、その頭をなでる。

「はい……。なんか、いい人に会える日みたいです。さっきも、黒い長髪の人に助けてもらって」

その子がそういったとき、俺たちは目を見合わせた。

「ねえねえ、その人なんて名前が言わなかった？」

光喜が自分と同じくらいの目線の男の子に尋ねる。こうやって見ると、光喜がいかにかチビがわかるよ、まあ光喜がどれくらい小さいかは他の機会に語ることにして、今は名前が気になるな。

「はい。陽河 悠夜って名乗ってました」

男の子がそういったとき、光喜が俺を見た。どうやらビンゴだったらしいな……。こんなへボダンジョンにいるとは……。

「そいつ、どっちに行ったかわかるか？」

俺が尋ねると彼はこのダンジョンの地図を広げて俺の偽者が行ったという3階への行き方を教えてくれた。俺たちは奴に逃げられる前に急ぐことにした。

「あの……。あなたの名前は？」

俺は立ち止まって振り返ると、今日初めての笑顔をその子に向けた。

「その陽河悠夜の追っかけだよ」

俺はそれだけ言うと、その場から走り去った。通路を疾走すること3分、タケシがバテたため歩くこと6分。俺たちはようやく次の階への階段にたどり着いた。

「タケシおそ〜い」

光喜が後ろから来たタケシに言う。

「こ……。光喜は何でそんな速いんだ!？」

タケシがぜえぜえといいながら光喜に言う。俺の身体能力の高さは知っているので、俺には疑問を

ぶつけるような野暮なマネはしない。だがタケシよ、こいつはこんな小さくても俺の双子の弟だぞ、それぐらいの身体能力がなかったら困るぜ。

「ふえ？　だつて、時間魔法使つてスピードアップしてるもん♪」

どうやら、それは俺の一人よがりだったらしい。光喜・・・ダンジョンを移動するだけで魔法を使うか普通！？　かくして、足手まといになっている気もするタケシに休息の時間をやるわけでもなく、俺は階段を着々と登っていく。許せよタケシ、ライオンは自らの子供を崖から落とすものなんだ。まあ、ライオンの独自の文化と俺の短気さには全く持つて共通点など存在しないことは確かだな。

階段を登り終わった俺が見たのは、床が一回まで吹き抜けになった部屋だった。どうやら、城に入つてすぐの爆発の影響は2階上のここにまで影響していたようだな。

「ここは俺に任せてくださいよ！！」

タケシはそういいながら、朝俺の家に飛んできたプロペラを魔力で作り出す。まず1つ作った後また精神を集中して2個目を作ろうとしているようだ。

「ちょっと待っててください、人数分作りますから」
「いや・・・いい」

俺はタケシの言葉を無視して防御用の魔方陣を穴の上に出現させる。俺と光喜はその上を悠々と歩いていき、タケシはポカンとした表情で俺たちを眺めていた。

「どうした、プロペラでついてこないのか？」

俺が言うつとタケシは肩を落として泣き泣きついてきた。このダンジョンにおいてコイツは全く役に立ってないからな。

タケシは必要？（後書き）

タケシが初登場の話なのに、タケシの見せ場がなく作ろうとしてもなぜか作れないという・・・。

やっぱり俺の中ではタケシはやられ役に近い存在なのかもしれない。せん。

因縁の対決？（前書き）

タケシの情報で偽悠夜を探しに来た、悠夜と光喜とタケシ。

タケシはほぼ見せ場もなく、特に役に立たないまま、ダンジョンにいた少年から偽者が向かった先についての有力な手がかりを得て、悠夜たちは偽者の元へと向かっていった。

因縁の対決？

俺たちが長い廊下を渡った先にあつたのは、戦いにはおあつらい向きといった闘技場のように広い部屋だつた。その部屋の中央では魔法使いと、巨大な青いわたあめに目と手足がついたようなモンスター

がいた。モンスターはどっかの高速道路を疾走しているデコトラよりもでかく。それにくらべて、魔法使いのほうはなんともまあ小さな子供だ……。というか、さつきから杖で殴りかかっているようだが、それが君の戦法なのか？

「杖とハンマーを間違えたのかな？」

光喜がマジメな顔で言う。

「そんなわけあるか……。どうせMPが切れて魔法が使えないんだろう」

最悪のケース、魔法を覚えていないという可能性も否定できないがな。俺の言葉の後にタケシがモンスターを指差す。

「けど、あれって一応ダンジョンのボスっしょ。俺なら引き返すけどな……。」

てめえは何をぬけぬけとぬかしてやがる。その退路である部屋の床をぶち壊した原因はどこのどちら様でしょうかね。

「あ・・・」

タケシがそう小さく呟き、俺と光喜は目を見合わせた後ため息をつく。仕方ない、見殺しにするのも癪だし助けにいつてやるか。俺がそう思い、一步踏み出した瞬間、俺たちとは反対側にある通路から炎がの塊が飛んできた。その炎はわたあめに直撃し燃やし尽くしていった。まあ、燃やすというよりは砂糖なだし溶かしたという例えのほうが近い燃え方だな。そのわたあめのお化けと戦っていた魔法使いの子はヘナヘナと座り込んだ。どうやらかなり消耗しているようだな。

「大丈夫かい？」

すると、爽やかな感じの声が聞こえてきて通路から誰かが現れた。その瞬間、俺の中で何かが憤るのを感じた。

「あ・・・ありがとうございます」

魔法使いの子が例を言う。遠巻きだったので分からなかったが、声的に女の子だろう。その魔法使いの子は自分を助けてくれた黒い長髪に黒いコートを着た人物の手を取り立ち上がった。

「ふええ！？ あれってもしかして」

光喜が訳のわからん驚き方をしながらそいつを見る。

「えつと・・・お名前は？」

「俺かい？ 俺は陽河悠夜」

俺たちの詮索していた事実を裏付けられるかのようにそいつはそう名乗った。まだ遠いから顔までは見えない。だが、俺の名を名乗る黒い長髪の男・・・。そんなもんアイツしかいねえよ。

「・・・見つけたぜ」

小さくそう呟いたとき、微妙な違和感があった。遠くていまいち核心はないが・・・もしかして・・・。

俺が考えていると、その陽河悠夜さんは俺に気が付いたようで視線を一度こちらにやったあと、もと来た道を走り出した。

「追うよ悠夜！！」

光喜の声にせかされて俺は奴を追い始めた。途中に未来の大魔法使いちゃんにダンジョンを抜けるため

のアイテムを渡していたため、少し時間をくったが、奴はそれほど速いスピードでは移動していなかったため

次の部屋で俺たちは奴を追い詰めることになった。

ちなみにだが、奴を追い詰めるにいたってなんのドラマもアクションも存在していない。ただ、走ってただけ

だ。あえて何か言うとしたら、タケシが遅い、以上。

「追い詰めたぜ偽者！！」

一人だけ息を切らしながらもタケシが猛々しく俺の偽者さんに言う。すると、そいつは俺たちの方に向き直ると何か小さな声で呟いた。さっきよりも少し偽者との距離が短い、さっき抱いた違和感がより鮮明になつてくる。やっぱりだ……。俺は自分に確信を持つために偽者へと近づいた。

俺は偽者との距離を縮めていくが、偽者は逃げることも、迎撃することもしてこない。そして、偽者との距離が2メートル前後になる。ここまで近づかなくても俺は核心をもてたのだが、中途半端な距離で止めるのもなんだから会話に支障がない距離で止まることにした。

「ほ、本物だー!!」

すると、偽者さんのキャピキャピした声が響いた。服装と髪型は俺と同じだが、偽者はスカイブルーのキレイな瞳をしていた。あと、この距離だと俺が抱いていた違和感がはっきり分かる。背が低い、それに、肩幅も狭い。そしてとどめの一撃としては、コートの上からでは少し分かりにくい胸に膨らみがあることだ。結論を言おう、コイツは女だ。俺が探している奴は男だ。

「お久しぶりです」

彼女はいきなりそういつて頭を下げた。お久しぶりです？ はて、俺は自分と同名の女の子に知り合っていないのだがドコのダレでしょうか？

「このまえ、モンスターに襲われて大変だったところを助けてもらった僧侶です」

そういつて彼女は自分の髪を引っ張ると、それはカツラだったよ
うで簡単に取れ、黄緑色の短い髪が姿を
あらわした。そういえば、こんな子を助けた覚えがあるな……。
たしか、レベルの高いダンジョンと知らずに
やってきた、レベル2の初心者だ。普通は僧侶一人でダンジョンに
は乗り込まないのだが、それさえも分か
らずやってきた初々しい子だな。

「えっと……。背中に呪印ある俺の偽者って……」
「あ……。はい……。じ、実は……」

そういつて彼女は俺に手帳と名刺のようなものを差し出した。名
刺のようなものを見ると『YU-YAファンクラ
ブ』会員ナンバー86番 アナエルと書かれている。アナエルとい
うのが彼女の本名なのだろう。そして手帳
を開くと、俺の隠し撮りと思えないような写真があり、その中
には背中の呪印がはっきり映し出された写
真まであった。

「裏取引で買い取った写真なんです。この前のイベントの時はタト
ウーシールで呪印まで再現したカッコをして
たんです」

彼女は顔を真っ赤にしながらそういつた。

「僧侶も辞めて、悠夜さんと同じ魔法戦士に転職して、同じメーカ
ーのコートも買って……」

つまりなんだ……。よく言えばコスプレ、悪く言えばストーリーカ

「じみたことをしていたわけだ……。俺のマネで初心者を助けるような活動がしたかったが、自分もレベルが低いため、こんなへんぴな所でした人助けがでない」と。

「……くく……ぷっ」

後ろでは光喜が笑いたいのを精一杯こらえているのが分かる。

「あの……。もしかして迷惑でしたか？」

彼女はそういいながら俺の顔を覗き込んできた。偉く純粋な目だ……。俺はこういうのには甘いんだよな。

「ほら……。お前も帰れなかったんだろ？」

俺はさっきの魔法使いの子にも渡したダンジョン脱出用のアイテムを彼女に渡した。そのあと、彼女の頭にポンと手を置いた。

「俺を参考にするのは構わないが、マネをするのはやめろ……。俺の名前を聞いただけで襲ってくるような奴もいるんだから」

俺は頭の中でこの前戦った亜人やヤクザを思い出す。こんな子が奴らに襲われたら5秒で負けるだろう……。

「わかったか？」

「は、はい」

彼女からの返事をもらった後、彼女の俺のマネをしていた期間の武勇伝や俺のファンクラブの全貌などを

聞き、ひとしきり話し終わったあと彼女はアイテムを使って帰っていった。その間、俺の顔が穏やかだったのは無理やりではなく自然にそうなったものだ。

「じゃあ、俺たちも帰りましょうか」

「タケシ・・・」

俺に背を向けて帰ろうとしていたタケシを呼び止めた。

「は・・・はい？」

「まさか・・・お咎めなしだとは思ってないよな？」

自分でも分かる。さっきまで彼女と話していたときとはオーラが違う・・・。殺意と憎悪が霧のように立ち込めるものだとしたら、このお菓子の城は真っ黒に染まっているだろう・・・。

かくして、この日の騒動はこれにて終了である。この後タケシがどうなったか・・・それを全て伝えてしまうと教育上よくないことが起きるので秘密としておこう。

それにしても、あの写真は誰がいつとったんだ・・・。俺は背中
に軽い寒気を感じながら帰路へとついた。

因縁の対決？（後書き）

まあ、因縁の相手はこんなところには出ません。

もつとちゃんとした舞台で出る？ 予定です。

今回の話は、タケシというキャラが居たということだけ頭に残してもらえればそれでいい話です。

第4話「魔法の試験」(前書き)

寒さも一層辛くなってきた時期の他愛もない？日常の出来事。

第4話「魔法の試験」

昨今では気温もだいぶ下がってきたが、一方でカップルがイチャイチャと熱さを増してくる時期。

そう、クリスマスという名のイベントだ。そして、俺の周りでも毎年、年甲斐もなくサンタクロースを

信じはしやぎ続ける光喜が……。てなことはないんだなこれが。年中無休でうるさい光喜が静かになってくれるわけではないが、盛り上がるわけでもない、いうなれば現状維持している状態だ。

なぜこういうことになっているか、答えなんて簡単だ。クリスマスというのも元々キリストに関連

した聖なる行事だ、だが、この世界にはキリスト教はないし、キリストも歴史上存在しない。そりゃ

そうだよな、俺たちから見たらキリストは異世界人なんだからよ。

そう毎年、この時期は何事もないかのように過ぎていった。俺は今年も年末は家でゆつくりとで

きると思っていたのだが……。安寧というものは簡単に音を立てて崩壊するものらしいな。

「い……。いくよ」

光喜が汗を流しながら真剣な顔をしている。俺はリビングのソファーに座りながらその様子を見

ているのだが、俺と光喜との間には念のために防御用の結界が張つてある。少し離れた場所では、エルルとシャリーナが見学している。

「聖なる炎よ我は望む、今こそ文明への灯火へとなれ!!」

光喜が足元においてある紙に書かれた文字を読んでいく。すると、光喜が両手を前にかざすと

プスッという小さな音を立てて両手から煙が出て来た。

「ふえゝ、なんでゝ」

光喜が紙を恨めしそうに見ながら言う。紙は悪くないぞ。コイツが唱えていたのは炎属性の魔法の中でもかなり低等な奴だ、魔力の素質さえ合えば幼稚園児でも打てるかもしれないな。まあ、光喜に炎の素質があるとは思っていなかったが、なぜ煙だけ出るんだ？ 普通は何もでないか、炎が出るかの二択なんだぞ。

「ある意味才能かもね」

「シャリーナ、そんな言い方しなくても・・・」

シャリーナの言葉を咎めたエルルは、シャリーナの両手によって柔らかそうな頬を左右に引き伸ばされる。俺はそっちの方を無視して光喜のほうを向いた。

「別にいいじゃねえか、お前には炎の素質がないだけなんだからよ」
「よくないよー！！ 次の試験で1つでも多くの素質を見せておきたいんだもん！！」

コイツが言っているのは学校の試験のことだ、まあいわゆる魔法学校というやつだな。ここですよやくでたのでお前ら学生だったのかよと思いの方もいるだろう、そうだな、まずは魔法学校の制度

を覚えておかないといけないか・・・。

そもそも魔法とは素質がないとどうしようもない。俺は闇の素質はかなりあるが逆に光の素質は皆無に近い、なので、闇の魔法は練習しなくてもドンドン使えるようになるのだが、光の魔法はどんなに練習したって無駄といっていいほど伸びない。そんなかんじなので万人に共通の魔法の授業

というものを受けさせることなど不可能なのだ。

だからこそ、魔法学校というものは塾や習い事のように任意で受けるものであつて決して義務ではないのだ。

俺は基本的な魔力の使い方だけ習うと後は飛び級を繰り返し、9年の課程を3年ほどで終了させ

今はもう卒業した。光喜は7年目だが、この7年間の授業は全て基礎魔法と光属性の授業のみ。

他の授業は素質がないために受けることが出来なかったのだ。

「絶対来学期からは授業増やすんだから・・・」

光喜はそういいながら新しい炎の呪文を探し出す。光喜が言うようにもうすぐ期末テストがある。

魔法学校の期末テストでは基礎学力・魔法学・薬剤調合の他に実技試験があり、この実技試験

の結果により次の学期からとれる授業の種類と数が変化してくるのだ。

「——いでよ炎の精よ!!」

光喜がそういったとき、手の平からは真っ黒なすすが噴出しただけだった。

「炎の素質がないんだから仕方ないって・・・」

俺が言つと光喜がぷくつと頬を膨らませる。

「おかしいよ、悠夜には炎の素質もあるのになんで双子の俺にはないのー!!」

知るか。俺にはお前が持っている光属性がないように、双子だからって素質が同じとは限らないんだよ。

「でも悠夜は10個以上素質があつて、俺は2個なんてズルイよ」

光喜がバタバタと手を動かしながら言う。再度言う知るか。

まあ俺には、闇・呪・幻・氷・雷・炎・水・空・風・地・癒・樹の12の素質がある。ちなみにだが普通自分の素質を言うときは得意なものから順番に言うものだ。

それに対して光喜の素質は、時・光の2つだけだ。しかも時の素質は非常に珍しいため授業が存在していないので独学で学ぶしかないのだ。

「こ・・・光喜君はきつと他の素質があるんだよ、別のも練習してみたら?」

エルルが光喜にフォローを入れる。確かエルルは樹・炎・水・風・地・癒の6つある。まあ俺の数を紹

介したあとだからピンとこないかもしれないが、7つというのは超エリートだ。ただ、使える魔法が多くても

魔力の少なさがたたってかいまいち役にたったことはないがな。

ついでだから、シャリーナは地・雷・炎の3つ。この場にはない
タケシにいたっては鋼だけである、しかも、
タケシの鋼は鋼属性の中でも特殊なものらしく授業がない……。
なのであいつは魔法学校には基礎学だけ
学びに行っている。

「ふえー！ でも、やっぱり炎ってかっこいいじゃん」

光喜がのんきに言う。お前はマジメにやるきがあるのか……。

「仕方ないわね……。私が直々に地属性の魔法を教えてあげるわよ
！！」

シャリーナが胸を張って言う。お前はいつから人を教えるほど成績が優秀になったのかね？ 確か使える魔法の種類は光喜と大差なかったと思うぞ。

「というわけで、エルルは悠夜から氷か雷を習いなさい！！」

シャリーナが命令口調でエルルに言う。エルルはビックリしたように肩を吊り上げてあたふたとしている。

「え……。あ……。で、私には素質がないし……。今ある素質を伸ばすほうが……」

「じゃあ伸ばしてもらいなさい」

じゃあってなんだじゃあって。エルルはしどろもどろしながら俺とシャリーナを交互に見る。光喜は「地属性って地味っぱいからやだ」とかいいたながら絨毯の上でゴロゴロと駄々っ子のようにのた打ち回っている。

「お前な・・・俺らで教えあつより、俺らがお前らをそれぞれ教えるほうが効率がいいだろうが」

俺が言つとシャリーナは不機嫌そうに俺を睨む。何が納得いかないんだよ。シャリーナはその後エルルの方を見る。

「あ・・・私は・・・その、悠夜お兄ちゃんの言つとおりだと思う・・・けど」

エルルがもじもじしながら言つと、シャリーナの不機嫌度はMAXに達したことが顔を見て分かる。その後、一瞬ハツと何か気付いた表情をしたあと、にまあとした笑みを浮かべた。何を考えたコイツは。

「じゃあね、今の現状を打破するべく、コーチのトレードを提案するわ!!」

シャリーナがニコニコ顔で俺に向かって言つ。コーチのトレードということは俺がシャリーナを教えて、エルルが光喜を教えるということだな。

「なんでわざわざ——」

「私は呪術の類が使いたいようになりたいのよ!!」

俺の意見などがき消すようにシャリーナが言つ。なんだかお前に呪術を教えたくないのだから。やたらめつたら人の記憶を消したり、人の心を操作して奴隷にしたり、妬ましい奴をカエルに変えたりしそうだからな。

「じゃあ決定ねダンジョンに行くわよ!!」

じゃあの意味が分からん、誰も賛成していないぞ。それになぜ場所を変える必要があるのだ。

「こんな狭いところでやったら危険だわ、私だったら5分で悪魔召喚まで到達しかねないからね」

えらく自信满满だな・・・だがな、悪魔召喚には呪術の素質以外にも閻属性と膨大な魔力が必要なんだぞ、お前じゃ50年かかって無理だ。

「それじゃレッツ・ゴー!!」

そして俺たちは流れに流されてダンジョンへと旅立った。なんでなんだろうな・・・。

第4話「魔法の試験」（後書き）

なんか魔法についての云々がかなり出てきたが、特に覚えなくても支障はないと思います。

関係する出来事がある場合、可能な限りは簡単な説明を入れていきたいと思ってますし。

今回はエルルの影で薄くなってしまっていたシャリーナをメインにしたかっただけの話です。

シャリーナの聖地？（前書き）

光喜&シャリーナに魔法学校の期末試験という難関がたちだかった。優等生のエルルが光喜を、既に卒業生となっている悠夜はシャリーナをそれぞれ教えることになった。

シャリーナの聖地？

ウェルカム・ダンジョン。そんなわけの分からん言葉がよく似合
いそうなダンジョンに俺たちは
来ていた。というか来てしまった。ダンジョンの入り口のゲートに
は両端にピエロの巨大な置物
が置いてあり、内部までへの道には赤い絨毯が敷き詰めてある。

「なんか最近、普通のダンジョンに来てない気がする・・・」

お菓子の城に、死神だらけのダンジョンなのかどうかも分からん
ダンジョン。俺の快適な冒険
者ライフは一体どこへ行ってしまったのだろうか。もしも、迷子に
なってるのを見つけたら連絡し
てくれ、たとえそこが異世界だとしても迎えに行くから。

俺は煙草を吸いながらやる気ないオーラを全開にして周囲に振り
まく、だがそのオーラを悟っ
てくれるほどするどい人間はここにはいないようだ。

光喜はいつもと同じで常に無邪気なニコニコ笑顔、エルルはシャ
リーナと何かこそそそと話し
ている。

「——— ためには、まず家族から責めるのも1つの手なんだからね」

シャリーナが何かエルルに言っている、エルルはおもちゃの水鳥
のように赤くなった顔を上下
させていた。そして、ひとしきり話したあとシャリーナはエルルの
肩を叩き俺に近づいてきた。

「じゃあ、とつとと行くわよ、私が教えさせてあげるんだから手抜きは許さないわよ」

シャリーナが偉そうにいいながらダンジョンとは別の方向に歩き出す。

「おい、このダンジョンでするんじゃないのか？」

俺が尋ねると、シャリーナは俺の方に向き直る。

「光喜とエルルはね、私たちは別のところで特訓よ!!」

別のところって、光喜たちと離れた場所で特訓する意味なんてないだろう。どうせならみんなですたほうがいいんじゃないか？ 俺のそんな疑問などおかまいなしにシャリーナは歩いて行く。

こいつは昔からこんな奴だ、昔も今も苦手な奴だ。もっとも、俺と目を合わせることが出来ない内気なエルルに、馴れ馴れしくつついてくるタケシ、会話が成立しないメア、俺からしたらどういっても苦手な連中だ。

いや、それだと少し語弊があるか……。俺は人付き合いというものが苦手なんだな。光喜は逆に誰とでも付き合えるようだから、その点、奴がうらやましいよ。

「何してるのよ、早くしなさい!!」

俺の遙か前方からシャリーナの怒鳴り声が聞こえてくる。アイツは俺に教わるうという気があるのだろうか？

シャリーナに連れられ、ワープポイントと電車を駆使して俺たちはある町まで来ていた。

「思ったよりワープポイントがこんでたわね。おかげで予定を20分もロスしてるわ」

シャリーナが改札から出たところで車道を眺めながらそういった。

「で・・・ここでどうするんだ？」

俺は一応聞いてみる。改札を出たところにはデカデカしくもアースタウンと書かれた看板がある。

「いい、このアースタウンは地属性に関連したものがわんさかある町なのー！」

知ってるよ。地属性なんてマイナーで地味な属性を取り入れちまったらばかりにさびれつつあるど

うしようもない町だろ。マニアックな町は全てアキバのように繁栄するとは限らないんだぜ、最もこの世界にはアキバはないがな。

「地味じゃないー！！ 地属性の地と地味の地は意味が違うのよー！」

一緒だろうが・・・まあ、そんなことを考えていても仕方ないので今後の方針を聞くことにする、まさかショッピングとか言わないでくれよ。

「無論決まってるわ、ここで買った装備を駆使して試験でいい点数

を取り、火属性や水属性を見返してやるのよ」

ようするにショッピング&私的なもののために俺はここにいるわけだな。

シャリーナはそれだけ言うと、俺の反論など長期休暇前の担任の話し程度にしか聞いていないらしく、ほぼ無視を決め込んで歩き出した。

しばらく歩いてシャリーナは1つの店の前で立ち止った。ウインドウには濃い赤や赤茶やこげ茶、よ

うするに似たような色ばかりの魔石が並んでいた。このタイプの魔石は持つてるだけでわずかながらも魔力が上がる奴だな。

「こういつのつて、うさんくさいわね・・・」

シャリーナはマジマジと見ながら小さく呟いた。俺はこの世界の全てがうさんくさいよ。

「なんかこう、確実にドンと強くなれるものってないのかしら？」

ねえよそんな都合のいいもの。

「あんたは知らないの伝説の秘薬の作り方とか、大精霊と契約する呪文とか」

シャリーナがマジメな顔で聞いてくる。こいつは本気で魔法を習得したいと思ってるのだろうか？

「あるにはあるがリスクが大きすぎる、よばよばの婆さんにはなり

たかねえだろ」

俺が言つとシャリーナが少し悩む。悩むなよ。

「それもそうね・・・」

少し残念そうに言いながらまた歩き出した。構わないからやって頂戴！！とか言われたらどうしようか
と思つたぜ。俺は半ば本気でそう思いながらも煙草の箱を取り出して、一本加えるとライターで火をつけた。

「なんで魔法で火をつけないのよ、あんたなら呪文詠唱なしで火ぐらい出せるでしょ」

「めんどくせえ」

シャリーナの質問に適当に答えると俺は煙を吐き出した。すると後ろから誰かが肩を叩いてきた。

「君には煙草はまだ早いんじゃないですか？」

そこには一人の優男が立っていた。青い髪が肩まで伸びていて、眼鏡をかけた線の細い男だ。

「ウゲツ！！ 鏡志じゃん！！」

シャリーナが明らかにいやそうに言う。

「先生をつけないさい」

コイツは木戸きと 鏡志きょうじ、魔法学校の教師だ。俺はコイツが嫌いだから別に覚えなくてもいいぞ。

「私の生徒の前では喫煙はやめてもらいたいんですが」

鏡志が眼光の矛先を俺に向けなす。俺はわざと大げさに煙草の煙を吐いてやる。そしてガンを飛ばすように睨みつけた、だが、鏡志はすぐに視線をそらせた。

「危ない危ない、君は呪術と幻術に関してはエリートでしたね」

教師は目を合わせないでそういった。

「全てにおいてエリートだよ」

俺はそういうと、足場に転送用の魔方陣を出現させる。そして、俺はシャリーナと一緒にその場から文字通り消え去った。

転送先は近くの商店街の中だった。シャリーナは足で地面をバンバンと踏み荒らして怒りを体現していた。

「あの人を見下すような目が気に入らないのよ!!」

同感だな。エルルや光喜に聞いたら優しい先生らしいが、あのバカ丁寧な話し方とかは俺も嫌いだ。

「絶対見返してやるんだから!!」

シャリーナが珍しく燃えている・・・。そういえば、鏡志はたしか火属性だったか・・・。なるほど、そうい
うことなら、マジメに修行に付き合ってやるうじゃねえか。

シャリーナの聖地？（後書き）

新キャラの鏡志ですが、出しても出さなくてもどっちでもいいかも知れないキャラで、また出てきたときには、アッこんな奴いたな、ぐらいで構わないです。

テロリスト？（前書き）

シャリーナに魔法を教えることになった悠夜が連れてこられたのは、地属性の街というマイナーで地味な街だった。

そこで、魔法学校の教師である、鏡志に会い。シャリーナはやる気を出す。

テロリスト？

俺たちはそこから少し移動した公園へと足を運んだ。その公園には噴水の変わりに岩の彫刻が幾つも立ち並んでいる。まあ、地属性の街らしいが、やはり地味だ。

シャリーナは魔術書やら魔石をところ構わず広げてやる気は十分のようだ。

「じゃあさっそくはじめて頂戴！！」

なぜか教わる側にもかかわらず偉そうに言う。俺自身は地属性が得意なわけではないので基本魔術を中心に教えなくてはならないだろうな。

「いいか、まずは精神統一からはじめ、自分の中に流れる魔力と外気の中にある——」

「その辺りパス！！」

おいおい、基本をパスするな。それじゃあ、茹でてないパスタと寸分変わらないぞ。

「試験までは時間がないの、手っ取り早い方法がないと分かった今、全ての努力は無駄なのよ」

さっきまでのやる気と闘志はどこへ行ったのかな？俺もせっかくやる気を出してたんだぞ、俺のやる気を返せ。頼むから一度宣言したことは、せめて30分は持続させてくれよ。

「だから、私は今から自分の魔法を派手に見せる努力をすることにしたのよ——」

胸を張りながら言うシャリーナを、俺は冷ややかな目で見ることに出来なかった。全ての努力は無駄じゃなかったのか、意見をコロコロ変えるのはやめていただきたいものだね。

「だから、試験の本番の日にあんたの幻術の力を貸しなさい」

人はそれをインチキと呼ぶ。このアマ何考えてやがんだよ。俺はシャリーナに説教を始めるとシャリーナは恨めしそうな目で俺を見つめてくる。

「じゃあいいわよ」

拗ねる様にそういつてシャリーナはソップを向いてしまった。ふと、その目線の先にある華やかなクレープ屋の屋台見つけたようだ。しばしばシャリーナはその屋台を見ながら沈黙した。

仕方ねえな、ご機嫌伺いにクレープでもおごってやるか。

「シャリーナ、よかった——」

「これよ——」

俺の言葉など馬の耳に念仏どころか、クラゲにモールス信号程度にしか聞いてないようだ。よ
うするに聞かためたの耳は持っていないようだ。

「魔法が派手に見えないなら、私が派手ならいいのよ!」

「訳のわからん理屈をこねるな、何の解決方法にもなってねえ」

金色のアフロの男がドミノの新記録に挑戦したってドミノの地味さは変わらんよ。

「私の美貌さえあれば、鏡志なんてイチコロよ」

シャリーナはそういいながら胸を主張したげなポーズをとる。ご立派なものを持っているようだが

それで成績を稼げるほど人生甘くないぞ。まあ、金なら稼げるのかも知れないがな・・・ファンタジーの世界でも男の欲望って言うのは変わらんもんさ。

「というわけで、洋服でも見に行きましょう」

こいつはサボりたいのか、マジメにやりたいのかどっちなんだ。

俺は新しい煙草を箱から取り出すと加えて火をつけた。

「早く行くわよ!」

シャリーナはそういうと、俺の襟首を掴んで歩き出した。こいつの能力で俺の重量を軽くしているの

で、俺はいとも簡単にずるずると運ばれていった。もう抵抗する気もないよ、勝手にしてくれ。

ふとその時だった。重低音と共に岩の彫刻が崩れだした。どうやら誰かが岩の下に下敷きになっ

たようだ。おいおい、こんな地味な街で爆弾テロでも起こったのか。

「何よいきなり!？」

シャリーナは驚いて辺りをキョロキョロしていたが、俺が一目散に岩の山へと歩き出すとあたふたとついてきた。岩の山の目の前に立つとうめき声のようなものが聞こえてくる。

「あんたの魔法でどかせないの!？」

シャリーナが混乱したように言う。

「無茶言うな、中に人がいるんだぞ。一緒に吹き飛ばしちまうよ!」

俺はそういいながら少しずつ岩をどかしていく、その様子を見たシャリーナも能力を使いながらも岩をどかしていく。すると、血で赤く染まっている手が岩の隙間から見えた。まだ動作が確認できる。

これなら、助かるかもしれない。そう思ったときだった。周囲の人々の雑踏で騒がしかった中でもはつきりと聞こえるほどのけたたましい銃声が聞こえ、次の瞬間には銃弾が俺に着弾していた。

「ぐああ!」

俺はとっさに体から微力の魔力を放出し魔力の鎧を作り出していたために致命傷にはなっていない。だが、こめかみにマトモにもらったちまったもんだからフラフラしやがる。

どこのどいつだ、周囲は野次馬でにぎわっていたため人が多すぎ

て犯人が分からない。この世界の連中は蘇生なんてものがあるから、死という概念に対して関心が薄すぎるんだ。普通銃声が聞こえたら逃げ出すだろうがよ。俺はふと自分に着弾した銃弾を見た、それには文字の配列と幾何学的な模様が刻まれている。おいおい・・・こいつは・・・

「あんた大丈夫!？」

シャリーナがハンカチで額から流れていた血を拭いてくれる。

「シャリーナ早くこの場から逃げろ!!」
「え?」

シャリーナは俺の言葉に驚く。こいつもこの世界の人間だから、やはり死という概念に関心が薄いな。だが、この銃弾だけはヤバイ・・・。こいつは悪魔との契約にも使われる魔方阵の一種で、これで一度死んだらそのまま死神や悪魔の胃袋へ直行できるという優れものだ。

「そんなヤバイもんがなんで!？」
「俺が知るか!! 俺は瓦礫の中にいる奴を助けてから行く!!」

俺がそういうと、シャリーナは走り出した。だが、そのまま逃げるのかと思いきや、違法駐車している車を能力で軽くして俺の横に投げてきた。車体は歪み、破片が当たりに散り、しまいめには炎上まで始めやがった。

「何しやがる!!」

「弾除けよ!!」

シャリーナはそういうと、またこちらに走り出した。戻ってくるなって言ってるのが分からのかこいつは。

炎がパチパチと音を立てて燃える中、ハッキリと銃声音が聞こえてくる。ちくしょう!! 少し待てよ!!

俺は転送用の魔方陣を展開して自らをシャリーナの隣まで転送する。零コンマ一秒の世界。魔力で身

体能力を強化し、シャリーナに迫り来る銃弾を右手の平で握りつづす。銃弾はライフルのように回転して

いたわけではないが、とっさだったため手の平への魔力のガードが甘く、着弾した弾が持つ熱と摩擦熱

で皮膚がジリジリと焼けるような痛みがこみ上げてくる。

1日で銃弾を2発も撃たれるなんてなかなか出来ない経験だぜ。

ああ、今日は厄日みたいだ。

「悠夜!!」

シャリーナが驚いて俺の名を呼ぶ。何が「悠夜!!」だ、確認しなくても俺は陽河悠夜本人だよ、もう少し気の聞いた言葉を言いやがれ。

「シャリーナ瓦礫の中の人を頼むぜ」

俺は右手の中にあつた銃弾を地面に落とす、さっきの不意打ちとは違って今回ははっきり見えただ、弾

道の先にある銃口とそれを持っていけ好かない野郎の姿をな。俺はシャリーナの返事を聞く前にその男の方へと駆け出していった。

男は銃を懷にしまうと一目散に逃げ出した。転送用の魔方陣を使

って追いかけても良かったのだが、簡

単に使っているように見えてアレは結構難しい。走りながら使うなんて器用なことは出来ない。なら止まって

すぐに転送用の魔方陣を使えばいいと思う人もいると思うが、魔力の消費量と走る体力の消費量を考える

と断然に走ったほうが得なのだ。

それに、走ったほうが追い詰める感があって気が晴れる。

テロリスト？（後書き）

さて、少々暴走気味な展開です。1話を5つに分けて投稿するというスタイルを守ろうとしたため、少し・・・というか、かなりシヤリーナとの修行はカットしました。まあ、なくてもいいし、笑いどころが満載というわけでもないのです、いらなかなうみたいな感じです。

中ボス？（前書き）

シャリーナとの特訓中？に公園で爆破事件が発生、そして、その現場で悠夜たちに銃弾が迫った。

悠夜は爆破事件の被害者の救助をシャリーナに任せると、一人その犯人を追いかけていた。

中ボス？

「チツ！！ 結構速えーな！！」

逃げている賊はどうやら何かのマジックアイテムを使って移動しているようで、なかなか距離が縮まろうとしない。一体どこに逃げるつもりなんだ……。賊を追いかけてレンガ造りの建物の角を曲がりレンガの壁と同じ色の歩道に足を踏み入れる。

「なるほど、そういうわけか……」

この道に入った瞬間にギラギラとした気配を感じやがる。3・4・5・いやもつとか。通り魔に

しては黒魔術式の銃弾や移動速度を上げるマジックアイテム、その上、俺の探知能力を鈍らせ

る何かまで持っているようで、おかしいとは思っていたがな。

その男を必死に追いかけていると緩やかな岡の上に立つ廃工場が見える。なるほど、そこに

誘い込みたいわけか……。ここでとっ捕まえちまうと残りの隠れている奴らに逃げられるかも知

れねえし、その畏にかかってやるうじゃねえか。

俺は敵との距離を一定に保ったまま、その工場へむかった。

開けっ放しになった鉄の扉をぐりぬけ、明かり1つもついていない中へと歩いていく。一歩こ

とにコツンコツンと足音が工場の中に響き、俺以外はネズミ1匹もないのではないかと思っ

しまう。この殺気さえなければの話だがな……。

ある程度中へ進んだとき、後ろのドアが硬く閉ざされる音が聞こ

える。その瞬間、急に照明が
つけられたかと思うと吹き抜けになった二階に3人、目の前に1人、
後ろに2人、両サイドに1人
ずつが配置している。

「まさか、ここまでやっかいな連中だとはな・・・」

想像していた以上にこいつらは厄介だ、別に人数の問題ではない。
やつらはハンドガンの他に
マシンガンまで持ってやがった。もしも、あの中身にまで黒魔術式
の銃弾が入っていたとしたらか
なりやばいことになりそうだな。

「てめえら、覚悟できてんだろうな」

俺はそういうと新しい煙草に火をつけて啜える。この前のヤクザ
みたいに黒装束なら分かりやす
いのに、こいつらは普通の私服に身を包んでいる。どこのギルドに
いる人間なのか検討もつかねえ。

「・・・照合を頼む」

俺が追いかけてきた男の一人が二階部分から俺を見下ろしながら
マシンガンを構えている一人に
言った。人様見下してんじゃねえぞこらあ。

「陽河悠夜ランクはX、生け捕りにしろ」

ランク？　もしかして、エルルが見つけた黒猫の首輪にはまっ
ていたマジックストーンのメッセージ

にあつたあれか……。バツじゃなくてエックスだったんだな、なんとなく安心したぜ。こいつらがあの中身のリストの事を知っているとしたら。

「なるほど『魔女狩り』っていうのは実在する組織のことなのか」

俺がそういつたとき、奴らは互いに顔を見合わせた。多分ビンゴだろうな。だが、あのメッセージには

『世にはいない……。』とあつたが、生け捕りにしろということは殺しが目的の組織じゃなかったのか。い

や、公園での銃撃からして確実に殺しに来ていた……。ならばなぜだ？ 先ほどの照合とやらの結果

がランクXだと生け捕りというルールでもあるのか？ いやはや、もてる男は辛いねえ。どうせなら、

かわいい女の子にもてたいと思うのは贅沢ではないだろう。

俺がアレやコレや考えていると、一人の男が手で合図を送る。そして、1時間餌の前で待てといわれ

続けた飼い犬のごとく、俺を囲んでいた5人がナイフで飛び掛つてきた。その間にも二階部にいる3人

は弾を入れ替えている。どうやら、本当に俺を生け捕りにしたいらしい、多分黒魔術式の弾丸から普通の弾丸に入れ替えているのだウ。

捕まったらどうなるのか気になるが、婿入り前の体に傷でもつけられたら女が寄り付かなくなるので却下だ。

まずは前方の一人に向かっていきナイフの一撃を回避、その後、自分で言うのもなんだが鋭い蹴り

を顎下に食らわす。ひるんだところで右足を軸にして回転し、左足で相手の顔面を蹴り飛ばす。男は

口から血と折れた歯を吐き出しながら回転するように飛んでいった。

「いっちょ上がり・・・」

余裕でそういつているうちに、左右の2人と後ろにいた2人が一気に詰め寄ってきた。焦らず、慌てず、冷静に。これが俺の戦う上での心得だ。それに準じて、加えていた煙草の煙を軽く吸った後両手を広げる。

両サイドに防御用の魔方陣を展開して左右の敵の進行を抑える。そして、残りの2人の目を見ると素早く幻術をかける。

「ぐおおおおお！！」

2人の男は叫びながらありもしない地獄の業火にもだえていた。防御用の魔方陣を解除すると、二階部から降り注ぐ弾丸の雨を右サイドに走って避けていく。途中一人の敵がナイフを俺に向けたが、あいにくその程度の攻撃なら難なく回避できるんでね。ナイフを持つ腕を掴んで引き寄せて弾除けに使う。銃弾で男の体がビクビクと踊り狂い、銃弾の雨が降り止んだ後も痙攣しているようだ。

俺は弾除けを離すと硬い床へと何の抵抗もなしに落ちていった。弾除けがなくなった瞬間にまた銃弾の雨が降り注いでくるが、次々と回避して鉄骨やドラム缶や廃材が積み上げられたところへと転がりこむ。

銃弾は確かに速いが、こちらの世界では銃弾を避けれる人間なんて五万という。そりゃ、近距離なら難しくもなるが遠距離なら楽勝だ。一階部にまだ残っていた一人が

接近してくるが、黒い魔力の球体を
手の平に作るとそれを放ちあっけなくダウン。これで残りは二階に
いた3人だけか。

「意外と楽勝だったな」

俺がそうボソッと呟いたとき、3人は吹き抜けになったところを
飛び降りて一斉に向かってきた。マシン
ガンを豪勢に連射しながら接近してくる3人。俺は一度やつらを眺
めてギリギリまで銃弾を引き寄せると、
紙一重のタイミングで右に回避した。

だが、奴らは左にマシンガンを連射しながら走っていく。こいつ
ら幻術に耐性がなさ過ぎるんじゃないか。
奴らは幻術にかかっていて、幻の俺に向かって銃弾を無駄に浪費し
ているわけだ。

悠々と3人の後ろを取ると、首筋に手刀を入れて3人とも気絶さ
せる。一度手刀で人を気絶させるってや
りたかったんだよね、どこかの国の敏腕スパイみたいでカッコイ
イし。

俺が微妙な優越感に浸っていたとき、急に後ろに気配を感じ振り
返る。

「ぐっ……」

急に俺の体が宙を舞う。左頬に鈍い痛みが残っている。何が起き
た？ 殴られたのか、それとも、魔法？
空中で体制を整え、軽い脳震盪でうつろになっていた目で敵を確認
する。

2mは軽く超える身長、それに見合う図太い腕が振りあがったま
まのことから俺を襲ったのは裏拳だと予

想される。ゴリラ並の・・・いや、それ以上の筋肉だなこりゃあ。印象的なのはジェイソンの仮面をかぶっていることだ。こちらの世界には『13日の金曜日』という映画は無いのに、どこにそんな仮面が売っているのだろう。

他の特徴はフード付きのマントに、皮製の肘まである黒い手袋、靴はスキーでもしたそうなかい奴。肌を一切露出しない服装だ。目も見えないし、フードのせいで髪も耳も見えない。

というか、このデカイ図体のクセに全く気配が感じられなかった。

「いつからいたんだよ、不意打ちなんて卑怯じゃねえか？」

そっついながら、暗くて見えない相手の目を睨みながら幻術をかける。眼力に魔力を乗せるのが俺の幻術。なんで目が見えなくても大丈夫なんだよ。幻術は卑怯？ 卑怯上等。俺は正義のヒーローでもジェントルマンでもねえただの不良なんだ。

アイツが幻術の俺と向き合っている隙にサイドに回りこむ、そして、首筋に蹴りを一撃くらわす。悪いが一撃で終りだな。

首の骨が粉碎するのを確信したとき、図太い腕が見かけよらず素早く首筋をガードする。幻術にかかっていなかったことも驚きなんだが・・・。

「かてえ・・・」

筋肉がすごいとかいうレベルじゃねえよ。まるで岩を蹴っているようだぜ。

「体術がダメなら・・・」

俺はバックステップの後、オマケの側転、正式には側方倒立回転
&バク転、正式には・・・知らん。いやはや、
我ながらこんなことを考えているなんて余裕だな・・・とりあえ
ず敵から離れることにした。

その大男は俺を追わずに眺めている。余裕なのか、慎重なのかは
分からん。まあ、距離をとらせてくれるなら
それが嫌味だとしても別に構わないがな。

「吹き飛ばやー！！！」

黒い魔力の砲撃を放つ、横から見れば帯のように見えるその砲撃
は直線的な動きで一瞬で相手に迫る。腕

に鎧を着けているのか、魔力でガードしているのかは知らんが砕け
ちまいな！！

タイミング的に避けれるとは思わんし、今度こそ終わっただろう。

・・・そう確信を得たとき、またしても俺の期
待は一瞬で裏切られた。

中ボス？（後書き）

この話だけ戦闘が大半を占めてます。まあ、そろそろ、一撃で伸びちゃうような雑魚ばかりし悠夜と戦わしても仕方ないかなーと思います。始めた今日この頃です。

悪の組織？（前書き）

シャリーナと魔法の修行していた悠夜たちを襲ってきた犯人を追いかけていくと、廃工場にたどり着いた。

そこには、数人の犯人グループがいたが、悠夜はすぐに片付けてしまう。

だが、新たに現れた大男は悠夜を殴り飛ばし、幻術も防ぎ少々の苦戦を強いられていた。

悪の組織？

コンクリート作りのはずだった床からは分厚い岩の壁が現れ、俺の攻撃を簡単に防いでしまった防ぐ。普通の岩の壁なら貫くことも出来るだろうが、岩の純粋な強度に魔力による強化が加わり、鉄壁の防御というか、岩壁の防御を誇っているというわけだ。

「こうなりや、数で勝負だ!!」

俺は岩壁のサイドに回りこむと黒い魔力の球体を小さめに作る。でかく作るよりスピードが速

くなる気がする・・・。まあ、そういうことで一発目を放つと、すぐに別の角度からもう一発、さらに

もう一発といろんな角度から撃ってみる。結果はというと、敵を囲むように次々と現れた岩の壁に防がれてしまった。

「・・・・・・・・」

無言のまま立ち尽くす大男。無言は通り過ぎると嫌味になるということが今日分かったよ。もうすぐ怒りがMAXになりそうだよ。

そんな状態だというのに、男は岩壁の一端を掴み取ると投げてる。メジャーリーガーもビックリなスピードと球威で石つぶては迫ってきた。なんとか回避すると、俺を通り過ぎた石つぶては

廃工場のただでさえ隙間風の多そうな壁に巨大な風穴があいた。

というか、さっきの銃弾よりも速い剛速球って何んだよ！？ 人間の腕力の限界を知っているのか！？
ちなみにこの世界はそんなものはないがな。

「つて、なに！？」

後ろの壁に気を引かれていた隙に、目前というところまで石つぶてが無数に迫っていた。距離
的に防御用の魔方阵は間に合わないし……。ガード……。回避・
……。いや、どれも無理だ！？

左肩、右脇腹、左目上、右ひざ、最後に鳩尾に鈍くも引き裂かれそうになる衝撃が走る。骨が
軋む音とあまりの威力で石つぶてが碎ける音が聞こえると同時に俺は吹き飛ばされた。

壁にあいた風穴から俺は外へと飛ばされ、地面をゴロゴロと転がっていく。木の幹が自分の腰

の少し上に衝突した勢いでようやく俺は制止する。体がまるでシャチホコのような曲がり方をした。

普通死んだな。もしくは、背骨が碎けて動けないだろう……。フ
アンタジーの世界でよかった。魔力で身体強化ができるおかげで死は間逃れたよ。

「ぐっ……。っ。」

だからって痛くないわけねえだろうが、カッコ怒マーク、みたいな状態だよこら！！ アイツぜってえぶ

つ殺す、お子様には見られないような残虐ファイトでもしてやろうか。

「アンタ大丈夫！？」

激痛にうなっていた俺の頭上から、しばらくぶりに聞いた声が聞こえる。一瞬、もうお迎えが来ちまったのかと思ったぜ。そこにはシャリーナが俺を見下ろすように立っていた。

「俺を見下すんじゃねえ・・・」

「見下してないわよ、いいから状況説明しなさい!!」

シャリーナが命令口調で言う。俺は悲鳴を上げる体にムチを打ちながらも立ち上がった。さてと・・・奴を倒すためには・・・。

「よし、行くか・・・」

俺はシャリーナに指で顔を近づけると合図する。不思議そうな顔で近づいてくるシャリーナに耳打ちした後、俺が飛ばされてきた穴からまた廃工場の中に入っていた。

さてと奴はいったいどこへ・・・。

「・・・・・・・・」

居たよ。最初の定位置から1歩も動いちゃいねえし。

「舐めやがって・・・行くぜシャリーナ!!」

俺はそういうと小さな黒い球体を幾つも作り無作為に放つ。まあ予想の範囲内の出来事だが全ての攻撃は防がれる。奴の周りを岩の壁が取り囲む。人間は日々成長

していくもんだぜ、バカの1つ
覚えみたいなガードしゃがって。

俺は斜め上に手をかざすと、岩壁に当たるか当たらないかのすれ
すれの高さに巨大な魔力の球
体を放つ。シャリーナはそれを合図にして俺に近寄り、俺の腕を掴
んだ。

俺とシャリーナは魔力をシンクロさせていく。すると、俺の放つ
た黒い魔力の球体が少しずつ赤み
を帯びていく。

「死にさせえー！！」

俺とシャリーナがそう言った瞬間、俺の魔力の球体に重量という
ものが生まれる。そして、岩壁に

逃げ道を奪われたその男の頭上にそいつは落ちた。爆音と爆風が吹
き荒れ、積み上げられた廃材

たちは吹き飛び壁や天井を崩していく。壁を失った工場の砂埃はす
ぐに晴れる。

シャリーナは2・3歩前に出ると奴のいたところを覗き込む。

「ま・・・まあ、私がいたんだからこんなもんよね」

声が震えてるぞ。想像以上の破壊力になったようだな。俺はいつ
の間にやらなくなっていた煙草
に気付き、新しい煙草を出して口にくわえる。まさか、これほどの
強さになるとはな・・・。

俺たちの目の前にはクレーターが出来ていた。巨大なクレーター
となった元工場の床を見る。そ
こには岩や瓦礫などはあるものの人影は見えなかった。いや、砕け
たジェイソンの仮面や奴の服な

に残っているな・・・。

「あの一瞬で逃げたのか・・・」

俺はそう呟くと、残りのザコたちの行方を捜した。

右見て・・・左見て・・・もう一度右見て・・・敵影なし。まったく、どうなつてやがんだよ・・・。

俺は深いため息を突きながら煙草を落とし、踏みこめて火を消した。

「私のおかげなんだから感謝しなさいよね」

俺の心境など無視してシャリーナが誇らしげに言う。まったく、光喜並みにお気楽な奴だぜ。

「ありがとよ・・・」

「えっ・・・？」

シャリーナがハトが豆鉄砲を食らったような顔で俺を見ている。

「ありがとって言ったんだよ」

俺は自然な笑みでハトさんに言ってやる。明らかな動揺を見せた後、顔を赤らめて俺に背を向けた。恥ずかしいなら威張るなよ。

「あ・・・あたりまえじゃない、これから何かおごってもらうんだから・・・そうね、草団子でいいわよ」

俺を見たり目線を逸らしたりを繰り返しながらそういうシャリー

ナは珍しくもかわいく見えた。

「地味だな……」

「地味って言うなー!!」

ちなみに、事後報告をするとな……。シャリーナは何の修行もしちゃいないし、エルルは光喜のわがままな気まぐれに振り回され、修行にならなかったようだ。

結論。エルル以外は期末試験の結果は最悪となった。結局は骨折り損っていう奴だ。さらに追伸を加えるとしたら俺のあばらは2本ほど折れていて、文字通りの骨折り損となったのだ……。さらに追伸の追伸を付け加えさせてもらうなら、ファンタジーの世界なのでその傷は2日後には完治した。

って、こんな事後報告は実はどうでもいいことなんだな、一番重要なのは光喜たちの期末試験についていったときの話だ。

「それで、その大男の特徴とは？」

薄暗い教室にいる鏡志がそういった。俺はあのメッセージが込められた魔石を鏡志に見せたあと、あの戦いの話をした、生理的にこいつは嫌いだ。魔法使いの裏事情や行政について一番詳しいのはこいつだろうか。

「分かん、マントや仮面で自分のことを徹底的に隠していたから……」

俺がそういうと、鏡志は少し考え込んだ。

「最近、魔法使いが失踪したり、謎の死を遂げる事件がいくつかあるようです……」

「やっぱりか……。魔女狩りという組織は存在すると考えて間違いないだろう……。俺はそれだけ聞くと魔石を持って歩き出す。」

「もう遅いですし気をつけてください」

冬ということもあり、まだ早い時間だが十分に外は暗かった。

「大丈夫さ……。今夜は聖夜だ、こんな日には襲ってこないだろう」「フフツ、そうでしたね、今日はイブですか」

鏡志が薄気味悪い笑い方をしながら俺を見送った。鏡志の最後の言葉を思い出しつつ、雪の降り始めた空を見上げた。

今日はイブか……。

悪の組織？（後書き）

正月になっちゃいましたね。クリスマスの時期の話だったのに。次はお正月の時期の話なんですが、その話が完結する頃にはまた正月が終わって新学期なんでしょうね。人間、計画性が大事なんですね・・・。

第5話「リトルエンジェル」（前書き）

魔法使い狙う魔女狩りという組織の存在が明らかになってきた・。
・。これから悠夜たちと魔女狩りの戦いが始まるのかと思えてきた
頃、悠夜たちは平和に初詣に出かけることになった・。。

第5話「リトルエンジェル」

クリスマスイブもクリスマスも誰も知らないので、特にイベントなく過ぎ去った。なぜ鏡志がイブという単語を知っていたのかは謎だが、俺はあんな野郎に興味はないんでな。

年末は格闘番組を酒とつまみをテーブルに広げて観戦し、年越しそばを乱入してきたエルルやシャリーナたちと食って無事・・・というにはハプニングが多い年だったが、年は越せた。

「悠夜、お待たせ」

煙草を啜えながらリビングでくつろいでいた俺に光喜が話しかける。今回はややこしい前ふりはなしだ。とにかく、大津波に襲われたヤシの実のごとく、流されるに流され初詣に行くことになっってしまった。本当は安寧の樂園を求めて海を漂っていたはずなのにな。

光喜が降りてきたあと、二階が少し騒がしくなり他のメンツが降りてきたことが分かる。

「ごめんね・・・お兄ちゃんの部屋借りちゃって」

もじもじと恥ずかしそうにしながら現れたのはエルルだった。いつものトンガリ帽子の変わりに金ぴかの蝶の髪飾りをし、赤衣着物姿だ。夕方ぐらいから来ていた女性陣は、俺の部屋を侵略して着替えをしていたのだ。

顔を赤らめながら俺の顔を見たり、視線を下げたりを繰り返しているエルルの後ろからシャリーナが顔を出した。

「どう、似合ってるでしょ」

エルルの両肩に手を置き、他人のことなのに誇らしげにそう言った。

「ああ、よく似合ってるぜ」

俺はお世辞ではなく素直な感想をエルルに言う。エルルはよほど恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にしてうつむいたまま固まってしまった。

「あ・・・ありが・・・と」

呂律が回ってないぞ。エルルはさらに肩をガチガチに固めてしまっている。そんなエルルの後ろから回りこんでシャリーナが前に出た。淡い青紫色の着物に、いつものツインテールではなく着物にあわせて髪を結っているシャリーナは、わざわざ俺に着物を見せびらかす。

「どうよ」

自信満々に一言俺に投げかけるシャリーナ。

「高そうだな」

これまた素直な感想をぶつけてやる。

「そうじゃないでしょ！！　ほら、似合うね〜とか羽子にも衣装とか」

「シャリーナ・・・馬子にも衣装・・・」

シャリーナの後ろでエルルが言う。それに付け加えるならそれはほめ言葉ではないぞ。シャリーナの機嫌が45°ぐらい傾き、エルルの両頬をつねりだした頃。その2人の後ろから最後の女性陣が姿を現した。真っ白な生地と、真っ赤な帯、淡い赤や青のアサガオの模様が彩られた服で姿を現したその女性はいつもと変わらない髪形と表情で俺を見たあと首をかしげた。

「キレー、よく似合ってるよね」

光喜がその容姿を賛美する。いや、否定はしないぞ・・・否定はしないが・・・。

「メア・・・それは浴衣だろ？」

メアは自分の着物をマジマジと見つめる。どうかんがえても浴衣だと思っぞそれは・・・。

「・・・似合わない？」

そんな悲しそうな目で言うなよ。似合うさ、似合うとも・・・。だがな、今この状況だと、月とすっぽんくらい違うんだぞ。

「・・・・月」

いや、浴衣はすっぱんのほうだよ。着物が月だって。

「いいじゃない、そうめんと冷麦程度の差しかないって」

シャリーナが適当に言う。てめえ、そうめんと冷麦の差を舐めるんじゃないぞ！！ 俺は半分にくった竹に流れてくる冷麦なんて食わねえぜ。

「・・・・脱ぐ？」

そついいながら帯に手をかけるメア。脱がんでいい、ちびっ子だって読んでもかもしれないんだ、それをしちやあまずい。

「じゃあ、オールオツケーということで！！」

なぜかシャリーナが締めくくる。オツケーはだしちやいねえ・・・・。そんな俺の心境など無視してシャリー

ナは玄関へと歩き出した。俺たちはそろそろとそれにつられて家を後にしていった。

ん？・・・・誰か忘れているような・・・・。

ふと頭の中に赤髪の男の姿が浮かんだ気がするが・・・・気のせいだろう。

クリスマスはないが、正月はある。ファンタジーの世界はやや仏教を信仰している世界のような。天使

や悪魔は普通に存在するが、仏なんてものは見たことがないからなく、人は見えないものを神様にした

がるものらしい。

神社について、シャリーナの一言。

「じゃあ、除夜の鐘がなるまで屋台で遊びまくるわよ!!」

こいつはバカか・・・。

「まずは賽銭箱に行くのが普通の順路だろう、それと、除夜の鐘は12月31から1月1日にかける深夜だけだ、あと、除夜の鐘をつくのは寺であって神社ではない」

いつきに3つの事をツツコム俺を口をへの字に曲げて睨む。睨むな、お前が悪い。

「あの・・・お兄ちゃん？」

シャリーナと睨めっこしていると、エルルが控えめの声で呼んでくる。

「メアちゃんと光喜くんは・・・」

エルルの言葉で周囲を見る。家から神社までは、ほぼ直線的な道を5分、神社に到着して現在3分。計8分にして迷子2名。

「・・・」

5人いたはずだが、現在3人となった一行に沈黙が流れる。我が弟よ、方向音痴なのは知っていたがどういった経路で迷子になったのだ・・・。

「仕方ねえな・・・あいつらを探——」

「私が行ってくるから、2人は屋台を回ってて、丑満時に鳥居の前に集合よ!！」

そういつて俺の意見も聞かずにダッシュしていくシャリーナ。下駄でなぜそこまで速く走れる。というか丑

満時がいつか知っているのか、午前3時だぞ3時、そんな時間までいるわけねえだろ。

そして、結局はエルルと2人きりにされた俺だった。

「仕方ねえな、また付き合ってくれるか？」

俺はエルルをみながら言う。二人並ぶと身長差のため、俺が見下ろすカタチになってしまう。

「う・・・うん・・・」

エルルが照れるように視線を逸らして返事する。じゃあ行こうか、そう一言言おうとしたとき、俺とエルルの顔の間に白いモコモコした物体が割り込んできた。

「・・・食べる？」

そこには、迷子2号であるメアが綿菓子をもって立っていた。その手をみると、杏飴に水風船、頭にはピカピ

カと電飾のおもちゃ。その容姿から、メアが迷子になった理由は一瞬で察することができた気がする。

第5話「リトルエンジェル」（後書き）

なんの伏線もなく、年末に書いてしまっていた話です。時期に流され、3〜4日に1回という投稿ペースを律儀に守っていたせいで、正月がとくに過ぎてしまいました。

でもま、俺が好きなメアとエルルの両方を出せたのでよかったと思う、独りよがり気味な話です。

両手に花？（前書き）

魔女狩りという悪の組織の存在が明らかになったが、悠夜たちは何事もないように初詣に来ていた。

家から出てから8分後、光喜とメアが迷子になりシャリーナは2人を探しに行く。

2人きりになる悠夜とエルル「ちなみに、タケシは忘れられている」、このまま、2人きりの初詣になるかと思ったとき、屋台を堪能していましたという風貌のメアが帰ってきた。

両手に花？

「とりあえず、迷子確保と・・・」

俺はメアの頭に光っている電飾を軽く小突く。するとメアはそれをゆっくりとはずして、俺の頭に・・・。

「つけたら、怒るぞ・・・」

俺の一言を聞いてメアはその場で静止。しばしの沈黙のあと、それを帯に引つ掛けるようにしてしまった。顔が残念そうに見えるのは俺の思い過ごしではないだろう。

「それじゃあ、3人で屋台でもまわろうか」

エルルは少し俺の顔を見たあと、またいつもの通り視線を逸らす。表情が沈んで見えるのは

夜のせいだろうか？ メアは綿菓子をもニゅもニゅという擬音で食べている。自分でもニゅもニゅ

ユはおかしいと思うが、ほんとそんな感じた。

俺が歩き出そうとしたとき、俺の肩に誰かの肩がぶつかる。そいつは地元の若い男のようで

ラムネ瓶を持ったまま俺を睨む。ガンを飛ばされたら、ガンをとばし返すのが礼儀というものだ。

というか、飛ばさなきゃ気がすまねえ。

男はそれにいらだったのか俺と正面に向き合う。なんだコイツやる気か？ 俺はその男が持

つていたラムネの瓶を軽く握る。バリンという音を立てて一瞬で砕け散った瓶、それを呆然と見る愚民。

「やんのか？」

男は一目散に逃げ出した。いやあ、速い速い……。というか、こんなことで逃げ出すなんてチキンにも程があるだろう。

そんなことを考えていると、不意に後ろから誰かに肩を叩かれた。また俺に喧嘩を売る奴がいるのかと思い振り返る……。

「君、ちよつといいかな？」

そこには警官^{ポリ}が立っていた。俺、今年も厄年なのかな。

「悪いな……」

俺が駐在所から解放されたのは30分後のことで、その間、エルとメアは律儀にもその前で待っていてくれた。

「……くしゅん」

ベビーカステラをモニュモニュと食べていたメアが不意にくしゃみをする。

「たく……浴衣でくるからだ」

俺はコートを脱ぐと、メアに着せてやる。メアは俺の顔とコートを交互に見ると、コートの袖に顔を近づけてみる。匂いを嗅いでいるように見えるが、煙草臭いか？自分では意識したことがないんだがな。

「・・・似合う？」

「似合わない」

白い浴衣の上から黒いコートを着て似合うはずがない。メアは自分の手が隠れてしまう長い袖をバタバタと羽ばたくように振り回す。何が楽しいのかは俺の理解の範囲外だ。

そろそろ移動しようかと思い振り返ると。エルルの顔が先ほど以上に沈んで見える。

「大丈夫か？」

俺が尋ねると、エルルは我にかえったようだ。

「うん・・・少し人ごみで疲れただけだから・・・」

エルルはいつもより心なしかテンション低めに言う。

「それより、悠夜お兄ちゃんは寒くないの？」

エルルはなんだか、強引に話題を変えるように言った。この時期にアンダーだけで寒くないわけないのだが、過去、夏の暑さにまいった光喜にと共に行った半そでの氷のダンジョンよりマシだ。

俺は適当に返事を返すと、エルルはまたうつむいた。そして、しばらくの沈黙の後、俺の背中にやわらかくくつつく感触が……。

顔だけで後ろを見ると、メアが俺の腰に手を回して背後から抱きついている。

「……あつたかい？」

いや……あつたかいにはあつたかいが……。背中に当たるものをなんとかしてくれないかな、というかメアって着やせするタイプなのか、結構デカイ……。なんの話をしているからはご想像に任せるよ。少なくとも帯に入っている財布がデカイとかいう話ではない。

「歩きづらいだろ……」

平常心、平常心、平常心……。煩惱退散。ため息のふりをして深呼吸をし、すこし瞑想をする。よし！
煩惱退散失敗。

メアから視線を逸らしたとき、エルルがジーツと俺たちの事を見ていた。やっぱり、表情が沈んでいるよな。

やつとのことでメアは俺から離れ、俺の横に立つ。こいつは何をするにしても、ワンテンポ間を空けるのはなぜだろう？ そんなことを考えていると、今度は俺の腕にしがみついてくる。

「……」

そして無言で俺の目を見る。この目線が「あつたかい？」と尋ね

ているということが分かるようになって

た俺はテレパスか何かを身に着けたとでもいうのだろうか。

「大丈夫だから離れる」

俺の理性が健在しているうちに離れる。衆目に構わずお前に手を出して、お前の能力で俺と周囲の人間がバラバラになるのはゴメンだ。お前の声を刃に変える力なら、この神社にいる人間を30人くらいなら1秒で始末しそうだしな。

俺は初詣という神聖な儀式を血で汚さないために煩惱を押さえ込む。さつきガンの飛ばしあいしたときは殺してやろうかと本気で思っていたが、男の闘争本能と煩惱は別だ。

そんな俺の脳内で起こっている煩惱と理性の戦いなど知らないで、メアは未だ俺の腕を掴んだまま離していない。

「ほら行くぞ」

平常を装いながらメアのやわらかい感触から離れて歩き出した。ちよこちよこと上品な歩き方で後ろからついてくるエルルと、俺のコートを大事そうに羽織ながらも綿菓子を食べながら横に並んでくる。大和撫子な感じな女の子と、無口ながらも人懐っこい女の子、両手に花っているのは、こういうことをいうんだろっな。

両手に花？（後書き）

まあ、そんな感じです。ただ、お気に入りのエルルとメア、そして主人公の悠夜をメインにして書いていこうと思っただけ・・・、それだけじゃ、番外編みたいになっちゃうから少しは本編に沿ったことをするかもしれませんが、重要性の低い話には変わりないでしょうね。

全員集合？（前書き）

初詣に来ていた悠夜たちだったが、迷子&その搜索などの関係で一人ずつメンバーが減り、悠夜とエルルだけになってしまった。だが、すぐにメアが合流し3人は参拝へと向かっていった。

全員集合？

「・・・・・・・・」

ちなみに、上の無言は3人全てのものだ。隣を歩いていたメアが俺の隣から消えたので、俺は立ち止まり後ろを振り返ると、ちびっ子たちが嬉々とした表情で群がっている人形揃いをジーツと見ている。その数歩手前ではエルルもメアを見ていた。

「それがしたいのか？」

俺がメアに尋ねるとキラキラとした目に、口にささやかな笑みまで浮かべてコクコクとうなづく。
いやね……。そこに立ち並んでいる景品を見てくれたまえ。プラスチックのちみっこい人形、キラキラと光るカチューシャなどなど、1プレイ300円のゲームの景品としては役不足じゃないか？
1枚300円の宝くじは数億の可能性を秘めているんだぜ？ その景品は300円出せばきつと店で買えるものだ。

「というわけで、参拝を済ませてからだ」

俺がいうと、メアは最初の嬉々とした表情から少しずつ下唇を噛み、目もウルウルと潤いを増していく。やばい……。泣きそうだ。その間もずっとメアの視線は俺の顔に向けられている。仕方ない、そこまでしたいのなら寄っていくか。別に上目遣いの魔力に負

けたわけではないぞ、人形を
掬わなかっただけで、メアの能力が暴発して参拝客に犠牲がでるのは惨めだからな。

「分かったよ、ちょっとただけだぞ・・・」

俺のその一言を聞くと、また嬉々とした表情に戻る。セリフに乏しいくせに表情は豊かだな。

「カレシさん優しいわね」

不意にメアを見ていた屋台のおばちゃんが言う。人形を掬うため、そして、参拝客を救うための
ポイを二つ差し出した。カレシさんか・・・真冬にシャツだけの男の隣を、男物のコートを羽織った
女の子と一緒に初詣に来ていると、他人からは恋人に見えるようだな。エルルは俺たちから1・2
歩離れたポジションに立ってるし。

俺はエルルに視線をやると、エルルは俺たちから完全に視線を逸らしていた。いつもにも増して
今日はよそよそしいな。

そんなことを考えていると、二つのポイを受け取ったメアは一つ
を俺に手渡した。有無を言わず
俺も参加しなくてはいけないらしい。

エルルのことも気になっていたが、俺はメアとともにちびっ子の群れの中へと入っていつてしまっ
た。

「・・・てい」

メアが小さく呟きながら人形へと攻撃を仕掛ける。人形掬がそんな激しい動作が必要な競技だとは知らなかったよ。

「……破れた」

そりゃね、あんなだけ乱雑に扱われたらポイじゃなく虫取り網でも破れたくなるさ。こういうのは、落ち着いて丁寧にだな。そう考えてポイを構えた瞬間、ちびっ子が勢いよくアクションを起こした

おかげで飛んで来た人形があっさりと紙を貫通した。

メアと俺の間に沈黙が流れる。すると、後ろからエルルが近づいてくるゲタの足音が聞こえてきた。

「お兄ちゃん……怒ってる？」

どうやら俺の機嫌を確かめに来たらしい。大丈夫さ、子供相手に乱闘を起こしたりしないからさ。

「……しわ」

メアはそういいながら俺の眉間を指で突く。眉間にしわが寄っているのは好調の証なんだよ……。深いようで浅いため息をつく、俺はその場にゆっくりと立ち上がった。とつとと参拝を済ませて、焼き鳥やたこ焼きなどと、行きつけの店で酒を買って家でゆっくりしたいよ。

「ぶっ……ははははは！！」

ため息をつくとき幸せが1つ逃げるって言うが、ついでに悩みの種を1つ追加してくれたようだ。

聞き覚えのある笑い声のする方向を見る。そこには、マイブラザ―陽河光喜君がバカみたいに

笑ってる。ついでにだが、光喜が笑ってる足元にタケシがのた打ち回っているのは幻だろうか？

たしか、置いてきた・・・訂正、忘れてきたような気がするのだがな。

「おい、こつ――」

ドゴーーーーーン！！

上のは俺の心の声じゃないぞ、どこからともなくダルマが落ちてきた。そのダルマは小さいながらも、アフリカ象顔負けの重さがあるようだ。こんな芸当ができる人物を俺は一人しか知らないのだが。

「ゴ・・・ゴはあ・・・・・・がくつ」

ダルマの下敷きになっていたタケシがわざとらしく気絶する。大丈夫だ、お前は結構丈夫な奴だ。

これくらいでは死なん・・・多分。

「ゴメン、ゴメン、ちょっと暴発しちゃって」

そういいながら出てきたのは着物姿のシャリーナだった。やっぱりお前か・・・というか、お前の能力

で暴発もクソもないと思うがな。暴走したとして、どこからダルマ

が降ってきたんだ？

「私と光喜はこいつを回復させてくるわね」

「ええ〜！？」

シャリーナは光喜の不服そうな顔など無視して、タケシを猫のように摘み上げる。周囲の人たちは呆然とその様子を見ている。

「じゃあ、そういうことで！！」

シャリーナはそういうとタケシを引っ釣れてどこかへ走り去った。光喜はシャリーナの意見を無視して俺たちがしていた人形掬いを始めようとしている。流行ってるのか、それ？

ちなみにだが、メアも光喜に並んで第二ラウンドをはじめようとしている。メアと俺は同じ年だから双子の光喜も必然的にメアと同じ年になるはずなのだが、客観的に見るとどう見ても姉と弟だ。二人そろって人形掬いに夢中になっている姿は微笑ましいを通り越して、呆れを覚えるよ。

俺はそんな2人を見たあと、ふと隣にいるエルルに視線を落とした。さっきほどではないが、やっぱり表情が暗いな。

「大丈夫か？」

「え・・・あ、うん、大丈夫」

歯切れ悪くそういいながら俺を見る。すぐに視線を落としてしまふのには慣れたが、表情が暗いの

は気になるよな。

「アレでも買ってみるか」

俺はベビーカステラののれんを掲げた屋台を指差した。参拝客も先ほどのダルマ騒ぎのせいで少しは少なくなっているので並ぶ手間がなくて丁度いい。

「せっかく来たんだし、祭りらしいことしねえとな・・・」

俺がそういうと、エルルは少しはにかんだ笑顔で首を縦に振る。人形掬いにしばらく熱中しているであろう2人を置いて俺たちは歩き出した。俺は屋台の若い男に500円の少し大きめの袋で注文する。エルルが途中で財布を出そうとしたが、俺はそれを制止してさっさと代金を払った。

「ありがとう」

先ほどの暗い顔などウソだったかのようないつもの顔でそういう。500円で表情が晴れるんなら激安を通り越して極安だよ。

「よかったね、優しいお兄さんで」

本日似たようなフレーズは2回目だよ。店の若い男性がそういいながら袋を俺に渡す。俺はその場から離れようとしたとき、またエルルの表情が暗くなっていることに気が付いた。

ま、500円で左右できるほど、乙女心は単純じゃないんだろう

な。光喜なら120円の缶ジュースで左
右されそうだけどな。

2人で並んで人形掬いの屋台に戻ってきたとき、そこにはちびっ
子以外誰もいなかった。光喜&メ

アよ・・・本日2回目の迷子ですか？ だんだん俺の癖になりつつ
あるため息をつくとき、ベビーカステ

ラを1つ口の中に入れる。甘い・・・。やっぱり、煙草の方が30倍
はうまいな。

俺は片手でその袋をエルルに差し出すと、エルルの頭をもう片手
でなでる。

「探すのも面倒だし行くか」

「うん・・・おみくじ寄って行ってもいいかな？」

エルルは控えめにそう言った、また少し表情が晴れたがトータル
マイナス15点つてところか。

俺とエルルは2人で歩き出そうとしたとき、人形掬いの屋台のお
ばちゃんに呼び止められた。話の内

容は金髪美人の着物の女性にメアと光喜は景品を受け取らずに拉致
されたらしい。で、俺に景品を渡

されたのだが・・・かつおぶしですかこれは？ なぜこんなものを・
・・・というか、人形掬いとどう繋がって

きたんだこれは・・・。

気にしたら負け、ファンタジーとはそういう世界だということを
再再再、、、、認識したよ。

全員集合？（後書き）

正月が完全にあけちゃいましたね。いつまで悠夜たちは初詣をしているのでしょうか……。このペースだとあと1週間くらいはかかるかもしれませんね……。

あと、タケシはなんか一人だけ出てないのもなんなんでした。ただけです、特に深い意味はありません。

共通点？（前書き）

みんなで初詣に来ていたが、メアと光喜が迷子になり、シャリーナがエルルに気を利かせ、メアと再び合流し、メアが再び姿を消し。めまぐるしいメンバーチェンジの果てに、悠夜とエルルは2人きりで初詣をしていた。

共通点？

屋台の熱気のおかげでコートがなくてもそれほど寒くはない。エルルのゲタの音がコツコツと控えめな音を立てながら俺についてくる。両手に花というわけにはいかなかったが、これはこれで悪い気はしないな、後ろじゃなくて隣を歩いてもらえればもったいいのだが・・・。

「・・・・・・・・」

縦に並んでいる二人の間に会話は弾む気配を見せなかった。そりゃそうさ、参拝客の雑踏でただでさえやかましいのに、後ろにいる人間と会話なんて無理難題だろ。

「・・・・・・・・あつ」

急にエルルが蚊の囁くような声でそういった。この雑踏でこの小さな声を聞き取れる俺の耳が恐ろしいよ。上記の無理難題は一般人の話だ、忘れてくれ。

俺が振り返ると、エルルは屋台に並べられていた小さなネックレスを見ていた、銀の十字架がデザインされたネックレスだったがイメージ的にはどっちかというと男物だな。

「欲しいのか？」

エルルの横に立って尋ねた。エルルは少し考える動作をしてもう

一度ネックレスを見た。ネックレスの下には2番という数字がふられていて、この屋台がくじ引き屋だということを物語っている。こついうのって、くじの中は実はハズレばっかっていうことが多いんだよな。わざと1等とか出ないようにしてあんだよ。

「おっちゃん、一回頼む」

俺はそういつて300円を屋台の主人に渡した。すると、その主人は明らかに数の少なくじが入った箱を差し出してきた。ほぼ間違いなく1等とかはないだろうな。俺は適当にくじを引くとあけてみた。隣からエルルも見ようとしているが、身長差があるためにくじの番号までは見えてないだろう。

「2番だ」

俺がそういつと、案の定屋台の主人は驚いた表情をしている。俺はくじを差し出し、ネックレスを手にとった。屋台の主人はくじを見ては目をこすり、もう一度見ては、ポカンと口を開けている。

「じゃあ、このネックレスもらってくぜ」

俺はそういつとネックレスを持って早々と立ち去った。今頃あいつは67番のくじを永遠と眺めているだろう。いやほんと、幻術って便利だわ。幻術が解けるのは6時間後ぐらいだろうが、念のために屋台から離れていくと少し人ごみを外れる。

「ほら、欲しかったんだろ？」

俺はエルルにネックレスを手渡してやる。エルルは俺が幻術を使ったことなどお見通しのようで、少しため息をついたが受け取ってくれた。エルルはネックレスを首にかけると、十字架を指で転がすように触っていた。

「それにしても、男物のネックレスが欲しいなんて変わってるな・・・」

俺がそういうと、エルルは何かを考える仕草をする。少し考えたあと、ネックレスを見て感慨にふけているような顔をする。

「むかし、このネックレスと同じものをした人に会ったことがあった・・・」

エルルは穏やかながらも寂しそうな顔をする。たまに見ることのある顔だ・・・おそらく、何度となくそいつのことを思い出していたんだろう。

「悠夜お兄ちゃんと同じ、黒い長髪の男の人だったんだけど・・・」

俺はそのセリフを聞いたとき、全身の毛が逆立つようだった。まさか、奴が・・・いや、黒い長髪の男というだけで判断するのは早いかな。

「あの爆弾テロのとき・・・助けてくれたのがその人」

あの爆弾テロ？ なんの話だ？ シャリーナと爆弾テロの現場に居合わせたことがあったが、エルとはなかったはずだ。

「シャリーナも一緒に助け出されたんだけど、お父さんもお母さんも手遅れで……」

エルルがそう言ったとき、俺は聞いちゃいけないことを聞いたんだという罪悪感に襲われた。そうか、エルルの両親は内戦に巻き込まれて死んだと聞いたが、爆弾テロが原因だったのか……。でも、エルルの元実家は俺の実家からそう遠くなかったはずだ。なのに何でそんなことも覚えていなかったんだ？

そう考えたとき、俺の頭の中で1つの可能性が生まれた……。何度か振り払おうとしたが、何度でも同じ結論が出て来た。

「なあ、それっていつだ……」

俺が尋ねたときエルルは悲しそうな顔をしたが、次の瞬間には納得したように一人でうなづいた。

「そうか……。悠夜お兄ちゃんは、あの日以前の記憶が曖昧だったんだよね……」

あの日……。今から12年前の俺の母親の命日……。そこを境にして過去の記憶が曖昧になっている原因分かってる。医者が言うには母親を失ったショックだというが、アレは奴の……。母親を殺した長髪

の男の忘却術のせいだ。

「私の両親と、悠夜お兄ちゃんのお母さんの命日って一緒なんだよ」

エルルの言葉を聞いた瞬間思考回路が停止した気がした。この12年間、互いの過去のキズとして

そういう話をしなかった。この世界に葬儀という習慣はあっても、命日に特別なことをする習慣はなかったからエルルの両親の命日は知らなかった。

この世界では死んでも魂の寿命がこない限り何度でも蘇生が可能だ。だが、俺の母親もエルルとシヤリーナの両親は蘇生が不可能だった。

魂の寿命というのは個人差はあるが、5人が同時に死ぬなんて普通ありえない。ここから得られる結論はなんだ・・・簡単なことだ、魂を殺すことのできる奴が5人を殺した。

そして、俺はそんな手段を持つ奴らを知ってる。『魔女狩り』そう呼ばれる集団、黒魔術式の武器を持ち蘇生不可能な魂の死を与える手段を持つ。

そうか・・・ならば、奴も『魔女狩り』なのか・・・。

「お兄ちゃん？」

エルルに呼ばれて我に帰る。知らない間に顔がだいぶこわばっていたようだ、眉間にしわを寄せすぎ

て顔の筋肉が疲労している。俺は平常心を心の中で訴えながらエルルに尋ねてみた。

「それが初恋？」

その瞬間にエルルの顔が真っ赤になった。凶星か・・・ならば、そいつが『魔女狩り』のメンバーということは控えていたほうがいいだろう。『魔女狩り』のことも、自分の命の恩人が親の仇なんてことも知らないほうが・・・ん？なんでエルルとシャリーナの両親を殺した奴が、エルルとシャリーナを助けたりしたんだ？俺は心の奥底にひっかかるものを感じながらも、母親の仇の手がかりを見つけた喜びが勝つていたため深く考えるのをやめてしまっていた。

「・・・まさか、こんなに身近にヒントがあつたとはな」

独り言を呟く俺をエルルは不思議そうな目で見た。俺はなるべく心配かけまいと、エルルに笑って答えてやる。普段しない笑顔を作るのはなかなか難しいものだ・・・。

「あ・・・で、でも・・・それは、昔の話で・・・今は・・・」

あたふたとするエルルが顔を真っ赤にしてついには黙りこくってしまった。たく・・・名前も知られてないのに、このまでこんなかわいい女の子にもてるなんてうらやましい男もいたもんだ・・・。

俺はあわてふためくエルルの頭を軽くなでると、賽銭箱への道に戻っていく。というか、この神社賽銭箱遠いな・・・。

共通点？（後書き）

修学旅行や部活での行事がかさなり、2月なのに初詣・・・。
ヤ
バイ・・・。頑張ってこの話から抜け出そう・・・。

ラブラブ？（前書き）

なんだかんだでエルルと2人きりで初詣に来ていた悠夜。2人
いるうちに、エルルの両親の死について話を聞くことになった。そ
して、その時にエルルを助けた男がいたことを知る。それは、悠夜
の母親を殺したあの男だった・・・。

ラブラブ？

相変わらずの人ごみの中、俺たちはこれでもかと言っくらのろのろと歩いてた。くそ・・・人ごみが鬱陶しい、いつそ全員吹き飛ばしてやろうか・・・。そんなことを考えながらも、やはりさっきの話が気になってしまう。

俺の探している男とエルルの初恋の男、そして、『魔女狩り』の存在。くそ、考えてもらちがあかねえ。

エルルとの会話もそこそこに、ついに長かった苦難の道を越えて寶銭箱までやってきた。初詣がこんなに気力と体力を有するものだとは知らなかったよ。財布の中をあさって5円玉を適当に放り投げて一応手を合わせる。

願い事は特にねえ。つうか、俺は神も仏も信じちやいねえ。

でも、1年の初めくらい信じてみてもいいかもな・・・。自分でも神頼みなんてバカなことだと思うが、心の中でそっと今の願いを唱えてみた・・・。

「お兄ちゃん、何をお願いしたの？」

エルルが恒例ともいえるような質問をしてくる。

「家内安全と金だな・・・」

無論そんなことは頼んじやいねえ、聞かれたから即席で考えただけだ。

「お前は？」

俺はエルルを見下ろしながら尋ねた、エルルは両人差し指を合わせながらうつむく。

「な・・・内緒」

お決まりの問答を繰り返したあと、俺らは帰ろうと後ろを振り返る。またこのワラワラとした人ごみを抜けなきゃいけないのか。俺はエルルの手を引いて神社脇の茂みへと入っていく。

「ちょ・・・お兄ちゃん!？」

何も言わずに手を引っ張ったため、エルルは驚いている。そうだよな、何も言わずに茂みに連れ込まれようとしたら誰だって焦るわな。まあ、抵抗しただけ俺は信用されているのだろう。

「こつちを抜けたほうが、人ごみに入らずに済むだろ」

俺がそういうと、エルルは納得したのかしてないのか分からない表情のまま俺についてくる。人

ごみから完全に離れ、徐々に雑踏のざわめきが遠ざかっていく。月の青白い光が幻想的な感じだな。などとガラにもないことを考えつつも歩いていく。

風が緩やかに吹き、木々のざわめきだけが聞こえてくる。その風は少し肌寒かったが妙な心地よさを感じさせた。

歩きたびに足元に茂った草がガサガサと音を立てていた。二つの

音が不意に一つになる。俺は振り返り、エルルを見た。

「どうかしたか？」

風に揺れて顔にかかっていた髪を払いながらエルルに尋ねる。エルルはうつむいて口をつぐんでいたが、ゆっくりと顔を上げると俺をまっすぐに見つめる。

青白い月明かりがエルルの白い肌をより白く、赤い瞳をより赤く見せた。

「お兄ちゃんは、メアちゃんのことどう思ってる・・・」

不意に投げかけられた質問にとっさな答えが出なかった。なんで急にメアの話しなんか持ち出すんだ？ それにしても、メアか・・・。

「変な奴だよな、最初は何考えてるか分からなかったが・・・。最近は何が言いたいかなんとなく分かるようになったかな」

俺が悩み悩み考えて答えを出したが、エルルは納得がいてないようでゆっくりとうつむき始めた。

「そうじゃなくて・・・あの・・・」

エルルはしばらくうつむいたままだったがふっと顔を上げた。少し潤った瞳が俺を一直線に見つめていた、普段は俺と目を合わせようとしないエルルがここまでまっすぐな瞳を向けたのは珍しいな。

月明かりに照らされたエルルに俺はしばらく見ていた。いや、正確には魅せられているのかもしれないな。

「大人っぽい方が・・・いいとか・・・」

聞こえるか聞こえないかの境界ぐらいの声で言う。蚊の囁くようなとはこういう声の事を言うんだろな。これだけ声が小さいと、俺に語りかけているのか、独り言なのかさえ怪しい。

それにしても、メアが大人っぽいかな？　ちびっ子に混じって人形掬いに全力を出すような奴だぞ、泣き虫だし、暇さえあればお菓子かじってるし、この前なんて朝食にバームクーヘンを食ってるし。光喜

大差がないんじゃないか。などと考えていると、ふと今日の事を思い出した。

どちらも屋台で俺と並んだとき、メアは彼女と間違われ、エルルは妹と勘違いされてたよな・・・。
まさか、そんなことを気にしてたのか？

「別に・・・可愛けりゃどっちだっていいだろ？」

俺は悪態をつきながら元の進行方向へと歩き出した。エルルはゆつくりと俺の後ろをついてくる。背
中越しにエルルの沈んだ顔が見えるようだ。

「・・・お前も十分だと思うぞ」
「え・・・？」

エルルは小さな声を上げると、エルルの足音が止まる。たく・・・

こつちだつて恥ずかしいの我慢して
言ってるんだぞ・・・。

「エルルも十分魅力的だつて言つたんだよ!!」

俺は怒鳴り声に近い声を上げると足早に歩き出す。くそ、冷え上
したみたいだ、顔が熱い。エルルも

それにつられて駆け足でついてくる。俺はエルルの方に振り向いた。
振袖と髪が風に揺れ、胸元の銀の十字架が輝き、青白い月明かり
に包まれたエルルの顔は、驚く

ほど柔らかな笑みを浮かべていた。

まったく、たった一言で機嫌が良くなるなんて・・・安上がりだ
な。

そんなことを考えながら、俺の後ろではなく隣を歩くエルルを見
て、こんな平和が永遠に続けばいい
と思つてしまった。

だが、それは叶わない願い・・・。

いや、本当は俺はそんなこと望んじやいないんだ・・・。

心の中では、奴と戦うことしか考えていない・・・。

復讐のために戦いに身を焼く、この運命から逃れない限りは・・・

。

この平和も、いつか消えてしまふんだろうな・・・。

ラブラブ？（後書き）

初詣がやつと終わった・・・もう、バレンタインの時期になっちゃってるし・・・。バレンタインも何かしようかと思ったけど、この調子だと間に合わないし止めておこう・・・。

第6話「使い魔とマスター」(前書き)

初詣も済み、寝正月を満喫した悠夜はまたせわしい毎日が近づいてきた。

第6話「使い魔とマスター」

皆さん、お正月には親戚に会いに行きましたか？ 俺はというと・
・そんなめんどくせえことや

つてられるかボケって感じです。正月はほとんど家で過ごしてたも
んだから、親戚の奴から電話

がかかってきやがった。来週の日曜に、陽河家現頭首であるクソジ
ジイのなんかの祝いだっけ？

誕生日じゃなかったが・・・。まあ、とりあえず親戚中が集まるの
で次期頭首である俺にも来いと
のことだ。

「それで、何やってるの？」

光喜が夜の公園で地面に何か書いている俺に尋ねる。その手には
落ちていたサッカーボール
があつた。

「影武者を作ってたんだよ」

俺は煙草を咥えながら地面に魔方陣を書き続ける。これは使い魔
を作る魔方陣だ、俺は色々な
物を媒体にして使い魔を作ることができる。今は公園の土を媒体に
して使い魔を作っているところ
というわけだ。

「自分そっくりな使い魔を作って、親戚の集まりに行かせるの？」
「そうだ・・・」

俺は生返事をしながら淡々と作業を続ける。

「そついうの職務怠慢って言うんでしょ」

たく、どうでもいい言葉を知ってるなどで覚えた。

「刑事アニメ」

はいはい、そうですか……。最近のアニメも侮れないな。それはそうと俺の邪魔だけはしないでく

れよ。またいつぞみたく、気が付いたら俺や光喜やエルルの精神が入れ替わってたなんていやだからな。

「ふう……。よっしゃ、詠唱をはじめから離れてろ」

俺はそついうと魔方阵の中から光喜を追い出した。光喜は退屈そうにドリブルをはじめた。さて、

高等な使い魔を作り出そうとすると集中力があるんだよな……。

俺はゆっくりと詠唱を始めた。夜の空気は声が透き通って詠唱がスムーズに進むような気がする

る、悠夜という名前だからというわけではないが、夜に高度な魔法を使うのはそついうった雰囲気が好きだからだ。

すると突然、ボールがバウンドする音が聞こえた。たく、俺の集中力を乱すなといっ……。あの……。

何か俺の足に当たったんですが？ 足元を見下ろすとサッカーボールが転がっており、そいつ

は魔方阵の一部を見事にかき消してなさった。

俺がそれを認識した瞬間、魔方阵は真っ赤な光を放ち始めた。

ドカーーーーーーン！！ そんな擬音がぴったりなコミカルな大爆発が起きた。辺りは土煙に包まれ、爆音の余韻だけが耳に残っている。いや、生きてるってすばらしい……。

「光喜ーーーー！！」

殺す。今日こそ三途の川の向こう側まで吹き飛ばしてやるさ。俺はぶっ倒れている光喜の頭を掴むと、上下左右に揺さぶる。

「てめえ、邪魔してんじゃねえぞこらあ！！」

光喜の首を腕で固めると、頭を握りこぶしでぐりぐりと攻撃する。

「ふあ、ふえ！！ ご、ごめんってば、ほ、ほら、失敗してないじゃん！！」

光喜は俺の腕の中でもがきながら砂煙の中の人影に指差す。おいおい、あんな不完全な魔方阵で使い魔ができるわけねえだろ……。

やがて土煙が晴れると、異形なモンスターでも、ゾンビやゴーレムでもない完全な人の形をした使い魔がそこにはいた。

「ほらね、成功してたでしょ」

光喜がにこやかな顔をしていた、微妙に顔が引きつっているがな。

「ほう……お前の目には俺はこんな可愛く見えているんだな」
「ゴメン……」

俺の目の前には黒髪、黒い瞳までは俺と同じだが、黒いローブを着た十代前半ぐらいの女の子がペタリと座り込んでいた。

「失敗して、なんかよく分からんのを召喚しちゃったようだ、多分浮遊霊かなんかだろう」

あゝ、めんどくさいなあゝ。事後処理っていうのが一番嫌いだ。俺はそのキョトンとしている少女に片手をかざした。

「何するの？」

光喜が不安そうな顔で俺に尋ねた。事後処理だ事後処理。

「失敗したんだから、取り消すんだよ・・・」
「それって、この娘を消すってこと？」

まとめるとそうだな。

「ダメダメ、ゼーゼーったいダメだつて!!」

あのなあ・・・元々死人だぞ、それがここに存在していること自体がイレギュラーな事態であり、道徳的にも許されないことだな・・・。

俺が珍しくも人間のあり方について語ろうとしていると、少女は俺のコートのすそを掴んで引っぱ張った。

「ご主人様」

か細い声で少女はそう言った、その瞬間俺の中の何かのスイッチが入っちまったようだよ。

「今すぐ消す!!」

「悠夜、落ち着いて!!」

俺と光喜の問答を不安げな瞳で見つめていた少女は、光喜の激しい反対によりとりあえずは家に連れて帰ることになってしまった・・・なんでだろうな・・・。ところ変わって、家のリビングで半ばやけ気味にウイスキーを飲みながら今後の事を話し合っていた。

「面倒見切れねえよ・・・」

ウイスキーを持つ手が口にくまぐま運ばれないのは、その手を少女がずっと掴んでいるからだ。

「えっと・・・君、名前は？」

光喜は俺の言葉をことごとく無視して少女と会話する。おい、兄のありがたい言葉を全て無視するのはやめろ。

「無いです」

「ナイちゃんか、俺は光喜で、そっちが悠夜」

わざとやってるのか光喜？ナイなんて名前ありえねえと思わねえ

か？いや、この世界なら必ず

しもありえないと言い切れないか・・・。

光喜が俺の自己紹介をすると、名無しの少女は俺の顔を見る。俺の顔はさつきから眉間にし

わが寄ったまま元に戻らないんだがな・・・。

「ご主人様」

そういいながら、すそを引つ張ってくる。いや、確かにお前の主

は俺だが、周囲の人間に誤解

を生むためそういう言い方はやめてもらえないかな。

俺の提案を受けその少女は少し首を捻って考える。

「・・・旦那さま？」

・・・やっぱ消すか。

第6話「使い魔とマスター」（後書き）

内容がうつすーい話なんですが、ミヤはいないと後々困るのでこの話が入り込みました。この話が終わる頃には、内容が真剣になってくる・・・予定です。

新たな家族？（前書き）

親戚内での集まりをサボろうとした悠夜が使い魔を作ろうとしたとき、光喜のせいで儀式が失敗してしまう。

使い魔ができるはずが、黒い長髪の少女ができてしまい、光喜の猛烈な反対もあり、消さずに家までつれて返ることになってしまっていた。

新たな家族？

そして、しばらくは、そりゃあ語りきれないほどの論争が繰り広げられた。その間に、少女を
無に帰そうとした俺を光喜が止めたい回数は片手では収まらなくなっていた。

「では、マスターでよろしいですね」

事務的な笑みを浮かべると少女は俺の顔を覗き込むようにしてみた。前後の会話で分かった

ことは、コイツは俺の事を名前で呼ぶということは思いつかないらしい。

「もう、それでいいよ・・・」

俺が疲れたように言うと、光喜がテーブルに身を乗り出した。

「じゃあ、今度は君の名前だね」

ルンルン気分でいうのはいいが、名前をつけて愛着ついちまうと消すときに不便だぞ。という

か、この失敗作はいつまでここにおいて置くんのだ？

「うーん・・・花子、良子、妙子・・・」

光喜がブツブツとなんか言ってる・・・上記のほかにもいくつか聞こえたが、すべて。子といっ

た感じだ。なるほど、お前の頭の中では女性の名前は子がつかなき

やいけないんだな。

「決めた！！　べか——」

「ミヤにしよう」

光喜が何か言おうとしたのを瞬時にさえぎる。個人的にはべかのあとに何が続くのかも気になるところだが、聞くとこのバカを殴りたくなるに違いないので止めておこう。

「夜に魅入られた者で、魅^{ミヤ}夜」

ウイスキーを喉を鳴らしながら飲んでいると——マネするなよ——、不服そうな光喜の目が向けられてくる。

「えゝ！？　そんな変な名前」

お前にだけはネーミングセンスをけなされたくないな。お前に比べたら、俺程度のネーミングセンスでも流行語対象が取れそうだが。光喜が俺に講義を続けようとすると、ミヤ——未定——が制止した。

「いいんです、マスターがつけてくださった名前ですから」

ミヤ——決定——がそういうと、光喜は本人がそう言ったので渋々納得したようだ。そうだな、ミヤだって、べか。子みtainな名前はいやだな。さてと、名前をつけた方がいいがコイツをこれ

からどうするかだな・・・。

俺が眉間にしわを寄せながらミヤを見つめて考えていると、ミヤは大会社の受付嬢のような社交

的な笑みを向けた。幽霊を使い魔として召喚した場合、生前の記憶が消されていることはよくある

ことだが、なんにしても、こいつが何者なのかハッキリしてないんだよな。自分の名前も分らない

と本人は言ってるし、コイツが幽霊かどうかさえ怪しい。

精霊・悪魔・天使みたいな高レベルな存在とは思わないが、そもそも、コイツが世界に存在してい

たのかどうかも怪しいものだ・・・。おっと、こういう言い回しをすると混乱するか・・・要するにあの儀

式が失敗した瞬間に生まれたという可能性もあるということだ。

「——じゃあ、今は使っていないお父さんの部屋使つてよ」

「ハイ」

ちょっと待て、俺が考え事している間にどこまで話が進んだんだ。

まさか、チャンネル争いがどうこ

うのレベルまで話が進んでないだろうな。畜生、いい具合にアルコ

ールが頭に回ってきて話の途中

段階を思い出せない。

「では、マスター失礼します」

ミヤはそういうと立ち上がってリビングから出て行くとする。

「お前、睡眠とかとるのか？」

魂が入っている入っていないに関わらず、元が土だからな。睡眠

が必要とは思わないが……。ミヤに
尋ねた俺に、ミヤに代わって隣に座っていた光喜が言う。

「悠夜、話し聞いてた？」

光喜が間の抜けたような声で言う。その間にもミヤはスタスタと俺の前から姿を消した。

「シャワー貸してあげるって話だったじゃない」

だっただじゃない、といわれてもな。そもそも、俺を話に混ぜてくれなかったのはお前だろうが。兄として結構寂しかったぞ。まあ、その寂しさもコップ一杯の酒でどうでもよくなるのだが……。ん？シャワー？

「溶けるぞ」

「ふえ？」

間の抜けた声を出して目を丸くしている光喜をジト目で見つめる。人間が溶けるわけ無いじゃん、とでも言いたげな瞳は俺を哀れんでいるかのようにも見えた。

「悠夜、飲みすぎ」

まだ、2瓶目だよ。酔っ払ってるわけじゃねえ。思い出してみろ、アイツの体の原材料は土100%だぞ、水にぬれたら泥になって体が崩れ落ちるに決まっているだろうが……。

「……アー！！」

ようやく理解したかのように驚愕の声を上げて光喜は急いで立ち上がった。そしてドタドタと光喜は走っていく。光喜、どこにいくつもりなんだ？　もしかしてとは思うが・・・

「キャーーーーー!!!」

光喜がリビングから走り去って数秒後にミヤの悲鳴が聞こえてくる。光喜、お前はバカだよ・・・。

それからというと、光喜と一緒に炭酸飲料を飲もうとして顔が溶けかけたり、光喜と一緒に吹き掃除

をしようとして手が溶け出したりと、まあそんな感じだ。それにしても、光喜よ・・・お前には学習能力と

いうものがないのか？　そして、ミヤはなぜ断らんのだ。

ともかく、ミヤが溶けるたびに俺はミヤの体の作り直しをさせられたのだった。

夜もそろそろ明ける頃、光喜はとくに自分の部屋で深い眠りについていた。俺はというと、ここ数年

の事故および殺人などの記録を調べていた。幽霊というものは、年月と共に自らの姿が曖昧になり、さ

らに時を重ねると精霊と呼ばれる存在へと変わっていく。ミヤは限りなく自分の姿を残したまま召喚され

た、つまり、幽霊だとしたら死んでからあまり年月が経っていないのだろう。

「とはいっても、名前がわからないんじゃないか・・・」

俺はリビングのテーブルに、親父の部屋にあった数年分の事件の

ファイルを投げ出す。親父も名がある魔法使いらしく、いろいろとした分野の仕事に手を伸ばしているため、こういうものがこまめにとってあったりするのだ。

俺は口元で短くなった煙草を、灰皿にできていた吸殻の山に突っ込んだ。手元には睡眠欲を抑えるために酒類ではなく、冷め切ったブラックコーヒーが置いてある。俺がそのマグカップに入った冷たいコーヒーに口をつけながら、4冊目になるファイルを開ける。新聞の大きな見出しと写真だけを見るようにパラパラと適当にファイルをめくっていった。すると、ファイルのページが数枚引きちぎられていたことに気付く。日付は10年前のあの日、母さんの命日だ。そうだな、あの事件は親父にとって忘れない出来事だったんだな。

ふと、ページが破られていたために見えていたページ、つまり、破られたページの前のページにあたるページに目をとられた。

新たな家族？（後書き）

会話のみで終わっちゃいましたね、まあ、意味ありげな終わり方ですが、その事柄がどの程度ストーリーに影響するかというところ・・・
・あまり期待しないほうがいいと重なりますね。

犬猿の仲？（前書き）

陽河家の集会をサボろうとした悠夜は光喜のせいで、使い魔作成に失敗。そして、その失敗で現れた名も無き少女を魅^{ミヤ}夜と名づけた。しらみつぶしに昔の記事を参考にして、ミヤの招待を探ろうとしていたとき、気になる記事を発見した。

犬猿の仲？

「悪魔召喚・・・」

その記事には大きくそう書かれていた。詳細は、魔法学校の学院生徒、他の世界で言う大学生ぐらいの若者の集まりであるギルドが精霊召喚に失敗し悪魔を召喚。結果はというと、近所の住人までを巻き込み、8名の死者と12名の死傷者、それに1名の行方不明者まで出ている。騎士団と警察、それに魔法学校も調査に及んだが行方不明者の所在はつかめなかった。

「行方不明だと？」

悪魔と契約した場合魂を奪われる。だが、それは肉体から抜け出した魂の話で抜け殻の体は残るはず・・・悪魔が人を喰らうタイプだったのか？ いや、それなら1人しか行方不明者しかいないのはおかしい。少食の悪魔？・・・却下だな。

いや、そんなことよりミヤの正体だったな。この死者の中にミヤがいたのか？ 俺は新聞記事を隅から隅まで読んでみるが、あいにく死傷者についての情報は載せられてなかった。

そりゃそうか、プライバシーは大事だもんな・・・。

この記事に書かれている名前といえば、無視したい奴が一つあるだけだ・・・俺は記事のその部分に指を沿わしてみる、木戸きど 鏡志きょうし。あの魔法学校のいけすかねえ教師だな。

「あいつ、口だけじゃなかったんだな・・・」

どちらにしても、ミヤ自身が思い出してくれないとなんにもならんか。そもそも、あいつが魔力

生命体でないという確証もないわけだし・・・。やっぱり、野放しにするには危険だな。

「やっぱり、消すのが一番なんだけどな・・・」

睡眠不足で回転数が落ち込んでいる頭で考えてもそこにしか行き着かないようだ。ここは一

度睡眠を取ったほうがいいな。そう思ってソファから立ち上がり、後ろを向いた瞬間に胸に何

か突っ込んできた。一瞬体制が崩れたが、すぐに持ち直して丁度鳩尾辺りにある頭を見る。

「・・・ミヤ？」

他に何か言うこともある気がするが、とりあえず、それしか口からは出なかった。俺の服に

ぎゅっとしがみついている手は震えていたが、不思議と彼女は俺に何も訴えてはこなかった。

しばらく、重苦しい沈黙が続いたあと、俺はため息をつきながらミヤの頭をなでる。

「別に今すぐ消したりしねえよ、お前が俺や光喜にとって有害と判断してからだ・・・」

ホントはすぐにでも消そうかと思っていたが、脅えた美少女にしがみつかれて断れる男がいるだろうか？ 断言しよう、ホモ以外無理だ。

手の震えは止まったようだが未だにミヤは俺にくつついたままだ、誰かどうにかしてくれ。

まあいやな気分ではないんだがな。まったく、男心を良く分かってらっしゃる。

はあ、昔から女には甘いんだよな、俺。

「悠夜？」

すると、何の前ぶりもなしに寝ぼけ眼の光喜が現れた。コマンド、1・戦う 2・逃げる・・・じゅな

くて。しばらく、光喜の目が俺を捕らえるのに時間がかかっていたが、やがて光喜は現在の状況に納得する。

「・・・俺、もう一度寝てくるから」

光喜はなにやら赤面しながらいそいそと帰っていく。おいこら、何を考えていたなにを！？

俺はミヤから離れて光喜を追う。リビングから出るときに後ろを振り返ったとき、一瞬だがミヤ

の口からはチロと可愛らしい舌が出ていた。まあ、俺の視線に気が付いてすぐにしまったがな。

「ありや、男を手玉にするタイプだな・・・」

どっちが使い魔でマスターなのか……。少なくとも俺にとって有害な可能性が大きいな。

その後、光喜の誤解を解こうと俺が話しているうちに、光喜は二度寝してしまっていた。朝食の時に聞いてみたが、赤い顔して知らないのとぼけやがる。

「もういいか・・・」

優雅に朝食を取っていると、優雅なひと時を邪魔する奴がインターホンを連打している。タケシかシャリーナだな・・・エルルは連打なんてしないし、メアにいたってはインターホンなんて鳴らすのかどうかも怪しい。

「私が出てきます」

「いや、ほっとけ」

立ち上がったミヤを静止してコーヒーを飲む。うむ、インスタントとは思えないこの香り、なかなか美味なり。

しばらくすると、玄関のドアがガチャガチャとなる。鍵ぐらいしてるさ、静かな朝の時間を邪魔されたくないからな。玄関がシンと静かになると、今度は狭い庭の方から声が聞こえてくる。すると、リビングと庭の勝手口にもなっている窓が開け放たれた。こっちは鍵をしていない、窓ガラスを割られちゃ困るからだ。

「なんで、誰もでないのよ!!」

シャリーナは怒鳴るような、というか怒鳴りながらそういった。ミヤは俺が制止した、光喜ならスクランブルエッグの皿に頭をつ

けて寝息を立てている、俺はお前が嫌いだ、以上が出なかった理由だ。何か問題でも？

「・・・あの・・・その子は」

シャリーナの後ろにいたエルルがミヤを指差しながら言う。うむ・
・なかなかいい質問だ。

どこから答えるべきか、とりあえず、陽河家の集会の話から言うべきか・・・。

俺が当たり障りの無い完璧な言い訳を考えていると。

「ご主人様、この人だれですか？」

ミヤがそこそこ大きな声で尋ねる。おい、マスターになったんじやなかったのか？ いや、ていうかわざとやってるだろ、あんた・・・。

「・・・あんたも男の子やってるわね」

シャリーナが俺を見る、若干その目に哀れみやら蔑みやら失望を感じるのは気のせいだろう

か。一応言っておくが、健全な男子は美少女からご主人様なんて呼ばれないぞ。

「・・・・・・私も」

エルルがうつむいて何か言おうとしている。まあ、そんなところいないで入って俺の話を聞け。

それとも、忘却術をかけたほうが早いかな・・・。

『説得中ですしばらくおまちください……。』

「大丈夫よ、言い訳しなくても……」

「言い訳じゃねえ!!」

ヒトラーにも劣らない俺の演説を聞いたにも関わらず、ふざけたことぬかすシャリーナに怒鳴りつける。

エルルはどうやら納得してくれたようだが、そんな悲しそうな目を向けるな……。何もやましいことはねえよ。だから、哀れむな……。いつそのこと笑ってやってくれ。

「ねえマスター、今度は私にこの人たちの紹介してくださいよ」

ミヤはそういいながら、俺の腕にすがりついてくる。その目がエルルとシャリーナをおもしろそうな

目で見ている。こいつ、もしかして腹黒か？

「あつと……。こぼしちゃった」

シャリーナはわざとらしく手に持っていたコップの牛乳をこぼす。それは、テーブルからミヤの足に垂れ流れて、足を泥に変えていった。その結果、体制を崩したミヤは崩れ落ちて床に這いつくばっている。

「ちよつと!! 何するんですか!!」

ミヤがシャリーナを足元から睨む。

「ごめんなさい、今すぐ拭きますね」

気のせいかな、台拭きで拭いているんだが、どうもそれが全てミヤの方に流れていつてるように見えるのは・・・。

「きゃー!! もう、マスター助けてくださいよー!!」
「あら、ごめんなさい、気付かなかったわ」

ふう、女つて怖い。そんなことを考えながらも、皿に頭を突っ込んだまま寝ている光喜を起こして顔を洗ってくるように指示する。そのついでに、この場から逃げるためにコーヒーの御代わりをキッチンまで注ぎにいった。

「ありやりや、顔が溶け出してるわよ」
「アンタのせいでしょうが!!」
「・・・シャリーナ・・・謝ったほうが」

女3人のみがテーブルには残され、妙にドロドロした雰囲気が漂っていた。ミヤは実際ドロドロしてるがな。

「不可抗力よ不可抗力、豚も木から落ちるってね」
「えっと・・・猿も木から落ちるだよ・・・」

豚はおだてない限り木にのぼらんど。それに、その言葉は得意分野でも失敗することを意味するわけで、お前の得意分野はコップの牛乳をこぼさずに飲むことだ

ったのか？

「あはははは、バカだバカだ」

ミヤが床でドロドロとしながら笑ってる。なんか、半分溶けかけてるお前はモンスターに間違えられても仕方ない状態になっているぞ……。通りすがりの勇者様に切られないように気をつけるよ。

「あら、またこぼした・・・」

おいおい、今度はパックごとですか？ 飲み物を粗末にするなよ、そして、リビングを牛乳臭くするな。あとついでだが、ミヤを修復するのも俺の仕事なんだぞ、これ以上手間を増やすな。

「エルルとメアだけだと、静かなのにな・・・」

この前の初詣のことを思い出しつつ、あれをこの二人に置き換えてみる。・・・地獄だ、不快指数300%オーバーだな。

犬猿の仲？（後書き）

この話でだいたいミヤの位置づけが決定しました、男を手玉にするタイプで、シャリーナと仲が悪い。そして、水に弱い。ミヤに関しては、使い魔なのでその程度の認識でいいだろうと作者自身思っています。

観光地？（前書き）

陽河家の集まりに行くのがイヤで悠夜は使い魔を作ろうとする。
だが、光喜のせいで失敗し変わりに何もかもが不明な少女が完成。
少女にミヤという名をつけて、とりあえずは家に置くことになった
たが、翌朝になり、エルルとシャリーナが来ると、主にミヤとシャ
リーナの女の戦いが始められた。

観光地？

イチ、サン、マル、マル時。要するに午後1時。誰が言ったのかはよく分からんが、恒例

のダンジョン探索に出かけることになってしまっていた。俺としては徹夜明けなので惰眠

でも貪りたい気分だったのだが、俺の意見はことごとく全て却下された。

まあいいさ、どうせいつものことだ・・・。

「それで、今日はどこにいくんだ？」

桃源郷か？ 竜宮城か？ それとも、鬼ヶ島まで鬼退治に行くのか？

「メアちゃんに教えてもらったダンジョンだよ」

エルルが爆弾発言を言ってくれる。えっと、メアが情報源なんだな・・・。お前たちはそれでいいのか？

「ふえ？　なんで？」

光喜は素で俺に疑問を返してくる。あのメアだぞ、とんでもないポケポケ空間に連れ込まれるか、

モンスターが360°。囲んでいるような場所という可能性が非常に高いということに何故気付かないのだ。

「ナスはなるよ!!」

シャリーナがぐつと親指を立てて言う。

「はあ？」

ナスつて、茄子か？ 茄子畑なんていきたくねえぞ。

「シャリーナ・・・成せばなるじゃないかな？」

エルルが控えめに言うと、「別にいいのよ」とかいいながら、シャリーナはエルルの両頬をつねっている。さすがエルル、シャリーナの通訳に関しては神の域に到達しているようだ。

2人のやり取りを見ると、ミヤが寄ってきて壁にかけていたコートを差し出してくる。

「ではマスター、行きましょうか」

ため息をつきながらコートを受け取ると、のんびりと羽織ることにする。使い魔に仕切られるなんて、俺も堕ちたな。

ふと、シャリーナの視線が俺に向けられているのに気が付く。いや、正確には俺の傍にいるミヤにだな。

「新人は荷物もちって決まってるんだからね、とつと働きなさいよ!!」

荷物なんてあったのか、そして、誰がそんな決まりを決めた。人

差し指をピンと立てていう

シャリーナのことを、ミヤは鼻で笑ってさらに俺に近づく。

「私はマスター以外につくすつもりはありませんから」

堂々宣言しながらシャリーナを睨むミヤ、そして、睨み返すシャリーナ。

「……ダンジョンに行くんじゃないのか」

俺の傍で視線をバチバチと火花が散るほどにぶつけ合うのはやめてくれ、ハッキリ言って
いや、控えめに言っても迷惑だ。

「ハイ、マスター」

「あ、あんたに言われなくてもそのつもりよ!!」

2者ともそれぞれ違う反応を返してくれる。このパーティーが果てしなく不安だ……。

その後、メアに紹介されたダンジョンに向かう道ではシャリーナとミヤの喧嘩が耐えなかった。

時々、エルルが仲裁しようとしていたがあえなく失敗。失敗したエルルが俺の隣に並ぶと、

ほぼ100%ミヤが突っ込んできて喧騒が俺にまで来る……。

ともかく、ミヤは俺の隣から離れるつもりはないらしい。

そして、たどり着いたダンジョン。

「普通だ……」

「普通だね」

「普通ね……」

「普通ですね」

ちなみに、誰のセリフかいまいちわからんので解説すると。上から俺、光喜、シャリーナ、ミヤだ。まあ、そんなことはどうでもいいとして……。

「み、みんなメアちゃんを信用してあげようよ……」

エルルが苦笑いしながら言う。いや、これは驚くだろ……。そのダンジョンは地下へと繋がる古い遺跡のようだ。ちなみにダンジョン名は、『墮落の宮殿』。旅行誌にも載っている有名なダンジョンだ。まあ、そんな有名なダンジョンだと宝箱が空の場合が多いんだけど。な。今日はあるかな……。

なぜか分かんが、ダンジョンでは定期的に宝箱の中身が補充されている。

誰がなんのために補充しているのかは知らんがありがたいことだ。一行がダンジョンに一足踏み入れたとき、なんとなく妙な気配を感じた。周囲を見渡してみる。俺の目が捉えられる範囲内には誰もいない。

「どうかした？」

光喜が立ち止まった俺に尋ねる。ミヤは「大丈夫ですか」とかいいながら、くつついてくる。邪魔だ、集中できんだろ……！

「いや……なんでもない」

俺は適当にその場を流すとスタスタと歩いていく。気のせいかもしれないが、警戒しておいて損はないだろうな……。

しばらく歩き、特におもしろいイベントもなく進んでいく。途中モンスターが数匹出て来た気もするが、弱い、ダサい、つまらないの三拍子そろったような奴だ。

「きゃっ！！ 光喜君が落とし穴に」

エルルの声がダンジョンの中に響く、そんな警戒心ゼロの奴ほっとけ、いつか自分で上ってくる。とか考えながらも、本気で見捨てていくわけには行かないのでその場で

止まっていると、前方の暗がりから何かが蠢くのが聞こえてきた。

その唸り声は鼓膜をジンジンと刺激するほどに大きく、大気が揺れるのを肌で感じる

ことができるほどだった。

「おいおい……まさかと思うが……」

そいつは四足歩行で歩いてくる。ノシノシやパカパカというファンシーな足音ではない、

ガシャガシャという金属音をたてながらこちらに近づいてくる。

そいつが接近してきて奴の姿がハッキリ見えたとき、啞然としたメアがなんでここを

人に勧めたがるのか分かる気がする。

馬のような下半身と人間の上半身、身長は俺の3倍ぐらい。そして、馬の下半身にある

はずの毛並みが見えないほどに体中に覆われた黒い鎧。兜の中から

覗く赤い眼はギラギラとした光を放ち、右手には3メートルはあると思われる青龍刀のような剣。

「ケンタウロスか？」

思わず疑問が口から出る。俺の知っているケンタウロスはもう少し小さいし、鎧なんて着てないし、武器は弓で光属性の神獣のはずだ。こいつはどう見ても、黒騎士といったほうが近いだろう。こんな悪魔がいるっていう話は聞いたことがあるが、魔力の感じから見て悪魔ではないようだ。

まずいな、この狭い通路だと奴の攻撃をかわすのが困難になる。

「お前ら、走——」

俺がいかけたとき、床にあいた穴が目に入る。そうだった、あのバカがまだ穴の中だった！ 仕方ない、足止めするしかねえか……。俺が敵に向き合うつと、敵は馬鹿でかい剣を振りかざそうとしていた。させるかよ！！俺は奴の目を見て幻術をかけようとする、だが、その一瞬で敵は自分の腕で目を隠した。

「な・・・バカな！！」

幻術は失敗し、剣はそのまま振り下ろされた。だが、俺のすぐ後ろにいたシャリーナが前方にでると奴の巨大な剣を受け止める。普通の人間なら潰されている

るだろうが、シャリーナ

には重量を操る能力がある、剣の重さを軽くすれば……。

そう安心した瞬間だった。

えっ！？……シャリーナはその場に膝を折り、今にも潰されそうになっている。俺は神経を

研ぎ澄まし魔力の流れを探ると、剣にかけられた魔法が吸収されているようだった。

「ちくしょう、魔力吸収系の能力か！！」

俺がもう一度幻術をかけようとすると、またアイツは目を隠した。俺は目を隠している腕に

殴りかかったが、その腕力に振り払われてしまう。床に激突する刹那に体勢を立て直し、敵

の様子を見る、よし……アレに気付いていない。

「ぐおおおおおおお！！」

ケンタウロスはシャリーナを押していた剣で空を切り始めた。幻術にうまくかかってくれたようだ。

その間にもエルルはミヤが光喜を引き上げていた。よし、このまま一気に……。

そう思ったとき、ケンタウロスの剣が黒い光を放ち幻術を解いた。……いや、幻術に使われていた

魔力を吸収したといったほうが正しいだろう。

そして奴は、こちらに向き直る。そして、また、剣を振り上げたときに魔力の弾丸のような

ものがケンタウロスを襲う。ダメージはほぼゼロ、だが、奴の動きは驚くほど鈍くなっている。

「さあ、今のうちに！！」

魔力の弾丸を放った本人である光喜が、一番に奴の足元を走り去る。光喜の時間操作の

魔力を固めた物を奴にぶつけてスピードを落としたようだ。

全員が奴の背後に回りこんだとき、奴のスピードが通常のものに戻った。

また、あの剣か・・・。

俺たちは、奴から距離が十分とれる広い場所を探して走り出した。

「お兄ちゃん、さっきどうやって幻術かけたの？」

エルルが走りながら俺に尋ねる、光喜の時間操作は16秒、シャリーナの重量変化はほぼ

0秒それに比べて、俺の幻術は40秒は効果を持った。今一番有効だったのは俺の幻術だろ

う。エルルもそれを理解して尋ねているようだった。

「いつもは目を合わせて、視覚を通して幻術をかける。だが、さっきのは持っていた煙草に火をつけて投げつけ、煙の匂いで嗅覚を通して幻術をかけたんだ。」

普段は使わない奥の手って奴だな。無論、他にもあるが自分の技をペラペラと喋るほど、

俺は口の軽い男ではない。

俺が淡々と説明していると、エルルは何か考え込んでいる様子だ。数秒後に、エルルの

顔が上がりどうやら俺と同じ結論にいたったようだ。アイツは、なぜか俺のもしくは俺たち

全員の能力を知っている可能性がある。

目を合わせて幻術をかけようとしたとき、それを事前に知っていたように目を伏せたのがそれを物語っている。

だとしたら、ただの魔力の弾丸のダーク、魔力を直線に放出するダークバスターも

読まれている可能性がある。まあ、読まれていなくてもあの剣に有効とは思わんがな。

そんなことを考えていると、丁度よさそうな場所に出る。サッカ―でも十分にできそう

な広さの部屋だ、ところどころ壁だったと思われる瓦礫があるため、2、3つの部屋

だったが壁が壊されて1つの部屋になっているのだろう。

「それじゃあ、どうするの？」

エルルが迫ってくる敵を見ながら言う。まったく、あのモンスターに入れ知恵した奴が誰かは

知らないが俺を誰だと思ってるんだ、その程度の対策じゃこのパーティーは誰一人止められない
ってこと教えてやるぜ。

観光地？（後書き）

なんとなく敵を出したかったんです。ファンタジーだし、ファンタジーらしいことしたいなあゝみたいな。

そろそろ、物語のおさらいを入れないといけなかなゝみたいなことを考えつつ、1番の悩みは、このあとがきに書くことが全然ないという現状でした。

ベストメンバー？（前書き）

魔術の失敗により、ミヤという正体不明な使い魔をメンバーに入
れてしまった悠夜一行。

悠夜たちは、メアのお勧めと紹介されたダンジョンへといった。
だが、そこには、巨大な鎧を着たケンタウロスのようなモンスター
がいる。悠夜の幻術は防がれ、シャリーナの重量操作も魔力ごと剣
に吸収されてしまった。

ベストメンバー？

「いいか、俺の言うとおりに動きやがれ」

俺たちの能力を知っていて、俺たちを倒すことに何らかの意味を持つ奴がいるとしたら、

可能性としてあげられるのはただ一つ……。『魔女狩り』の連中だ。もしも、これが『魔女狩り』の仕業だというのは、あのケンタウロスの正体は召喚獣が使い魔の類だろう。

奴には簡単な行動パターンや対策が叩き込まれていると考えるのが妥当だろう。

どうも奴の攻撃を見ていると野性的な闘争本能しか見えないからな、自分自身が高い知能を持ち合わせていないのだろう。

「なら今までにねえ技をぶつけてやればいい……」

俺が言うと、ミヤが不安そうな顔をしている。

「そんな、いきなり新技なんてできるものなんですか」

なにも新しい能力を身につけるんじゃないんだ、攻撃パターンを少し変えてやればいいだけだ。

「でも——」

「アンタが言うからには、考えがあるんでしょうね」

ミヤの言葉をさえぎるようにシャリーナが言った。エルルも光喜もすでに俺からの指示を待っている状態だ。いつもは俺がこいつらの雰囲気の流れに流されている気がするが、戦闘においての指揮官は俺だ。

おっと・・・あんま時間をかけられねえな、奴が追いついてきたようだ。

「じゃあ、今からプランを説明するぞ――」

説明をはじめようとしたとき、奴がこの広間に入ってこようとした。だが、入り口には防御用の

魔方阵で結界が張られているため、なかなか入れないでいた。

俺が説明を終えるとはほぼ同時に結界が破られた。時間がなかったため、かなり大雑把な

説明になってしまったが、うまく動いてくれよ。

俺はダークバスターを相手の足元に放つ。だが、剣を足元にかざすだけで簡単に防がれ

た。まあ、予想の範囲内だったんだがな・・・。

相手の進行が止まったとき、懐から酒の入った金属製の水筒を取り出し酒を口に含む。

その後、相手に接近しながら跳躍し相手の顔の前までいくと、おもいきり酒を噴出してやる。

「悠夜、汚い」

光喜が後ろで何か言ってる。知るか、お前はお前の仕事をさっさとしろ。

「ぐおおおおおおお!!」

ケンタウロスは上半身を大きく揺らしながら叫んでいる。今度は酒の匂い&液体がかかった

ことにより感じる冷たいという触覚を媒体にしてダブルで幻覚をかける。

だが、やはりあの剣のせいで長くは持ちそうにないな……。まあ、俺の仕事はこいつを60秒

足止めできればいいんだがな。

後方では、忙しく動き回っていたエルルが合流した3人が準備を始めていた。

まず、第1段階として、エルルの変身能力で巨大な斧に変身する。元は華奢な少女とは

考えがたい黒光りした巨大な斧だ。4畳半の部屋には収まらないだろうな。

第2段階としては、シャリーナ的能力でその斧の重量を軽くしてシャリーナが装備する。

最終段階としては、光喜がシャリーナ時間操作でスピードアップ。そして、加速した

状態でケンタウロスに襲い掛かる。

「いつくわよー！ー！！」

シャリーナが無駄に雄たけびを上げながら突撃していった。

さてと、俺はこれからもう一つの仕事だ……。俺は精神を集中させて詠唱を始めた。

シャリーナは、1撃目で右前足にスイングするように、2撃目に馬の胴体に振り上げるように、

3撃目は跳躍して、人間の胴体部分を背後から切りかかる。やっぱり、あの鎧が見た目以上に頑丈だな。

ケンタウロスにほとんどダメージがないまま、奴の幻術が解けたようだ。ケンタウロスは剣を振りかざし空中にいるシャリーナに切りかかるうとする。だが、今度は光喜の時間操作で

落下スピードを遅くしてタイミングをずらし、剣はシャリーナの足元の空を切った。

シャリーナの時間が解かれ、馬の胴体に着地する。そのまま自身自身の重量も軽くしてかなりの高さまで跳躍する。それにより、ケンタウロスの注意が上空にいった。

「やれー!!」

俺の合図とともに、仕掛けておいた罠が発動する。俺は一度ミヤを土に戻しておき、

その後、幻術で奴が苦しんでいる間に足場にエルルに魔方陣を書かせていたのだ。そして、

ミヤを再構成する、ただし……。この前の失敗したときとはわけが違う、俺の儀式だと

使い魔を作成するとき媒体として必要になる、逆に言えば媒体を多く利用すれば……。

「巨大化って奴かな」

奴の足場からは常人の2倍の身長はあるであろうミヤが現れる。

その分、奴の足場の土

が減ったため穴ができ重心がぐらつく。そうなれば、巨大化したミヤが奴を押し倒す。

「倒れてー!!」

ミヤが必死に押すが、巨大化したとはいえ少女の筋力とモンスターの筋力では差は大きい。ケンタウロスは体制を崩したままだが倒れる様子はない。

「ウソ・・・もう少しなのに・・・」

ミヤが必死になって押し込むが、いくら大きくなったってか弱い少女ということは変わらねえんだ。俺は素早くミヤの背後に回りこむと、ミヤと同じ方向からダークバスターを打ち込む。

「マスター・・・」

ミヤが俺の方を振り返っている。視線があいつの方が上だから、見下ろされている感じは氣に入らんが、そういう安心とか安堵に浸ってる目っていうのは嫌いじゃないぜ。

「いいから、押し込め!!」

俺はダークバスターを放っている右手に添えていた左手を前に向け、ダークバスターを2つ同時に放った。ミヤもケンタウロスに向き合い押し込む。

「いつけーーーー!!」

ケンタウロスはついに体制を崩してその場に倒れた。すぐに、ミヤはケンタウロスから離れていく。

「さて・・・とどめの一撃は任せたぜ・・・」

俺は上空で光喜の時間操作でゆっくりと上に飛び上がっているシャリーナを見る。その時

間操作が解かれると、跳躍の余韻で少し上昇した後、落下運動を始める。

「行くわよ、グラビティアックス!!」

どうやら、最後の一撃に考案者の俺に断りもなく技名がついたらしい・・・。最後の一撃、そ

れは、大斧の重量を元に戻し、さらに能力でその何倍も重くするというものだ。しかも、光喜

の時間操作で落下速度を上げている。

落下のスピード×光喜の能力×大斧の重さ×シャリーナの能力〃

この技の威力。

加速に加速を加え、ケンタウロスは逃げる暇もなく真つ二つにされた。

これだけ掛け算を繰り返せば、どれだけ大きな数字になるかなんて小学生でも分かるだろう。

「ぐぎゃああああああ!!」

最後の断末魔を轟かせながら、ケンタウロスは無に還っていった。まったく、手こずらせてくれたじゃねえか。

エルルは大斧から元の姿に戻り、ミヤも巨大化したままでは不気味なので元に戻す。

「まあ、私がここにいるんだから、当然といえば当然よね」

シャリーナが誇らしげに言う。まあ、今回の決め手はお前だったわけだから素直にほめてやろう、口には出さんがな……。

「エルル、大丈夫か？」

「え……あ、うん、大丈夫だよ」

俺の言葉にうつむきながら答える。顔がやや赤いのは疲労からくるものだろうか、大斧になつて鉄になつていたとはいえ、あの鎧を砕いたのは最終的にエルルだからな……。負担が大きかったのかもしれない。

「悠夜、俺もがんばったよ」

教室で教師に手を上げるように、手を上げて主張している我が弟。お前はずっと後方支援だっただろうが……。その後、ミヤに視線を向けてみる。勝利したというのに、なんだかキョトンとしているようだ。

「大丈夫か？」

俺がミヤに近づいて尋ねてみる

「——です」

は？ なに言ったかいまいち聞こえなかったんですけど……。

俺はミヤに近づいて耳を澄ましてみる。

「すごいです!!」

ミヤは急に大声を上げて目をキラキラさせる。そんな近くで大声を上げるな、耳がキンキンする。

「マスターたちすごいチームワークでした!!」

よし、わかったから興奮するな・・・テンションを下げる。ミハーみたいな目を俺に向けるな。

「マスターたちって、お前もその中の1人だろうが・・・」

まだキンキンする耳を押さえながら適当に言った。ミヤのテンションは下がってない。こうもハイテンションな奴が多いとつらいぜ・・・。

「さすがマスターです。こんなすぐに全員の能力を活用した作戦を立てられるなんて・・・」

まあ、昔から難しい事を考えるのは俺の仕事だったからな・・・。光喜は考えさせても突拍

子もないことをするだけだし、シャリーナは考える気がない、エルルは頭はいいがみんなを引っ張っていくリーダーシップはゼロ。ここにはいないが、タケシはバカ。メアは論外。

必然的に司令塔するのは俺しかないわけだ。

「それに、みんなにすごく信用されてるし．．．すごく信用してる．．．」

テンションが落ち着いた様子のミヤがそついう。どこか寂しそうな感じの声色は、さつきまでのミヤとはまるで別人のようだ。

「お前も、このパーティーに入っただ．．．いつか、そうなるさ」

そつだよな．．．こいつがなんであれ、俺の使い魔なんだ。俺が一番信用してやらないといけないんだよな．．．。そんな感慨にふけていると、ミヤが俺の腰辺りにタツクルしてくる。

「マスター！！」

そついいながら腰にしがみついてくるミヤ。邪魔だだけ、一瞬でもお前に心を許した俺がバカだった。あの感慨を今すぐ俺に返せ！！

そんなこんなで、ミヤが俺たちの仲間に正式に入ったのだった。

その後、『魔女狩り』の連中が出てくることもなく、他に強いモンスターが出ることもなかった。

だが、『魔女狩り』の連中、完全に俺たちを潰しに来ているようだな。

俺はあの時戦った、ボロキレのようなマントとジェイソンの仮面をかぶった大男のことを

思い出す。また、戦うことになるのだろうな．．．。

シャリーナは口には出さないが、俺の事を気にかけていたようだ。『魔女狩り』のことを

知っているのは、俺とアイツだけだからな・・・。

アイツもエルルには教えていない様子だ、きっと考えは同じなんだろうな・・・。俺も光喜を

巻き込むのがいやで話していないからな。それが、光喜が望まない俺のエゴだとしても。

あゝ、そうだ、マジメな話の途中でこんな追伸をするのもどうかと思うが、その後の話を

すると、影武者を作ること忘れ、もはや陽河家の集まりがあることも忘れていたので、後日

電話でグチグチと説教された・・・。

ちなみに、陽河家が集まる理由とはジジイが町内会のボーリングで優勝したとかいう、

くっだらねえー理由だったようだ・・・。行かなくて良かったぜ・・・。

ベストメンバー？（後書き）

ミヤで時間をかけてもしかたないので、ミヤはあっさりと仲間に入れてしまいました。

そのうち、ミヤの過去に迫っていくことにして、早くストーリーを進めないと。

第X話「総集編？」（前書き）

この話は、後の展開に関係ないので飛ばしても大丈夫です。

第X話「総集編？」

人間、たまには1人になりたいことあるし、感慨にふけたくなることだって

山ほどあるだろう。特に俺のような周囲のトラブルにストレスを感じている奴はなおさらのことだろう。

というわけで、1人でバイクを飛ばして誰にも邪魔されないとこ
ろまで来ている
というわけだ。

夜中の高速道路を飛ばしてかなり遠いところまで来たな。サービ
スエリアで休息
してもいいのだが、リフレッシュするには人の多いところはゴメン
だ。

今は高速を出て、宙にひかれた高速を支える柱にもたれかかって
いる。頭上を
見上げると星空の代わりに、高速道路の裏側であるコンクリートの
天井が広がって
いる。

その高速を支える柱にはペンキで落書きだらけ、周囲にフェンスが
あるが風化して
破れた箇所が多すぎるため機能を果たしていない。

無論、こんなところに街灯などあるわけがなく、煙草に火をつけ
るライターの火が
唯一の光源となっている。

ポケットから電源を切っていた携帯を取り出す。パワーボタンを
しばらく押すと、
バイブの振動とともに液晶がわずかな光を放ちだす。着信が1件あ
るな。

発信相手は光喜のようだ、あいつが風呂に入ってる間に出てきたからな……。

ミヤにもなにも言わずに出てきたから心配したんだろう、だが、一度の電話で

諦めるのが光喜らしい。一応アイツなりに俺に氣を使ったのだろう。

電話をかけなおさずに時計だけを見る。

「……今から帰っても、着くのは朝か」

ならば、急いで帰るのも今さらというものだ。もう少し排気ガス臭いこの街で、

煙草の煙に体を蝕ませてみるのもいいだろう。

丁度静かなところでいろいろ整理したいと思っていたところだしな。

「それにしても、独りになるのも久しぶりだな」

昔の俺だと考えられないことだ。あの日から、しばらくは光喜以外と話しさえしようとしなかったからな。

俺の一番古い記憶、十年前のあの日、俺の母親は何者かに殺された。

だが、その記憶さえもその男の忘却術によって曖昧だ。親父が母親の写真を

処分したせいで、母親の顔さえも覚えていない。覚えているのはズタズタに

なり誰か判別するもできなくなった母親の死体と、俺と同じ黒い長髪に、背中に

植物のツタのような呪印があった男の姿。見方によっては鎖や楔の形が連なって

いるようにも見える。奴はそれと同じものを俺の背中に施して去っていった。

あの日から俺の目的は奴を殺すことだけになったんだよな。

母親を失ってから、仕事狂で単身赴任や海外出勤などを繰り返す父親を除いた、

光喜との二人暮らしが始まった。5歳の時からいきなり二人暮らしだ、ベビーシッターが

居た時期もあったが、俺が追い出した。それでも、親戚のおばさんとかがしょっちゅう

顔を出してくれてた。けど俺は、それさえも鬱陶しいと思ってたんだよな。

光喜がいればそれで十分だと思ってたからな……。

「いつも、俺の邪魔ばかりしてたがな……」

当時は俺と身長はさほど差はなかった。そりゃそうだよな、俺たちは双子の兄弟

なんだから。だが数年のうちに成長速度に変化が現れた。これは光喜の時間を操作

する能力に関係しているのだが、難しい理屈は置いておこう。

今では双子にして俺より30cmも背が低く、その身長を象徴するかのようには精神年齢

も低い。魔法の才能も俺に比べると格段に低い。

人が使える魔法というのは才能で決まり、才能がない分野の魔法を極めることは

できない。さわり程度に使うことならできるかもしれないが……。

俺の魔法の素質が

闇・呪・幻をはじめとして10以上あるのに対し、光喜は時と光だけ。時間操作という

珍しい能力を持つてはいるが、その他の魔法はからつきしダメだな。

一緒に暮らしていたのは光喜だけだが、他にも仲間は一応いた。あいつらが

いなかったら、俺はきつと復讐のためだけの殺人鬼みたいになってただろうな……。

一番付き合いが長いのは、隣の家に住んでいるエルルとシャリーナだな。

2人とも俺の母親と同じ日に両親を亡くしている。原因は爆破テロ、それに

巻き込まれたエルルの話だと、黒い長髪で銀の十字架のネックレスをした男に

助けられたらしい……。多分、俺が追っている男とみて間違いないだろうな。

「加えて、エルルの初恋の人でもあると……」

だから、俺はエルルにそいつのことは一切話していない。これからも話す

つもりもない。

あのエルルの初恋か……。マジメで頭もいいのだが、内気でシヤリーナによく

いじめられている。いじめられているといっても、2人とも親友だし同居してる

くらいだから、からかわれているというほうが正しいかもな。

成績優秀で、樹・炎・水をはじめとする6つの素質を持つてる、エリートって奴だな。

能力は変身能力、特に珍しいというわけではないが、いろんな状況に柔軟に

対処できるエルルらしい能力だ。

「シャリーナもエルルぐらい優秀ならいいんだが」

シャリーナはエルルと正反対な性格だ、大雑把で、大胆で、自己中心的な奴だ。

成績もエルルと逆で、地・雷・炎の3つしか素質がない光喜とともに追試仲間だ。

どうも、あいつの考えていることは分からん。しょっちゅう、俺とエルルだけを置いて

どこかへ行ってしまう。光喜を連れてどこに行っているのかはいまいち不明、聞く気もないし、知りたくもない。

能力は重量の操作、物を軽くしたり重くしたりすることだ。その能力を生かした

文字通りの重い一撃は強力な必殺技になる。

「あいつらとも長い付き合いになるな」

それから数年たって、タケシの奴が仲間に加わったんだな。俺をアニキと慕う

無駄なハイテンションな奴だ。人にまわりつかれるのが嫌いだからな、蹴ったり

殴ったりしてるが、音を上げることがない結構タフな奴だ。年は俺や光喜より1つ下

なのだが、光喜とは気が合うようだ。一方的に光喜のおもちゃにされてる気もするがな。

そして、素質は鋼1つという光喜の追試仲間の一人だ。能力は魔力で機械を

作り出すというレアな能力なんだが、成績には繋がってないようだな。

「このバイクも、あいつに作らせたものだから悪くはいえないがな」

俺は自分の乗っていたバイクを見ながら、自然と顔がにやけた。それからさらに数年たって、ごく最近仲間になったのはメアだなあいつの

成績っていうのは謎なんだよな。そもそも学校に行ってるのか？

家庭の事情も、

詳しいことは何も知らんし……。あいつは、致命的なまでに無口だからな何も

語ろうとしない。ただ、表情だけは豊かで、泣きそうになったり無邪気に

笑ったりとせわしい奴だ。

顔や仕草がかわいいもんだからナンパなどによくあうが、少しでも変なことを

しようとしたら終りだ。あいつが悲鳴を上げた瞬間、周囲は惨劇の舞台へとかす。

能力は声や音を刃に変えること、音が聞こえた瞬間には既に刃が届いていると

いうことだ。回避不可能、音なので防御も不可能、敵味方の判別なし、未恐ろし

い能力だ。

ベタベタと平気でくっついてくるし、バームクーヘンが好物で、スタイルはかなり

いいんだが、精神年齢は光喜と大差ないのかもしれない。

「よくよく考えると、あいつのこと何も知らないんだよな」

だが、それ以上に分からないのが最後の一人だ。夜に魅入られた者という意味

で名づけた魅^{ミヤ}夜だ。使い魔召喚の儀式に失敗して出て来た泥人形に

魂を

込めた俺の使い魔だ。元は幽霊だったかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

自分の名前も分からなかったぐらいだから、過去の経歴なんて何も分からない。

ただ、最近分かったのはあいつは男を手玉にとって楽しむタイプということだ、腹黒

なんじゃないかなと思うときもある。

シャリーナとは仲が悪く、土でできているので水をかけられるとドロドロに溶け出す。

ミヤの過去を調べるときに、悪魔召喚とその犠牲者、そして、一人の行方不明者

の記事を見つけたが関連性は不明のままだ。

今ミヤについて分かっているのはこれぐらいだろう・・・。

「こうして考えると、個性が強い奴しかいねえな」

といっても、俺も十分個性が強いと思うがな。未成年で酒と煙草はあたりまえ。

無免許運転に、チンピラとの喧嘩は絶えない。一部では最強の魔術師と呼ばれ、

呪いと幻術を得意とする。

絶対に勇者にはなれないタイプの人間だ。

なぜかトラブルや謎が尽きなくて困っている。

「そういえば、今日の朝もあの夢を見たな・・・」

尽きない謎の1つで、何度も同じ夢を見る。俺は真っ暗な水面の上に浮いていて、

水中には三つの大きな目を持った巨大なサメ、水面には女性が立つ

ていて『私の

名前を呼んで……』といってくる、無論名前は知らない。

彼女が誰なのか、そして、なぜ何度も同じ夢を見るのか……。

俺の深層心理に

聞いてみたいよ。

他にも謎はある。それは、エルルが拾った猫の首輪につけられたマジックストーン

のことだ。そのマジックストーンにはメッセージが込められてあり、『魔女狩り』という

組織の存在が判明した。

その幹部の名前も言っていたようだが、

『メシアの……と……幹……の……ようじ……ア……ゼ
パル……エル……えん……めじ……』

と、ところどころ抜けているのでさっぱりだ。

その魔女狩りは、一度俺とシャリーナに襲い掛かってきたことがあった。雑魚が

数名と体が岩みたいに硬い大男が一人、結局逃げられちまったな。

その時期だったかな、あのいけすかねえ教師とあったのは……。

木戸きど鏡志きやうじ、俺が嫌いな奴。かなり腕のたつ魔術師らしいが、詳細は知らん。

できればもう会いたくないね……。

俺は煙草の煙を胸いっぱい吸い込むと、一気に吐き出した。

「ふうー、結局、何の整理にもならなかったな……」

俺の中の謎は謎のままらしい……。だが、このまま終わるわけには行かない……。

俺の復讐するべきあの男が、『魔女狩り』である可能性がある。

それに、最近戦った俺の能力を知っていたモンスター。『魔女狩

り』もこちらを狙って

きているし、決着はつけなくてはいけないだろう・・・。

まあ、とりあえず今は帰ることが先決だな・・・。

このままだと、光喜の朝飯の時間に間に合わなくなりそうだからな・
・・。

第X話「総集編？」（後書き）

自分自身のためにも、整理したほうがいいかな？と思って書いた、総集編らしきものです。

第7話「決着」

「それじゃあ、また明日・・・」

玄関で靴を履き終えたエルルがペコリと頭を下げる。隣では、すでに

靴を履き終えたシャリーナがエルルを待っていた。

この2人と光喜とタケシとミヤをあわせた6人で、いつものごとくダンジョンに

行つて二次会として俺の家に來ていたのだ。二次会といっても、汗を流す

ためにシャワーを貸して、後はメシをみんなで食つて終わりというシンプルなものだ。

「氣をつけて帰れよ」

といつても、隣の家に住んでるんだがな・・・。

「うん・・・じゃあ」

エルルはさういうと、静かにドアを閉めて家路へとついた。

さて、あとはアイツか・・・。俺は頭をかきながらリビングへと戻る。

メシの後片付けはエルルが手伝ってくれたので、さほど苦勞はしなかった。

ただし、コイツの片づけをどするかだな・・・。

俺の目の前には、光喜に毒物とも言える料理を食わされたタケシが倒れて

いる。白目むいて口からよだれをたらしながら氣絶しているのは、

何度見ても

ゾンビのようだ。

俺は足でタケシの肩をつついてみる。

反応がない、ただの屍のようだ。まあ、一日ぐらい泊めてやってもいいか……。

コイツの家に電話しといたほうがいいか……。さてよ、コイツの電話番号って

知らねえな、そもそも、コイツの家族構成も自宅の住所も知らねえや。

「聞いても、答えねえだろうな……」

死人にくちなし。光喜も騒ぎ疲れてソファで寝ちまつてるし。ミヤも部屋に

戻っちまった。

まあ、タケシと光喜は放置しておいて、シャワーでも浴びてくるか……。

俺はリビングをあとにし、脱衣所に向かった。早々に服を脱いで浴室に入る。

シャワーを出して冷水から温水に変わるのを待つ。ふと、自分の肩に目をやると

あの黒いツタのような呪印が見える。

この呪印は強い魔法を使えばどんどんと伸びてきて、最後には体中を覆い

理性を崩壊させる力を持つものらしい。

そつと呪印に指を這わせてみる。あのケンタウロスのようなモンスターと戦ったとき、

それに、最初に『魔女狩り』と遭遇したときにあった大男。どちらの戦いでも、幻術や

防御用と転送用の魔方陣、魔力の弾丸のダーク、ダークバスターぐ

らしいが使って

いないが、その技に込めた魔力が大きすぎたため呪印の侵食が進んだようだ。

「はやく決着をつけないとな・・・」

相手がどんな奴らなのかもいまいち分かっていないが、それでもこのまま長く戦うと俺の理性が崩壊するだろう。

「かといって、こっちから仕掛けることはできないしな・・・」

やるせない気持ちが胸の中に溜まっていく。くそっ、俺らしくもねえ。

シャワーを頭から浴びていたので、長い髪が体に纏わりつく。肩の呪印が髪で隠れるとなんとなく不安が取り除かれる気がした。

浴室から出て着替えを済ませると、リビングのほうに向かった。リビングではタケシは気絶したままだが、光喜が復活してスナック菓子をポリポリと食べながらテレビを見ている。

見たいドラマがあつたが、上機嫌でアニメを見ている光喜を見ると、チャンネル争いを繰り広げようという気分にはなれなかった。

「スナック菓子ばっか食つてると太るぞ」

そついいながら、別に見る気もないアニメが流れるテレビを光喜と一緒に眺める。

ダンジョンの帰りに買っておいたビールの缶を開けて、ぐびぐびと飲む。テーブル上は吸殻の山となった灰皿と、飲み終わったビールの缶がへこまされて乱雑に置かれている。

「悠夜も控えてないと、体壊しちゃうよ」

やわらかい笑顔を浮かべながら光喜が言う。テーブルに置いたビールの缶に、炭酸飲料が入ったコップを乾杯するようにぶつけ、ぐびっと飲もうとしたが、炭酸がきつかったのか顔をしかめてコップを置いた。

「悠夜さ・・・何か悩みとかある？」

アニメを見ていた光喜が目線をテレビにやったまま尋ねてくる。悩みなんて山ほどあるぞ。俺の意見を尊重せずに勝手にダンジョンに連れて行くパーティーに、成績のあがらない弟、仲が悪いミヤとシャリーナ、うつつしく騒ぎ立てるタケシ・・・。

「別に・・・」

頭の中では候補を幾つもあげておきながら、その一言で済ませてしまった。今の光喜にはいつものおちゃらけた感じが全くない、多分、そんな慢性的な悩みについて聞いているわけではないだろう。

「お前はあるのか？」

そっけなく返しながらビールを飲む、テレビ画面を見てはいるが内容は頭に入っていない。ただ、ぼーっと見ているだけだ。

「あるよ・・・」

いつものハイテンションな物言いじゃなく、物静かで落ち着いた口調で言う。
たまにこういう大人びた口調になるときがある、真剣になると自然とこうなることが多いようだ。

「悠夜が、素直じゃないことかな？」

俺を責めるわけでもなく、追求する様子もなく、ただ、やわらかい笑みを俺に向けた。

その後は、再びお菓子を食べながらアニメに夢中になっている。
なるほど、伊達に15年間も双子をやってるわけじゃないな・・・。

俺の1番の理解者で、1番身近な存在・・・。だからこそ、このことだけは話せない。
コイツを巻き込んでもいいことなさそうだしな・・・。

「光喜——」

俺が光喜に話しかけようとしたとき、ポケットからメロディーが流れる。メロディーの
源である携帯を開くと、メールありのメッセージが映し出されてい

る。差出人は・・・
メアか。

なんか嫌な予感を漂わせながらも、俺はメッセージを早速読むことにした。

『ココに来て』

たった一文の文字と地図のようなものが添付されている。地図から見て近場の
廃病院のようだ。

俺は『今すぐにか?』と一文だけの素っ気無いメールを返す。すると、1分もしないうちに返信が入った。

『すぐ』

二文字で返信してきやがったよ……。最近の女子というものは絵文字たっぷりの
メールが主体じゃないのか。

「少し出かけてくる」

俺は光喜にそう告げると壁にかけてあるコートを羽織る。光喜はアニメ鑑賞中のため
同行する気はないようだ。

「悠夜」

俺がリビングから出ようとした瞬間に呼び止められる。丁度、煙草を吸おうと思って

箱から一本取り出した状態で静止している。

「無茶しちゃダメだよ」

光喜はまるで子供に言い聞かせるかのような言い方で言う。別に無茶はしねえよ、メアと合うだけなんだからな。いや、それ自体が無茶な行動と考えることもできなくはないか……。

「ああ」

生返事を返すと、煙草を啜って家から出る。外に出ると雲ひとつない星空が

広がっていた、煙草に火をつけている間だけ、冷たかった周囲の空気に一瞬の

暖かさが生まれる。

火とともに儚く消えた一瞬の暖かさの余韻に浸りながら歩き出すと、そのわずかな

余韻すらも奪うように冷たい風が吹いた。普段はこのうえなく好きだった夜の空気が、

なぜか今日だけは俺から全てを奪っていくようで不快なものだった。バイクで飛ばすこと10分程度。俺はメアに指定された廃病院にやってきた。

夜の病院に、若い女と2人きりなんて夢のようなシチュエーションだが、相手がメアなら

意味合いが違って来るんだよな。

俺が中に入ると、モコモコとした赤い上着にミニスカートというカツコのメアがいた。

上半身は温かいが、足は死ぬほど寒いだろうに……。

「よう、なんかようか・・・」

愛の告白とかじゃないよな。もしも、そうならば、廃病院なんて不気味な場所を選ばそのセンスを疑うね。コイツのセンスが人とは違うのは知っているがな。

「・・・・・・・・コレ」

そういつてメアが差し出したのは猫の首輪のようだった。いつぞやの、魔石がついていた首輪だな。それで、これがどうかしたのか？

俺が尋ねると、メアは首輪の裏に指を沿わせて切れ目を見つける。その中から小さな紙切れを一枚取り出すと、俺に差し出した。

「・・・・・・・・タマの」

それは何かの地図のようで、考えようによってはタマの家の地図なのかもしれないな。いや待てよ・・・。

「あの猫、ミケじゃなかったのか？」

俺がお前の猫かと尋ねたとき、質問を無視してミケって答えたよ。うな気がするんですが？俺の怪訝な目線を受けているメアは、人差し指を右頬に添えながら少しだけ考える。

「……タマ・ミケ・ライダー」

ミケはミドルネームですか……。というか、その名前今考えただろう。そういえば、その後こいつ野良猫だっていったよな……。

「飼い主がいるのか？」

俺が尋ねると、自分の持っていた首輪を俺に差し出す。

「いや、まあ、首輪があるなら……。飼い主がいるんだろうけど……」

なら、なぜこの前野良猫と答えたのか教えてくれ。まあいいさ、とりあえず、この地図がどうかしたのか？

「……あげる」

徳川埋蔵金も記されていない地図なんていらん。と、普段なら断るところだろうが、

この首輪についていた魔石に『魔女狩り』のことが記されてたんだよな。ここにいけば、もっと多くの情報を得ることができるかもしれない。

「じゃあ、ありがたくもらうぜ」

俺はメアからその地図を受け取ると、メアの顔を見る。俺の目線に気が付いて

俺を上目遣いで見つめ返してくる。無邪気そうな顔してなに考えて

いるのかわかんねえ。

「なあ、『魔女狩り』って知ってるか？」

考えれば、魔石を持った猫が目指したのはメアのところだった。

『魔女狩り』の使い魔

だと思われるケンタウロスがいたダンジョンを教えてくれたのもメア。そして、『魔女狩り』

と接点がありそうな地図を俺に託しているのもメア……。こいつは何か知っているんじゃないのだろうか？

俺の質問に首を傾げるメア、その後、ポケットをぐそぐそをあさり中であつたものを俺に差し出した。

「……あげる」

一口カットぐらいで包装されたバームクーヘンがそこにはあつた。

「いらん、話をそらすな」

しかも、ぜんぜんそらせてないぞ。その後、再び首をかしげ、またポケットをぐそぐそあさっている。

またバームクーヘンか？ それとも、アメか？ チョコレートか？

第7話「決着」(後書き)

旅行などをしていて、気が付いたら1週間ほど放置状態だった・
・。そろそろ、頑張って書き上げていかないとな・。・。

掴んだ尻尾？

どんなおとぼけな物を出すのかと思っていたが、メアは意外と普通なもの

を取り出した。それは、小さなカードで、最初学生証明書かと思っただが・・・。

「・・・・・・特殊教員免許？」

突拍子もないものを出してきやがった、特集教員免許っていうのは、

この世界に普通にあるものじゃない。まあ、普通じゃないから特殊なんだろうが。

まあ、その免許証にはメアではない誰かナイスガイな野郎が映ってる。

こいつはいったい何がしたいんだ・・・。

「・・・・・・自警団」

メアは一言そういうと免許書を直す。そういえば、魔法学校が運営している

ギルドの1つに自警団なんてものがあつたな・・・。

「つまり、なんだ。お前の身内の誰かが——」
「お父さん」

俺の言葉を待たずにメアが言う。あんなふけたお兄さんはないとは思ったが

あのゴリラ男はお前の親父さんなのか……。はじめて見たが、あ

んな男とどんな
絶世の美女を足し合わせたら、こんなかわいい娘が生まれてくるんだろっね。

「お前の親父さんが自警団のメンバーで、『魔女狩り』についても自警団を通して知っていると受け取っていいわけだな」

メアはコクコクと何度も頷く動作を繰り返す。初耳だぞそんなこと。というか、
光喜・シャリーナに匹敵・・・いや、下手したら2人を上回るトラブルメーカーの
お前の身内が民衆の安全を守っているとでも言うのか？

「・・・・・・・・いい子？」

ハイハイ、いい子いい子。別にお前が偉いわけじゃないけど・・・。

はあ、なんだか眩暈がしてきたよ・・・。

「じゃあ、この地図の場所には自警団が調べに入っているって事か？」

俺の質問に、今度は首を振って否定する動作で答える。そりゃまたなんで？

自警団としては、部外者である俺に情報を漏らすなんて調べつくしたから
じゃないのか？

「・・・・・・・・手を引く」

なるほど、自警団には手におえなくなったので見て見ぬふりをはじめたと……。

それで、自警団があてにならなくなったので、メアの独断で俺に地図を渡すことにしたというわけだな。

メアはコクリと一度だけ首を縦に振る。1単語しか発声しないメアと、ここまで意思疎通できる自分が怖いぜ。

「それで……明日調べに行くが、お前は付いてくるのか？」

俺としては誰も巻き込みたくはないんだが、地図を持ってきた本人に聞かないのも変な話だからな……。

メアは少しうつむいて残念そうに首を振った。

「………用事」

そうか、人を危険地帯に追いやるっていつのに、それさえ無視しなくてはいけない用事か……。どんな用事が気になったが、追求した結果、付いてくるといわれても困る。できるだけ、この件に関しては俺一人で解決したいからな。

「まあ、ありがたく地図はもらったくよ」

そういつて、メアに背中を向けてその場を後にしようとしたとき、後ろからメアが俺の袖をギュッと引っ張ってくる。その瞳は不安げに揺れていて、

何か言いたそうに

口をもごもごさせていた。

やがて決心したように、深呼吸をすると。

「死なないで」

その濡れた瞳は俺をじっと捕らえていた。月明かりに照らされた彼女は、素直に

キレイだと思った。

いや、かわいいし、キレイなんだが・・・コイツ、俺が死ぬ気でいるとも思っていないのか？

言っておくが、俺の目標は呪印の男への復讐であって『魔女狩り』討伐

ではない。そんな刺し違えてまで倒そうなんておもってないよ・・・。

そんな俺の思いとは別に、真剣で泣き出しそうなメアを見ていると、自然と笑みが

浮かんできた。

「安心しろ、女の子を待たしたまま死ぬほど野暮じゃねえよ」

そっぴいながら頭をなでてやると、メアは納得したのかしてないのか分からない

様子で俺の袖を解放した。

「・・・待ってる」

「ああ、この地図のお礼もそのときでいいな」

俺がそういうと、メアは不安げな表情のまま首をかしげた。そして、3秒ほど時間を置き。

「・・・バームクーヘン」

と、一言だけ呟いた。コイツは本当に人のことを心配しているのかという発言だが、そんなこと、この目を見ていると言いつけなかつた。

「了解・・・」

俺はメアの頭を撫でてから、バイクを止めてあるところまでとぼとぼと歩いていった。

空に少しだけかけた月が昇っていて、その色は鮮やかな赤だった。鮮血の赤い月、特に深い

意味はないただ、そんな言葉が頭の中に浮かんできた。

明日は多分、満月だろうな・・・。

そして、翌日の夕方。

俺は早めに夕飯を済ませて、キッチンで食後の後片付けをしていた。隣には、いつものごとく

エルルが手伝ってくれている。ここんところ、毎日のようにエルルとシャリーナが俺の家に来ている。

ついでに言うと、シャリーナは光喜とテレビを見ながら爆笑中。メアはテーブルを拭いているところだ。

「あ、あのね、今晚なんだけど・・・」

エルルが洗い終わった皿を拭きながら話しかけてくる。どこか、

もじもじとしていいにくそうな感じだ。

「悪いな、今晚は出かけなきゃいけねえんだ」

用件も聞かずに、俺はキツパリと断った。別に今日じゃないといけない理由なんて存在しないのだが、向こうが俺だけじゃなく、コイツや光喜たちを狙っているならさつさと片付けたほうが利口だろう。

「どこに行くの？」

残念そうという雰囲気ではなく、興味本位といった感じで俺の事を見てくる。多分たいした用件じゃなかったんだろうな。

「ちょっとな・・・」

俺はその場を軽く流して洗い物に専念する。少々、周りの空気が重くなった気もするがそんなことは無視だ。奴らは、何故か知らんが俺の事を生け捕りにしようとしたならば、俺は最低でも殺される心配はない、だが、こいつらは違う・・・。

この世界の人間は、ファンタジー的な頭してやがるから、死＝最期の時という概念が全くない。死んでもファンタジー的、もしくは、神秘的な力で復活できる。そんな奴が、本当の魂の死と直面する戦いがまともにできるとは思わない。

そう、俺はコイツらを連れて行くわけには行かないんだ・・・。

暴走？

日も完全に暮れたが、エルルとシャリーナはまだ俺の家でくつろいでいた。俺は会話の頃合いを見計らって

立ち上がると、出かけことを告げる。壁にかかったコートを手に取ると、キッチンにいき内ポケットに

酒の小瓶を3つほど忍ばせておく。煙草の数も減っていたが、煙草を吸う暇があるかどうか分からんし、

別に新品を持っていく必要もないだろう。

その後、一度自分の部屋に戻り、小さな紙の束を取る。そこにはさまざまな魔方陣が書かれており、簡易式の呪術の儀式に使うためのものだ。

「じゃあ、少し行ってくる」

俺はそういうと外へと出た、コートのポケットをあさってバイクの鍵を取り出すと鍵穴に差し込む。

昨日とは違い空にはまばらに雲があり、大きな満月が現れたり隠れたりしている。ふと、バイクから

今までになかった微弱な魔力を感じる。

その魔力をたどると、バイクのマフラーの裏に発信機のようなものを発見する。

「タケシの能力だな……。光喜が頼んだのか」

俺は呪術用の魔方陣が書かれていた紙の束から1つ取る。それを地面に落とすと、土が盛り上がり、

紙の周りを覆っていくとやがて小さな狼のような形になっていく。

その使い魔に発信機をつけると、俺が行く方向とは反対の方向に

走らせた。

兄を見くびるなよ、この程度の追跡なら一瞬でまいてやるさ。

俺はバイクにまたがると、エンジンをかけてメアの地図に書かれた場所へと向かった。

その場所は町外れの廃工場でも、市街地に立つヤクザ組みの建物のようなものでもなかった。

「おいおい、こんな学校に手がかりがあるのか？」

そう、そこは普通の学校だった。魔法学校とは別の知識だけを教えてくれる学校だ。周囲には家屋が立ち並び、校舎には明かり1つついていない。半信半疑ながらもバイクを押しながら校門をくぐった。

その瞬間、空気が変わった。背筋に悪寒が走り、気圧が変わったかのように鼓膜が圧迫され、息苦しささえ感じるほどだ。

外からは分からなかったが、中に入っようやく分かった。この学校はドーム状の結界の中にある。

結界の効果は魔力探知を防ぐものと、中の出来事を外から観測できなくするものだろう。俺はゆっくりと校門に

戻って手をかざしてみる。すると、まるでガラスがそこに張られているかのように一定の場所から出られなかった。

「侵入者を逃がさないというわけか」

結界の強さはトリプルAってところだ、解除できないこともないが、時間がかかりすぎる。そんなことさせてくれそうにもなさそうだ。

俺が後ろを振り返ると、様々な服装をした連中がそろそろと集ま

ってきた。町ですれ違っても、一般人として

受理してしまいそうな容姿なのだが、思い思いに持っている武器はまがましい。

真っ赤な血のような赤色をした大鎌や、銃身が1メートルほどありそうなマシンガン、大きく反り返った剣、どれもこれも嫌な感じの魔力を漂わせている。

メアにはあんなこと言っちゃったが、俺は命がけで戦わないと帰れそうにないな。50・・・いや、それ以上の人数が

ぞろぞろと出てくる。『魔女狩り』という組織を舐めすぎていた、優秀な魔法使いが2・3人ぐらいと、10数名のメンバーだと思っていたが、これほど多いとは。

「殺すなよ・・・」

一人がそういうと、割と俺に近かった数名が刃を振りかざして襲い掛かってきた。俺はコートの中から酒の瓶を取り出し

瓶の口を割ると酒を宙にばら撒き、ライターで火をつける。すると炎が上がり自然と視線はその炎へといく。

そこで、俺は幻術をかける。とりあえず、こう広い場所だと狙われたい放題だからな、校舎の中に逃げ込もう。

そう思つて、校舎の方にダッシュしたとき、後方でみていた敵の何人かが魔力を放出する。すると、全ての敵にかけていた幻術が一瞬で解けてしまった。

コイツら強いな・・・。

「うおおおおお!!」

近くにいた大男が鎖に棘付きの鉄球が付いたものを振り回す。その鉄球が俺の真横に迫ってきた。棘の付いていない

部分を狙って飛び上がりながら蹴り落とす。鉄球は地面沈み、男の

動きが止まったときに、アゴ下にきつい蹴りを一撃入れる。

一人は完全に倒したと思った瞬間、左右から弾丸や矢が惜しげもなく飛んでくる。俺は精神を集中し、何もない虚空を見つける。

「転送用魔方陣展開！！」

俺の足元に緑色に光る魔方陣が出現すると、俺はほんの数メートル先に宙ワープする。弾丸や矢は互いに相殺したり、お互いの仲間に当たったりしている。

宙で身動きのとれない俺に、槍をもった女が襲い掛かってきた。俺は女とは別の方向にいる敵に狙いをつけ、魔力の弾丸を放つ。俺の体は反動で宙を平行移動し、弾丸は命中、敵の攻撃は回避に成功した。その後、腹部に回し蹴りを入れて女を払いのける。今度は後ろから3人、左右からも2人ずつ、前からは4人。

「この数はどうにもならんか・・・」

コートから一切れの紙を出し、地面に叩きつける。その紙に書かれていた魔方陣が光りだすと、俺の周囲は白いモヤに包まれる。俺の周囲にいた敵がそのモヤに触れた瞬間、この世のものとは思えない断末魔を上げて倒れだす。

腕は腐り落ち、皮膚は溶け、頬肉が溶けて口内に続く穴が開き、見るも無惨なほどにドロドロになっていく。

ひどい匂いが周囲に立ち込め、周りの敵は俺を恐れるかのように一歩後退した。

「ぐっ！！・・・どうした、かかって来いよ！！」

強がって見せるが、背中から腕、足にかけて焼けるような熱さが駆け抜ける。呪印が少しずつ俺の体を侵食している。

周囲に立ち込めていたモヤもすでに消えていて、連発していると俺の理性が崩壊する。崩壊したあとは具体的にどうなるかは分からないが、悲惨な結果だけは目に見えている。理性がない生物なんて、暴れまわる猛獣よりもたちが悪いからな。

すると、今度は銃弾などではなく魔力の弾丸や炎の塊のようなものが次々と飛んでくる。

転送用魔方陣は魔力の消費が高いため連発するのは危険だ、ここは自分の足で逃げたほうがいいだろう。

飛んでくる攻撃を左右にかわしながら進むが、急に足が動かなくなる。足に目をやると、地面から伸びている手が俺の足首を掴んでいた。数メートル先には地面に腕を突き刺した男がニヤニヤと笑っている。

「くそ！！　ダークエクスプロージョン！！」

俺は腕に大量の魔力を集中させると、それを向かってくる攻撃に放つ。すると、それは宙で黒い巨大な球体となり、

すべての攻撃を中に吸収して闇はドンドンと大きくなっていく。その後、それは攻撃を放った連中のもとへ飛んでいき大爆発を起こした。

その後、小さな魔力の弾丸を俺の足を掴んでいる男の頭にぶつけてやる。男の頭は吹き飛び、体だけが力なく地面に倒れる。

「悪いが、なりふり構ってられないんでな」

ダークエクスプロージョンを使った反動で呪印が体を焼き尽くすような痛みを発し、俺の体を侵食しているのに耐えながら、

コートのポケットからもう一枚紙を取り出し地面に叩きつける。

それは、黒い光の球体となり空へと上っていく。すると、先ほどのドロドロになった死体や、ダークエクスプロージョンなどで殺した

奴らの死体から白い靈魂が立ち上る。靈魂は頭が割れそうになるほどの悲鳴を上げながら黒い球体へと吸い込まれていく。

普段あんなものは使いたくもないが、こいつらはこうでもしないと対処できないからな。アレは、悪魔に生贄を捧げるときに使う呪術だ。

アレに吸い込まれると、魂は輪廻の輪からはずされ完全に消滅する。そして、魂を捧げれば捧げるほど俺の力は上がっていく。

「ぐああああ!!」

呪印が侵食する痛みが今までにない勢いで襲い掛かる。コートの袖をめくってみるともう肘を過ぎたところまで呪印が侵食していた。まずいな、少し飛ばしすぎたか……。

少しはセーブして戦おうとした瞬間に、5人ほどが一気に襲い掛かってくる。体中の体毛が針のように逆立った男や、電流を纏った男、他にも禍々しい腕の男など、ただの魔法使いではない能力者が一気にだ。

「消えうせる!!」

ダークバスターを二つ同時に放つ、呪印の侵食を抑えるために威力はセーブしている。二人は跳ね除けたが、それでも3人が襲い掛かる。1人の攻撃を回避、すかさず次の攻撃も回避、3人目は体中に電流を纏った男で、

物理攻撃が不可能と判断してダークで吹き飛ばす。

ちまちま攻防をしていると、体の自由が利かなくなってくる。よく見ると、3人の呪術師に囲まれており、足元には魔方阵が浮かび上がっていた。

「3人がかりで、金縛りか……」

1人なら簡単にあしらうことができるが、3人となると正直キツイ。俺が手こずっている間に敵は次々と襲い掛かってくる。くそっ！！ セーブなんてできやしねえじゃねえか！！

「うおおおおおおお！！」

俺は雄たけびと共に全身の魔力を全解放する。ここまで魔力を使うのは何年ぶりだろうか。俺にかけられていた金縛りはとけ、身体能力も上昇していく。俺は近くにいた敵に蹴りをいれる。骨がミシミシときしみ、口からは大量の血反吐を流しながら数メートル吹き飛んでいく。

2人、3人と次々に体術であしらっていった。

敵の包囲網の一点を突き破ると、校舎の中へと入っていく。相手が大人数以上、入り組んだ場所で戦ったほうが有利だからな。入り口にすぐさま防御用魔方陣で結界を張り、どこか身を潜める場所を探す。適当な教室に入ると、紙を一枚とりだし魔力を注ぐ。俺は学校に張られている結界の内側にもう一枚の結界を張った。これで逃げられないのは向こうも同じ、敵を分散させて相手を少しずつ始末していけばいい。

俺が移動しようとしたとき、教室の窓の外にタカの頭にライオンの体とツバサを持ったモンスターが現れる。

「グリフォンか！？」

俺は窓ガラスを割って入ってきたグリフォンをダークバスターで排除する。だが、間髪をいれずに飛行魔術を使って飛んでいた魔法使い数人がマシガンを乱発してくる。俺は教室から逃げ出し、また新たに隠れる場所を探すために走っていく。

どうやら、入り口に張っていた結界も解かれて敵がなだれ込んで

きたようだ。俺は理科室のような場所に逃げ込み、壁にもたれながら呼吸を整えていた。すると、ふと壁越しの背後から気配がする。壁から転げまわるように離れたとき、壁を大剣が引き裂いた。

「見つかったのか!？」

見つかるのがどう考えても早すぎる。どうやら向こうには、相手の位置を正確に把握できる能力者がいるらしい。

ドアが爆破され、敵が流れ込んできたとき。床に配置されていた紙が光りだす。光は赤い魔方陣となり、そこからはどす黒い腕がいくつも伸びてきて、その鋭い爪で魔方陣の中に立つたものを切り刻んでいく。

「トラップ用魔方陣展開ってな!!」

魔方陣にびびって進行が止まった瞬間、群れの中に赤い鉱石を投げつける。この鉱石は『バーニングストーン』と呼ばれる

攻撃用のアイテムだ。それは爆発し、真っ赤な炎は相手を焼き尽くしていった。

その間にも、廊下側の窓を破ってその場から逃げる。後ろから追っ手が来ないか見ながら走っていく。どうやら、炎の壁が邪魔をしてなかなか追ってこれないようだ。

俺が安心して前方に視線を戻したその瞬間、腹部で爆弾が爆発したような衝撃を受けた。目の前にはジェイソンの仮面をつけ、灰色の薄汚いフード付きのマントを着たあの男がいた。そいつの腕は俺の腹に沈んでいた。

血反吐を吐きながらコンクリートの地面に容赦なしに叩きつけられる。奴は追い討ちをかける様子もなく、突っ立っている。

俺が腹部を押さえながら立ち上がろうとしたとき、ゆっくりと俺に

近づいてきた。

「この野郎!!」

俺はダークバスターを放つが、突如出現した岩の壁に防御される。だが、その技はこの前見たんだよ!!

その岩壁に飛び乗ると、そこから大男にダークエクスプロージョンをぶつけてやる。爆発による煙が一带を覆い、確実にしとめたと思った。その瞬間、煙の中から太い腕がグイッと伸びてきて俺の胸倉を掴む。そのまま引つ張られると、ひび割れたジェイソンの仮面が眼前まで迫る。

「お前、人間か!？」

俺の言葉に何の反応も示さないまま、俺は壁に叩きつけられる。瞬間に全身を魔力で覆い防御をする。壁はぶち破られ何かの実習室のような場所に投げ込まれる。防御しなけりゃ、もう指一本動かせなかった、いや、下手すりゃ死んでただろう。

男は俺を通った穴をゆつくりとくぐってくる。その後ろからは、別の足音がいくつも聞こえてきた。

「やばい、意識がドンドン薄れてく……」

俺は自分の手首まで伸びて来ていた呪印を見た。まさか、負けるなんて思ってもみなかったな。

このまま、俺はどうなるのかな? 生け捕りつてことは、なんかの生贄にでもしたいのだろうか……。それとも、呪術の知識が欲しいとか? いや、そんなのはどうだっていい。奴らの思い通りになるぐらいなら、その前に自殺だろうが何だろうがしてやれば言いだけだ。

光喜は、エルルは、シャリーナは、タケシは、メアはどうなる！
？　ここで俺が負けたら、俺を待ってる奴を失うんだ。

「……フツ、メアとの約束は無理かな？」

逃げ出せないなら戦うしかない、負けることが許されないなら勝つしかない。たとえ、全てを失ってでも。

「ぐおおおおお！！」

倒れたまま雄たけびを上げると、魔力を高めていく。手の平の血管が浮きあがり、体中が熱い。呪印の侵食に伴う痛みが右頬や、足首にまで走る。どうやら、ほぼ完全に呪印が体に回ってきたようだ。

俺を取り押さえようとしてきた1人の頭をわしづかみにする。破壊衝動に任せるまま、壁にたたきつけると、

グシャという嫌な音と手の平に残るヌメリとした感触、壁を見ると頭が完全につぶれた死体がもたれかかっている。

こんな姿、あいつらには見せられないな。

「来いよ、全員殺してやるよ！！」

鏡が合ったわけではない、ただ今の自分がどんな目をしているのか分かっていった。蛇とも獣とも言いつかない、殺戮を望む目。

頬に付いた返り血さえぬぐわずに目に付く奴らの四肢を引きちぎっていく。俺を恐れて何人かが俺に銃を乱射する。

全てがスローモーションに見える。銃弾の雨をかくぐり、引き金を握っていた腕を銃ごと握りつぶす。耳を劈くようなうるさい声が聞こえる。うるさい、黙れよ。

本能のまま喉元に掴みかかると、そのまま握りつぶす。頭は地面

に転げ落ち、体は血を噴出しながら倒れていく。

だんだん、自分が何をしているのかも分からなくなってきた。目の前に移る人間が次々と肉塊に変わっていく。最後に残ったのはあのジェイソンの仮面をつけた大男だけ。

「…………殺してやる!!」

決着？

俺は本能のままに男に飛び掛る。男の腕の一振りでは俺は簡単に振り張られたが、すぐに体制を整えて振りかざしたままの腕に掴みかかる。本気で掴みかかっているのだが、他の連中のように引きちぎることはできそうになかった。

「俺を相手にしたことを、後悔させてやる！！」

力だけでは無理だと悟った俺は、魔力を腕に集中させゼロ距離で掴みかかったままダークを打つ。

男の腕は鈍い音を立てながら砕けた。廊下に落ちた破片がコツコツと音を立てる。それは血肉ではなく、石だった。

俺が男の顔面に蹴りを入れると、ジェイソンの仮面はバラバラと砕け落ちる。その下にある顔もまた石でできていた。

「なるほど、ゴーレムか・・・」

通りで硬いと思った。こいつ自身も魔法を使っているのを見るとかなりハイレベルなゴーレムだな。

俺が観察していると、ゴーレムはもう一本の腕で俺を殴りかかってくる。その拳は俺の額に命中したが、俺は一步も下がることがなかった。

ヌメリとした感触が、額から頬にかけてゆっくりと流れてくる。下を出して舐め取ると、口の中一杯に

鉄の味が広がる。自分の血に舌鼓を打ちながら、俺はその固い体に

殴りかかった。

ゴーレムは倒れ、俺はその上にまたがり殴り続ける。

「ふふ・・・ふははははははは！！」

なぐるたびにゴーレムの体は少しずつ碎ける。腕から血が流れようと、爪が割れて剥がれ落ちようと、

指の骨が折れてひしゃげようと、俺はただただ壊し続けていた。

いつまでそうしていたかは分からない。肩で息をしながら自分の手元を見ると、自らの血と細かくなつた

破片だけが残っていた。

両手はボロボロなはずなのに、痛みが分からない。

疲れているはずなのに、休息が必要な気がしない

全ての敵を殺したはずなのに、戦いが終わった実感が無い。

足りない・・・足りない・・・何が？ 敵？ 実感？ 魔力？

どれも違う気がする。

そう、足りないのはきつと・・・俺の心。

「これじゃ・・・戻れないな・・・」

俺はひしゃげた指に血を塗りとくると、立ち上がって開けた場所を探す。教室の中に入ると、そこは

まさしく戦場となつた場所だつた。

窓ガラスが割れカーテンが夜風になびき、机や椅子などは当たりに転がり、壁には血しぶきが飛び散っている。

机や椅子を適当に蹴りのけると、指に付いた血で床に魔方陣を書き始める。

くそが、腕が震えてうまく書けない。俺が手間取っている間に、誰かが俺の結界を抜けてきた。いや、通過したと

言つたほうがいいかもしれない。俺の張つた結界なんて、呪印の侵

食と共に弱まっていたからな。

境界を越えられたことはさほど問題ではなかった、問題なのはそれを通過した人物の魔力の波長……。

「光喜か……」

つけられたはずはない、発信機もなかった、メアに聞いたのか？
多分違うな……。

「なんで、分かるんだろうな……」

お前に会いたって気持ちか……。

魔方陣を書き終えて、その真ん中に立つ。月明かりが教室を照らす静かな夜だった。

やがて、廊下に木霊する足音が聞こえてくる足音の数からして、
1人のようだ。急に扉が開け放たれると、

そこには、光喜が息を切らしながら立っていた。

「よう、光喜……」

俺はいつもと変わらぬ口調でそう言った。コートから煙草の箱を取り出し、ライターで火をつけようとする。

だが、手に力が入らずライターはその場に落としてしまった。

「最後の一本、吸いそびれたな……」

窓の外に煙草を捨て、光喜を見る。光喜の目は、何かおぞましいものでも見るような目だった。呪印に侵食された俺が
どれほど浮き世離れした存在なのか、鏡を見なくなっただけで分かる。そ

の上、この学校には死体の山。
返り血だらけで立っている俺は、悪魔か何かに見えるだろう。

「悠・・・夜・・・」

言葉を詰まらせる光喜をよそに、魔方陣に溜めていた魔力がどうやら完全にたまったようだ。魔方陣は鮮血のような赤い光を放ち、その光は俺に纏わりついてくる。それと同時に、俺の呪印の侵食は進んでいった。

これが、俺の使う最後の魔法。魔方陣の上にいる者の魂を消滅させる、呪術。

「最後にお前の顔が見られてよかった・・・」

俺はそつと目を閉じ、自らの最後の時を待った。
急に体に衝撃が走る。目を開けると、光喜を魔方陣の外に突き飛ばし、体にぎゅっとしがみついていた。

「何やってやがる、離れるバカ!!」

呪印はドンドンと侵食を進め、俺の体に疼きが走る。目の前にいる大切なものを引き裂きたくなってくる。

「ふへへ・・・悠夜、一人でカッコつけすぎ」

光喜は目頭に涙を溜めながら、俺に笑いかけてくる。俺の侵食は止まることがなく、ついに呪印が全身を覆った。

「だから、今度は俺がカッコつけるんだから」

笑いながら言うコイツが何を言っているのか分からなかった。理解する余裕も、突き放す余裕も俺には残されてなかった。ただ、コイツを壊したいという欲望を抑えるだけ。

「俺ね、悠夜がうらやましかった・・・」

コイツ何を言ってるんだ・・・。だんだんと意識が保てなくなってきた・・・。

「頭もいいし、強いし、何でもできちゃう。口は悪いけど優しいし、大人っぽくて・・・」

何言つてやがる、早く離れろ・・・。

「俺の自慢のお兄さんだったよ」

その一言を聞いた瞬間。体に駆け抜けていた衝動が和らいでいくのを感じた。頭の中がパニックになっていた俺の頭も衝動が和らぐに連れて冷静に働くようになる。

そして、俺がその事実気付いた頃には、かなり呪印の侵食が無かったことにされていた。

「光喜お前、やめろ!!」

光喜の時間操作は未熟なため、過度に使用すると自分の時間を遅くしてしまう。つまり、成長速度が遅くなっていくのだ。

コイツの背が伸びないのも、そもそも、この能力の副作用なのだ。

光喜は今、俺の時間を元に戻そうとしている。呪印が進行する前の時間まで。

それは、光喜にとって明らかな無理だった。

「悠夜・・・バゝカ・・・」

その一言を最後に、俺の呪印は完全に沈黙した。そして、光喜は俺の体に力なくもたれてくる。

「おい・・・冗談だろ・・・」

頬を何度か叩いてみたり、体を揺さぶりながら何度も何度も名前を呼んでみる。だが、光喜を目を開けることは無かった・・・。

決着？（後書き）

ついに、第一章完結つてところです。

自分で書いててやっとかよ、見たいな感じです。
次回からは、また別の物語が始まります。

絆？（前書き）

第2章の『異世界編』突入です。

ちなみに、今までの第1章はプロローグみたいな章なので、名前はないです。

絆？

「・・・それで、光喜君がみんなで探しに行こうっていった」

エルルが隣で話しているが、内容はほとんど頭に入らなかった。カーテンの隙間から朝日が差し込んでおり、ベットには光喜が眠っているかのように横たわっている。

これが夢だったらよかったのにと、何度思っただろう、早く覚めろと何度自分に言い聞かせただろう。

現実を受け入れるのが怖かった、だが、俺の前には無情にも現実が突きつけらる。

「すまない・・・少し出てくるよ・・・」

俺は目の前の現実には耐えられなくなり、エルルを部屋に残してフラフラと出て行った。家から出るまでにシャリーナとタケシと会ったが、言葉を交わすこともなく素通りしてきた。

バイクも使わず、ふらつく足で近くの公園まで歩く。朝日を浴びながら気持ちよさそうに走る中年男性、

通学の途中と思われる二人組みの女子高生、犬と一緒に散歩している青年、無邪気にはしゃぐ子供、

キラキラと光るように水しぶきを上げる噴水、輝く太陽、舞い散る桜の花びら、小鳥のさえずり、

その全てが鬱陶しかった。

いっそ昨夜のように狂いながら、めっちゃくちゃにやりたかった。俺が奥歯を噛み締めた瞬間光喜の顔が頭をよぎる。

「くそ・・・」

俺は目の前の何気ない日常から逃げるかのように、公園脇にある林へと入っていった。

今の季節は桜が咲き誇り、上を見上げれば空の青と、桜の薄紅色が鮮やかに彩っていた。だが、俺は上を見上げることなどなくうつむいたまま歩いていく。

まだ早朝ということもあり、花見などに来ている物好きはいないようで、それ以外の理由でこんな林に入ってくる奴なんていない。

ひらひらと目の前を桜の花びらがよぎる。眠っていないせいがかすみ、その花びらがぼやけて別のものに見えてくる。それは、あるとき体中に付いていた血のようだった。

そう、まるで血の雨が降っているように・・・。
肩に滴り落ちた血を払うと、ひときわ大きな桜の木の前に立つ。
煙草を吸おうと、コートをポケットを探る。

『悠夜も控えてないと、体壊しちゃうよ』

頭に光喜の一言がよぎる。くそ・・・気晴らしの一服も吸えないじゃねえかよ・・・。

『悠夜が、素直じゃないことかな?』

悪かったな・・・生まれつきの性格だよ・・・。

『俺ね、悠夜がうらやましかった・・・』

皮肉だよな・・・俺はお前がうらやましかった。

お前みたいに素直になれたら

お前みたいに他人の痛みが分かるようになれたら

お前みたいに愛想よく出来たら

お前みたいに人生を楽しめたら

そんなことを毎日のように思ってたんだぜ・・・。

目頭に熱いものを感じながら、行き場のなくなった悔しさを紛らわすために桜の木の幹を殴る。

殴った場所は、ベキという音を立てながらえぐれた。

壊すことはこんなに簡単なのに・・・。

「何で俺は壊すことしかできないんだよ・・・」

世界一の魔術師だ？ 大事な奴が大変なことになってるのに何一つできねえじゃねえか・・・。

「ちくしょう！」

俺は桜の木を殴りつける

「ちくしょう！ちくしょう！」

何度も何度も殴りつけ、手からは血がにじみ出ていた

「なんで、俺じゃなかったんだよ。なんで、光喜なんだよ。なんで、俺は奪う力しかないんだよ！」

呪術なんて別に欲しくなかった！ 幻術なんていらねえ！ 俺はただ大事な物を守る力が欲しかったんだ・・・。
なんで・・・俺は奪うことしかできねえんだよ・・・。

—ほんとうに、そうなの？—

頭の中に澄んだ女の人の声が響いた。ふと後ろを振り向くと、あの夢にいた女性が立っていた。

いや、立っているというのはおかしいかもしれない・・・それから気配がせず、生気も感じられない・・・

そう、まるで夢のような存在。

「俺には、奪うことしか・・・」

口ごもりながらも俺は言った。昨夜の出来事が今のこのように思い出される。

引き裂き、潰し、消し去るだけの存在・・・それが俺・・・。

彼女は悔しさのあまりに奥歯を噛み締めている俺を見て、首をゆっくりと横に振った。

—魔法は決められたものじゃない

魔法はその人の血筋で決まるものでもない

奪う力しかなかったのは、あなたが諦めてしまっていたから

大丈夫、自分を信じてごらん、

きつと大丈夫だから—

言葉が直接頭に流れ込んでくる。その人は俺の手を握ると、にっこりと微笑みかける。

その瞬間、彼女の体が少しずつ薄くなっていく。

「ちょっと待て・・・あんたは——」

俺は必死になって、その人の正体を尋ねようとした。その人はそつと人差し指を俺に口に当てて言葉を静止する。

―私はあなたの可能性、私を、あなた自身を信じて―

その人は完全に消え去り、桜の花びらだけが宙を舞っていた。あの人が消えたと同時に、頭の中にワンフレーズのまるで歌のような呪文が浮かんでくる。

何かを考えたわけではなかった、ただ、その頭に浮かんだものを歌うように詠んだ。

言葉の意味は分からない、曲調もありふれたもののなのに、すごく暖かかった……。

どのくらい詠っていたのだろう。10分かもしれない、1時間かもしれない……。

――・・・悠夜――

俺が詠い終わったとき、一瞬だけ光喜の声が聞こえた気がした。周囲を見渡してみるが、もちろん光喜の姿は無かった……。

「まさかな……」

口では悪態をつきながらも、何故か心の中の悔しさや苦しみが晴れていた。

なんとなく、今すぐ家に帰るべきだと思った。

これで何か変わることなんてありえない
こんなクソみたいな世界で

愛とか努力とか

そんな物何の役にも立たない

でも もしも そんなことがあつたなら

きつとそれはどこかの誰かが

わがままなガキの願いを気まぐれで聞いてくれたただだろう

俺みたいなガキに微笑んでくれるかどうかは分からない

それでも

俺は生まれて初めて祈ります

どうか、もう一度あの日々を・・・

第8話「新章突入」

あれから1ヶ月あまりが経った。あの日帰って来たときには、衰弱はしていたものの、

光喜は二へゝとした笑みを浮かべて俺の帰りを待っていた。

俺が光喜を救ったのかといわれると、正直分らん。あの時詠ったものが何なのか、

あらゆる文献を当たってみたが、該当件数はゼロ。俺はもしかしたら、無駄なことをしていた可能性まで浮上してきた。

極度の疲労に、寝不足・・・頭がどうかしていたのかも・・・。
理屈では自分の行動を否定しながらも、心のどこかではアレに意義を感じている。

何の理屈もない、ただの感情なんだがな・・・。あの詠唱には何か意味があった気がする。

たぶん、いや、そうであってくれ・・・頼むから。

その後、俺たちにいつも通りの日常が戻った。いや、少し変わったかな・・・。

ここで変化点を整理したいと思う。まあ、とくに重大な変化はない。

変化その1。俺が禁煙・禁酒を始めたことだ。別に意味はない、あえていうなら決別みたいなものだが、
気持ちの問題でやっぱり意味はない。

変化その2。光喜の副作用がひどくなってる。その後、完全に復帰できたわけではなかった、
多分光喜の体に流れている時間が30分の1ぐらいの早さになっている。

具体的にどうなったかというと、普通の人が1年で成長するのを、

光喜は30年かけて成長する。

他に深刻なのは、治癒能力も遅くなっていることだ。普通の人で全治1週間のケガを、自然治癒に

まかせてしまうと、約7ヶ月たないと直らないことになる。

軽い怪我をするたびに、俺がエルルが治癒魔法をかけてやらないといけないという、なんとも

めんどくさいことになった・・・。

変化その3。俺が一旦自我が崩壊しかけたとき、ミヤの魔術が解けてしまい一度土に戻ってしまった。

その時から、たま〜に呼び出しても出てこなくなってきた。靈魂だけの状態で、フラフラとどこかに遊びに
いつているらしいが、毎回、成仏でもしたのかと思ってしまう。

変化その4。今ここで起きている事態なんだが・・・。

「・・・お前飽きないのか？」

「・・・？」

メアは一口カットされていない、輪切り状態のバームクーヘンにかぶりつきながら、首を傾げる。

あれからほとんど毎日のように、バームクーヘンを食べに来ている。買い物に行くときには、

必ずといっていいほどバームクーヘンを買うようになり、こいつがかじっているのを見るのが日課になりつつある。

最初は地図のお礼だったのだが、今は客に出すコーヒーと同じ感覚でバームクーヘンを与えている。

「お前の家族は知ってるのか？ 大事な娘が男の家に入り浸ってるなんて知ったら、怒るんじゃないのか？」

テーブルの向かい側に座っているメアを見ながら、やれやれとため息をつく。コーヒーをゆっくりと飲んでいると、かじっていたバームクーヘンを手でちぎって俺に差し出してくる。

「いらん・・・」

リビングで2人きりで、成立しない会話をひたすら繰り返している。俺が何を問いかけても、的確な答えなんて帰ってこないからな・・・。

2人きりなのは、別にあいつらが気を利かしたからとか、俺が追い出したとかではなく、あいつらは学校があるからだ。

意外だったのは、メアはすでに卒業しているというのだ。コイツが学校のテストをトップに近い成績でクリアし、飛び級したとは今でも信じがたい事実だよ。

「・・・」

無言でさつきちぎったバームクーヘンを口に詰め込むと、さつきより大きめにちぎって俺に差し出す。

でかくてもいらん、というか、でかくなったら余計にいらんわ・・・。

俺が断ると、そのでかいものを一口で詰め込むとする。四六時中お菓子を食べていたイメージがあるが、食べる

ペースが遅いだけで、驚異的な量を食べるわけではないらしく、口も小さいのでポロボロと落としている。

「たく・・・ガキじゃねえんだからよ・・・」

俺が呆れながらも身を乗り出して、汚れた口元を払ってやる。メ

アは照れる様子も、嫌がる様子もなく、口の中に入っているものを嚙むのに全神経を集中させているかのようにだった。すると、リビングの扉が開け放たれた。メアと話しているうちに、光喜が帰って来ていたようだった。

俺が光喜に「おかえり」と一言かけてやろうと思って、光喜に目線をやったとき、光喜は「あっ・・・」と声を上げる。

ちなみにだが、俺からの視線だと、光喜の頭がメアと重なってほとんどみえなかった・・・。

つまり光喜から見ると、メアの頭と俺の顔が重なって見えないということになっている・・・。

「・・・俺、エルルたちと遊んでくるね」

「ちよつと待て、こら」

別にイチヤイチャしていたわけでも、接吻をかわしていたわけでもないからさっさと座れ。

数回の問答を交わしたあと、光喜はチラシのようなものを1枚取り出してくる。

「ねえねえ、ここみんなで行かない？」

光喜の一言に、俺とメアはチラシを見る。遊園地か、水族館でもできたか・・・。映画館やショッピングモールなら

ついていってもいいぞ。まあ、そういう会話がいつかできるようになればいいんだが・・・こいつの頭じゃな・・・。

どんな幼稚な場所に行きたがっているのかと思いつながらチラシを見る。

・・・やばいな、疲れているようだ。俺は一度目をこすってもう一度よく見る。

【B - 24地区 ダンジョン新装開店】

開店って店じゃねえだろ。というか、こんないかがわしいチラシをどこでもらってきたんだ。

「商店街で、チュパカブラのきぐるみ着て風船持った人にもらったよ」

そんな怪しい人から物をもらうんじゃないやありません。そんなマイナーなUMAなんて、今時流行らんど。

まあ、この世界ではチュパカブラと雪男とスカイフィッシュは実在するんだがな。あと見つかつていないのはグレイくらいか……。ちなみにネッシーはダメだな、この世界にネス湖はない。

「ねえ〜いいでしょ〜、そこそこの難易度だよ〜」

難易度の問題じゃねえよ。俺はそのチラシの写真を見る。パリの斜塔をまつすぐにしたような、要するにただの塔だ。

南側にはキラキラ輝く白い砂浜が広がり、北側には青々しい若葉たちが広がる草原になっている。

その風景は、塔の付近に作られたコンクリートの壁で区切られていた。

俺はそのチラシに書かれているキャッチフレーズを読む。

「海・陸・空のモンスターたちがあなたをもてなしてくれます・・・」

「

モンスターの部分が食材ならば、まっさきに飛んでやっても構わないが、モンスターなんかにもてなしてなんかいらん。

「こんなのつまんねえに決まって・・・」

俺の言葉は2人には届いていないようで、既に身支度を開始していた。はてさて、こいつたちには何語を話せば理解を得ることができるのだろうか？ 理解してくれるというならば、スライム語だろうが、ミイラ語だろうが3分以内にマスターできる

自信があるのだが。

「分かったよ・・・行けばいいんだろう・・・」

俺は気晴らしに煙草を吸いたくなっただが、コートの中には煙草はないことに気が付く。禁煙を決意したときに、全部捨てたんだっただな。深いため息をつく、俺ものんびりと用意を始めた。

回復アイテムと、簡易式儀式の魔方陣が描かれた紙を何枚か持つ。この紙はこの前使ったような強力な物ではなく、ミヤを召喚するためのものだ。まあ、ミヤが出てくるかどうかは奴次第なんだが・・・。

なんだかんだで、俺たち3人は塔のダンジョンに来てしまった。潮風が気持ちよく、確かにいいところなのだが、さっきから通過する場所にあった宝箱は見事に空っぽだ。

そりゃそうだ、商店街でチラシを配ってたんだから先客が来ていてもおかしくはない。むしろ、自然なことだ。

「もう帰らねえか・・・。この調子だと、ダンジョンの宝箱も空っぽかだぜ」

俺は2人に提案してみるが、2人は見事なまでに俺を無視して突撃していった。

今度保育士にでも、子供のあやし方を聞くか・・・。

シンプルながら、威厳の有るドアを開けてダンジョン内に入る。
するとその瞬間、俺に向かって斧が飛んでくる。
体を少しそらしてそれを回避して中の様子を見た。

「ぐるあああああ!!」

1人の大男がめちゃくちゃに暴れまわっている。近くには僧侶らしき男と、男剣士、女の白魔法使いが男を取り囲んでいる。

「あれがココのモンスターかな？」

「・・・・・・退治」

光喜とメアがマジな顔で言う。俺にはすぐくむさくるしいだけの男に見えるのだが、錯覚か？

大男は周りの連中を蹴散らし、やがて猛牛のように俺たちに突進してきた。俺が止めようと思ったとき、俺の一步前に居たメアが剣を抜いた。

「ら・・・・」

澄み通った声がダンジョン内に木霊する。それと同時に、剣に魔力が溜められていく。こりゃ、あの男死んだな・・・・。

メアは、まるで指揮棒を振るかのように剣を振った。

「奏でる（プレイ・）^{ソート}剣」

最初の声だけならとても心地が良かった。天使の歌声と賛美しても加護ではないほどだったんだがな・・・・。
だがメアが剣を振った瞬間、壁が崩れ、床がえぐれ、大男は血まみれになってその場に崩れ落ちた。

すると、剣士の男が大男の元に駆け寄った。

「すまなかった、突然暴れだして」

男は深々と頭を下げる。

「いや・・・謝るのはコイツの方だろう・・・」

俺はメアの頭をポンポンと叩く。メアは俺の顔を不思議そうに見てから、首をかしげた。

大男を斬ることには、俺は異存ない。だがな、他は別だろ・・・他は・・・。

「・・・・・・・・？」

メアは自分の目の前に広がる光景をマジマジと観察している。さっきの技の跡はメアから前方に扇状に広がりながら、

かなり遠くまで及んでいた。そして、大男のオマケとして僧侶が殉職してしまっていた。きつと天国にいけることでしょう、

まあ、蘇生すればなんとかありますよ・・・。

「殺戮の歌姫・・・」

剣士の男が小さく呟いた、メアの通り名をよくお知りで・・・。

「悪かったな、こいつはバカなんだ」

俺が言うと、メアはぶくつと頬を膨らましながらか俺を睨む。睨んでいるつもりなんだろうが、拗ねているようにしか見えない。

隣では光喜がヘラヘラと笑っている。3人を剣士はゆっくりと眺め、

目を丸くした。

「あの、陽河悠夜さんですか……」

「それがどうした」

男に名前を呼ばれている場合は、大抵喧嘩を売られているときなので、クセでガンを飛ばす。

「いや……陽河悠夜といったら冒険者の中じゃ有名ですし、殺戮の歌姫とパーティーを組んでくるほどのダンジョンなんだと……」

「

男はタジタジになりながら言い訳をする。まあ、俺とメアが組まなくちゃいけないほどだと、かなりの難易度のダンジョンになるだろうが、

別に簡単なダンジョンに来てもそれは、俺の勝手だ。いや、正しくは俺は付き添いなので、こいつらの勝手だ……。

俺はこいつらに当たる人物たちを探すが、既に両者とも俺の隣にはいなかった。

話していた剣士も、驚きの表情であちらこちらに目線をやる。

ダンジョン入り口から20m地点にて、パーティー解散……。

悲惨だな。

「乱心？」

その場にいた剣士の話など、馬耳東風といった感じで2人を探しにいった。

まったく……。あのバカどもは、いったいどこにいったんだろうね……。

2・3部屋をまわったとき、身長3メートルはありそうな、鬼のようなモンスターが現れた。

「我は漆黒の魔の番人、アグラス！！ これ以上の進入は我が――」

そいつの偉そうなセリフの途中で、顔面にダークをぶつける。結果は1撃KOで、モンスターは消えていった。うざいよ、無に帰れ。

「光喜ー、メアー」

俺は2人の名前を呼びながら前進していく。3分おきぐらいにモンスターが出てくるのが腹が立つな。

俺が廊下を歩いていると、壁の一箇所に小さめに書かれていた文字を見つける。

文字は物で書かれたものではなく、魔力によって浮かび上がった文字だ。魔術に使う文字列の1つ

なのだが、これ一文字だと何の意味がまったく分からない。

「なんかあるのか？」

俺は隠し部屋でもあるのかと思い、壁を蹴り破る。結果的には、何の変哲もない廊下に繋がっていた。

「なんだよ、思わせぶりなもん作りやがって・・・」

俺がその廊下を見渡すと、1つの宝箱を発見する。空っぽの確立が高かったが、一応あけてみようかと近づくと、その宝箱が勝手に開いた。その箱口は牙の付いた口になっていて、大きな舌をだらしなく出している。

ミミックと呼ばれるモンスターだな。蹴り一撃でミミックを壁にたたきつけると、ミミックはおとなしくなった。

ミミックが俺についてきたそうになっている・・・ような気がする。

「うぜえ」

無抵抗なミミックに横蹴りをかまし、再び壁に叩きつける。まだ死んでいないようだ。

どうせだからこのままにしておいてやろう、誰かバカな冒険者が餌食になるかもしれん。

不謹慎な理由でミミックをスルーして歩いていく。
ゾンビソルジャーが現れた。

「じゃま」

頭を蹴り飛ばし撃退。

フライングキラーが現れた。

「うぜえ」

拳一撃で撃退。

ワウルフが現れた。

「めんどくせえ」

幻術をかけて放置。

陽河 光喜が現れた。

「ゴルア!!」

膝蹴りを鳩尾に当てた。

悪い、ノリで蹴った。

「ぐ・・・ゆ・・・悠夜」

光喜が苦しそうながらも、立ち上がった。その後、剣を構えて俺にかかってくる。

鳩尾に入った蹴りがきつかったのか、フラフラした足取りで回避はとても楽にできた。

「悪いって言うてんだろ・・・」

別に怒って剣を持つてるわけじゃないと思うが、なんとなく言ってみる。さてと、光喜は

そんなに俺を恨んでたのか？ カッコイイお兄様に嫉妬でもしていたのかな？

「悠夜ゴメン・・・愛のために死んで!!」

「死ねるか!!」

アゴを蹴り上げてやると、光喜はキレイに宙を舞った。その後、床に激突して気絶。

目を分かりやすいくらいに回しながら、きゅ〜と情けない声を上げ

ている。

コイツ、魅了^{チャーム}してやがる。

「おい、起きろ」

回復魔法をかけながらも、光喜を蹴り起こす。光喜がふぬけた顔で起き上がる。

「魅了^{チャーム}なんて初歩的な状態異常に引っかかりやがって・・・」
「だ・・・だって、アレは抵抗できないよ」

お前はどんなモンスターに会ったんだ？ このガキみたいな奴が完全に魅了されるモンスターか・・・
会って見たくないことはないな・・・まあ、それもメアを見つけてからの話なのだが・・・。

そんなことを考えていると、その本人がフラフラと前から歩いてくる。俺は声をかけようとするが、すぐに異変に気が付く。

服は乱れ、顔はうつすらと朱色に染まり、足取りは文字通りふらふらしている。コイツも魅了^{チャーム}か・・・。

むしろ、この姿に魅了^{チャーム}されそうな感じもするが・・・。

メアのあられもない姿に目を奪われていたが、すぐに現状のまずさに気が付く・・・。

メアが魅了^{チャーム}！！ ちょっと待て、このダンジョンが消し飛ぶぞ！！

「光喜！！ メアを止めるぞ！！」

光喜に視線をやると、真っ赤な顔をしながらメアから顔を逸らしている。

照れてる場合か！！ 死にてえのか！！

「まずは・・・幻術で動きを止めて!!」

俺が幻術をメアにかけようとしたとき、メアは剣を投げ捨て、壁に話しかけた。呂律が回っていないため、何を言っているのかは不明だ。

「ふあふあひゃあふあひい・・・へふあえほ」

「おい・・・メア？」

危険そうに見えなかったため、メアに話しかけてみる。メアは焦点の定まっていない目で俺を見ると、しばらく沈黙を続けていた。だが、やがてぱあと明るい笑顔を浮かべると、いきなり抱きついてきた。

「ミケ〜」

「誰がミケだ!!」

ミケってあの時に黒猫じゃなかったか!!　というか、こいつは魅了^{チャーム}じゃなくて、混乱^{コンフュ}だ!!　メアほどの能力者なら、混乱^{コンフュ}ぐらいどこにかできると思っただがな・・・。

「・・・だ〜いすき」

メアの言葉に一瞬ドキツとしたが、前言にミケがあったことを思い出す。俺じゃないんだよな・・・。というか、

混乱^{コンフュ}状態で言ってる言葉を真に受けるなよ、冷静になれ俺・・・。抱きついて離れないメアを片手間に、俺は万能薬を使用してメアの状態異常を解除した。

自信あり？

俺＋巻き添えを食らった光喜は、メアの持っていた蘇生アイテムによって復活した。

どんな死に方をしたかというところ……いや、止めておこう……思い出したくもない。

かなりグロテスクな肉塊に変貌したとだけ言っておこう。

「……………」

メアが小さく唸りながら、しゅんと肩を落とす。一応、自分が悪いことをしたのだと理解はしているようだ……。

「た………なんでまた、あんな状態異常なんかにかったんだよ」

初心者レベルならよくある話だが、メアや光喜のレベルになると

滅多に魅了^{チャーム}や混乱^{コンフュ}なんて

かかることはないはずだろうが。

「それがね、すっごくかわいいカーバンクルが居たの……！」

光喜が腕をパタパタを振りながら言う。カーバンクルとは、ネコぐらいの大きさの毛がふさふさしたモンスターの

ことで、見た目もネコに近い、額にキレイな宝石のような石が埋まっているのが特徴だな、一部の愛好家には愛玩動物として飼われている。

お前、さっき愛のために俺に死ねとかいわなかったか？俺たち兄弟の友情とは、そこまで儚いものだとは思ってもいなかったよ。

「メアは？」

俺がメアに尋ねると、何か石版のような物を取り出した。それは、壁か扉の一部のようで、表面にはびっしりと

文字が書かれている。これは、古代文字のようだな、魔法学校に通っていた頃に習った奴だ……。

しばらく、これが何を指しているのか分からずにじっと見ていると、メアが頭をクラクラさせだした。

「うぐ……」

俺はとっさに石版を奪い取る。まさかとは思うが、この古代文字が難しすぎて、頭が混乱したと言っんじゃねえだろうな。

メアは何も言わずに、何度もコクコクと頷く。お前の混乱は、^{コンフュ}自滅が原因かよ……。

俺はさつと石版に目を通す、すると、一部の文字列に違和感を覚える。

「なるほど……メアの原因はコレか……」

「……？」

石版の一部の文字列が、相手の判断能力を著しく削る呪いの詠唱文になっている。古代文字がしっかりと読める

レベルの高い冒険者のみをピンポイントに狙った呪いだな、俺が呪術に耐性のない人間だったら、この場で暴れ回っていたかもしれない。

俺が石版に気を取られていると、メアが光喜に近づく。何の前触れもなく、犬のように光喜に鼻を近づけて匂いをかいでいる。

何してるんだ？ 俺にハッキリわかるように600字程度にまとめ

て説明してくれるか？

「……甘い匂い」

4文字で終了した説明に首を傾げつつ、光喜に近づいてみる。確かに、かすかに甘い匂いがするな……。

「……リリス・ポーション」

メアが呟くようにそう言った。リリス・ポーション……確かそんな香水があつたな……アレってなんなんだ？

「……かわいい瓶」

瓶の形など俺が気にしているとでも思っているのか？ 家に飾る花瓶は間に合ってるし、そんな乙女チックなものをコレクションする趣味は、あいにくだか持ち合わせてはいない。俺はなぜ光喜にその香水がついていて、その香水がどういった意味合いを持っているのかが知りたいのだよ。

「……もてる」

そりゃ、いい匂いのする女の子は男に好かれるだろうね……。

俺は短絡的にそう考えた後、光喜のさっきまでの状況を思い出す。

もしかして、光喜が魅了チャームを受けていたのって

そういうことなのか、いやいや、魅了チャームを受ける香水なんて存在するのか？ 存在しているのか？ リリスっていうことは、

女悪魔サキユバスにちなんだ名前なのだろうが……。

「そつえば、そんなレアマジックアイテムがあるって、シャリー

ナが言ってたかも」

光喜が思い出すように言う。ということは、そのカーバンクルに、
リリース・ポーシヨンがかけられてたわけだ……。

ダンジョン入り口で暴れていた大男といい、ただのダンジョンとは思っていなかったが、まさかココまでややこしい場所だとは思ってもいなかったぜ。

「悠夜、治療アイテム幾つ持ってる？」

光喜に言われて、自分の。次元ポケット級のポケットを見る。万能薬が4つ、毒消しの薬草が2つ、痺れとりの薬草が1つ、蘇生の聖水が1つ、HP回復用のポーシヨンは30本あるから心配ない。

コートのポケットにそんなに入るはずがない？ ファンタジーなんてそんなものさ……。光喜がやってたゲームなんか、自転車に釣竿3本、薬が500個近く、そのほかにもいろいろなアイテムをリュック1つに入れてたな。

「光喜は？」

光喜は自分のポケットをあさる。そして、出て来たアイテムは……。キャンディー4つ、飲みかけのジュース1つ、携帯ゲーム1つ、トランプ、frisbee、ビー玉……。って、遊ぶものばかりじゃねえか！！　というか、いい若者がビー玉をポケットに携帯しているのか！？

「薬とか持って来てないのか！？」

「だって、俺が持ってなくても悠夜が持ってるし」

そうか、そうだな、普段からお前、アイテム使わずに戦うもんな・
。。。

そして、その全てのしわ寄せが俺に来るんだ。

「メアは？」

俺に話を振られたメアは、剣の鞘と一緒に腰についていたポシェットを取り出す。不死鳥の羽【ピンクの絆創膏】が6つも出てくる。なるほど、自分が周りの人間にどれだけ迷惑を及ぼすか自分でも自覚しているらしいな。。。他のアイテムはと。。。ポシェットを逆さにするが、袋詰めされたバームクーヘンの山と、その他のお菓子が出てくる程度だった。

最後には、小さなストラップがジャラジャラと出てくるだけ。。。。

「状態異常を直すアイテムはもって来てないのか？」

「。。。なくした」

口をつぐみ、しょんぼりと下を向きながら言う。なるほど、混乱コンフュを受けているうちにどこかへやったと。。。

メアは山積みになされたバームクーヘンを1つ手に取る。

「。。。1つ足りない」

はいはい。。。1つくらいどうってことないだろ。。。そのバームクーヘンの山は、俺が食すバームクーヘンの3年分に相当するぞ。

しばらく、しょげていたが小腹がすいたのか何食わぬ顔で包装紙を破り、満面の笑みでバームクーヘンにかぶりついた。

一応回復してるんだろうな。。。メアは無傷だったが。。。

「回復魔法は、専門じゃないから……エルルがいれば楽だったんだが……」

ボイスン

スタン

毒2回に、麻痺1回、全ての状態異常を4回、計6回の治療しかない。俺の回復魔法だと、完全治療は

できない場合が多いし、失敗する確立も高い……闇の魔力を持つてると、相対属性である光の魔法、つまり回復魔法は苦手になるんだよな……。

「ここは、一度戻ってエルルを連れてきたほうがいいかもな……」

回復魔法で他に頼りになる奴はいない、タケシは自分の能力以上のことはできないし、シャリーナは攻撃専門、ミヤを召喚しても魔法さえ使えない……。とことん攻撃的な奴が多いメンバーだよな。

俺が一度帰ろうとしたとき、メアが俺の袖を引っ張る。

「……行く」

いつになく、むきになった顔でそう言う。このメンバーだけで、いけると思ってるのか？

俺の質問に、コクリと頷く。その自信の根源がどこからくるのか知りたい……。

「まあ、逃げるのもシャクだし、俺はいいんだけどな……」

というか、俺は呪術や幻術を使って、大抵の状態以上には耐性があるからな。俺が気をつけないといけないのは、

ボイスン

スタン

毒と麻痺、後は凍結ぐらいだろう……。

「きつとなんとかなるって」

何の耐性もない光喜がニコニコ笑顔でそういう。お前の自信の根
源も俺は知りたい・・・。

花見？

俺が頭を抱えていると、そんなことはお構いなしと言わんばかりに光喜と

メアは前進していく。いいから、もう迷子にだけはならないでくれよ……。

あと変なものを見つけたら、まず俺に報告、お前らだけなら全てのトラップを

喜んで発動させて進みそうだからな。

「これなんだろう？」

光喜が壁に描かれた文字を見つける、俺がさっき壊したのと同じタイプの奴だな。

「むやみに触るな……」

俺は破壊したがな。特に意味もなさそうだし、操作するだけ無駄だ。俺の忠告に耳を傾けていたが、ううーううーと、少し考えてから光喜は剣を突きたてた。

貴様は何を聞いていたのかな？ 別に何が起きるわけじゃないが、むやみやたらに物に触るな。

「何にも起きないね……」

「ほら、さっさと行くぞ」

壁の前で首を傾げる光喜に言うと、どうみても色の違うタイルを

踏もうとしている

メアを引っ張って歩き出す。メアは一瞬寂しそうな声を上げたが、心を鬼にして突き進もう、
でないところちの身が持たん。

とりあえず、最上階を目指しながら歩き続けているのだが、いつまでたっても階段が

見つからない。もうかれこれ、30分は歩いただろうか……。それにしても、これは異常だろ。

外から見た塔の直径は2km程度、30分間歩いて、曲がり角1つない……。モンスターも

一匹も出てこないし、気配もしない……。物理的にこれはありえない。

「光喜・・・ビー玉貸せ」

「ふえ？ 悠夜、遊びたいの？」

お前と同じにするな、俺はビー玉程度の遊びで満足できる小さな人間じゃないんだ、

いいからつべこべ言わずに貸せ。

俺は光喜からビー玉を受け取ると、そのビー玉に魔力を込め、指で前方へと弾く。

すると、ビー玉はまるで弾丸かなにかのようにまっすぐと飛んでいく、数秒後、後方から

コロコロと何かが転がってくる音が聞こえてきた。

「アレ？ なんで、前に投げたのに？」

光喜が不思議そうに、その小さなビー玉を手を取った。やられたな、空間制御の罠だ。

「どうやら、俺たちは同じところをグルグル回ってたみたいだな・・・」

いつの間にか、魔力で作られた亜空間に迷い込んでいたようだ・・・。
。だが、
そんな高等技術を誰が仕掛けたんだ？

「・・・どうするの？」

メアがあまり困っていないように俺に尋ねてくる。頼りにされていると思ってもいいのだろうか。

俺は壁に手を当てて、魔力の流れを探してみる。

あまり広範囲にわたっているわけではないようだ、この程度なら俺の魔力ですぐに

脱出できそうだな・・・。

俺は一呼吸をおき、魔力を高めてる。それを拳に込め、壁を殴りつけた。壁が崩れた瞬間、

青白い光が周囲を照らし、嫌な感じの魔力が一気に晴れた。

「このまま、壁の穴を抜けていくぞ・・・」

俺がそういつて、壁の穴をくぐろうとしたとき、花びらが数枚舞い込んできた。薄桃色の
ハート型の花びらは、この世界では見られないものだ。

「桜？」

俺が足元にひらりひらりと落ちた花びらから、前方に目線を戻したとき、まるで濁流のように
流れ込んでくる桜の花びらが見えた。

瞬時に身の危険を感じた俺は、ダークバスターでその花びらの流れを散らす。地上から数十メートルの高さにある、その階の廊下には鮮やかな花びらが散乱した。

俺の後ろにいた光喜とメアは、何が起こったか分からずにあたふたしている。

俺は完全に壁の穴をくぐり、残りの2人もくぐってくると、そこは少し広めに作られた廊下だった。

俺があけた穴がある側の壁には、騎士の鎧や剣などが飾られ、反対側には格子付きの窓が等間隔で設置されていた。

その窓側の壁の近くには、1人の女の子が立っていた。

先ほどの桜の花びらと同じ、薄紅色の長髪をサイドポニーテールにした女の子で、身長は

150後半だろう。青く澄み透った目は、俺たちをじっと見ていた。服装は軽装でも、鎧でも、ローブでもなく、ミニスカートと青いリボンが胸元につけられたどこかの制服に見える。

「はじめましてでいいんだよね？　俺には、君みたいな娘から攻撃される覚えがないんだけど？」

俺は尋ねながらも、腕に魔力を集中させていく。いつでもダークを連発できる状態だ。

彼女はゆっくりと右手を上げる、天井を向けて立てていた人差し指の先端に、桜色の魔力が集まっていく。俺のドス黒い魔力とは違って、キレイな色をしている。

「陽河悠夜に光喜・・・相手をしてもらっわよ」

メアは無関係なわけだ、俺と光喜ということは、陽河家に恨みでもあるのかもしれないな。

陽河家は呪術師の家系だから、何かと人の恨みを買ったりもしている。

少女の指先に集まっていた魔力は、やがて桜の花びらへと変わり、宙を舞い踊る。

すると、先ほどまではただの飾りだった騎士の鎧たちが、次々と動き出したのだ。

「モンスター！？ それとも、物を操る能力！？」

光喜があわてながら剣を抜く、メアも剣を構えて臨戦態勢に入っている。意気込みはいいが、

頼むから歌ったり、叫んだりしないでくれよ……。

俺は魔力を一気に放出すると、宙に舞っていた花びらたちが、次々と黒ずんでいき、やがて

消えていった。すると、先ほどまで動いていた鎧騎士が消え、元の定位置に戻っていた。

「幻術か……それも、かなりの腕だな」

光喜とメアは完全に騙されていたが、幻術で俺に勝とうなんて100万年早いんじゃないのか。

カスミザクラ

「霞桜！！」

少女が叫ぶと同時に、まるで霧のように桜の花びらが乱舞し、少女の姿が見えなくなった。

俺はダークを一撃放ち、その爆風で花びらの霧を晴らす。だが、少

女の姿はすでになく、
気配もかなり薄れている。

俺は目を閉じて、心を落ち着けると虚空に向かってダークを放つ。

ツクパネ
「突羽根！！」

すると、そのダークを切り裂くように、花びらが集まってできた
驚ぐらしいの大きさの鳥が

虚空から現れた。二発目のダークでその花びらの鳥を相殺させると、
鳥が現れたあたりまで

一気に踏み込み回し蹴りを入れる。

すると、何もなかった場所から先ほどの少女が現れる。少女のか
細い両手は、自らに
向けられた蹴りをけなげにも防いでいた。

「幻術を使つての、隠密攻撃か・・・悪くはないな」

ただ、相手が悪かったな。俺はガードしている腕ごと、少女を蹴
り飛ばす。

幻術の腕は悪くないが、体術のセンスは全く感じられない。このま
ま間合いを詰めて戦えば、
幻術を打たせる間もなく終わらせることができるだろう。

カンザクラ
「くっ！！ 寒桜！！」

俺が間合いを詰めようとしたとき、俺と少女の間に桜の花びらで
作られた壁が出現した。

突破を試みて腕を振りかざしてみるが、見た目以上に頑丈なその壁
は、コンクリートの壁なんかより
ずっと強いものだった。

俺が壁にひるんだ瞬間、壁のサイドから少女が現れ両手をかざす。

「これで終り！！」

少女が決め技を撃とうとする、だがな・・・なんか忘れてないか？

少女が技を放つその刹那、少女の横にはトリプルビートで自分のス
ピードを3倍まで引き上げた

光喜が回りこんできた。

そして、光の魔力の弾丸を少女にぶつける。

「きゃああ！！」

少女の軽そうな体は吹き飛ばされ、花びらの壁はバラバラに散つ
ていった。

「悪かったな・・・俺らは正義の味方じゃないんだ、必要ならば2
対1なんて平気でやるぜ」

「俺はしたくないんだけどね」

光喜が憎まれ口を叩きながらも、ニコニコとした顔で俺を見る。

少女はたいしたダメージもなさそうに立ち上がる、光喜の攻撃が直
撃した右腕からは、花びらが散っていた。

「カンヒザクラ寒緋桜・・・纏っておいて正解だった・・・」

どうやら、自分の体全体に桜の花びらを纏っていたようだ、それ
を幻術で隠していたというわけか・・・。

花びらなんか使っているから、弱そうに見えるが、見た目異常の防
御力だな。

桜散る？

その少女は、自分の周りに桜の花びらを舞わせ、こちらの様子を伺いだした。

光喜の予想以上のスピードと、幻術の通用しない俺、それに、さつきから控えたままのメア、

あいつの予想以上の戦力だったんだろうな。

まあ、さつきから突っ立ったままバームクーヘンにかぶりついているメアが、

戦闘意欲があるのかは俺にも分からないことだがな。

「お前は俺には勝てねえよ・・・」

俺は少女に言うと、魔方陣がかかれた紙を一枚取り出した。幻術の正体は、

五感を通して相手の脳内に魔力を送り込み、脳内の電気信号を狂わせる

技術のことだ・・・。ならば、この辺りの石の壁を材料にしてミヤを召喚すれば、

脳まで石でできたミヤを幻術にかけることは不可能、この少女に勝ち目は

一万分の一もなくなるってわけだ。

俺は紙を地面に叩きつけて、魔力を注いだ。周囲を俺のドス黒い魔力が覆う。

「出て来い、ミヤー!!」

俺が叫ぶと、床の一部がまるで泥か粘土のように形をぐにゃぐにゃと変え、それは

やがて1つの形を作った。

それを見た全員に、数秒の沈黙が流れる。それは、黒いボールにでっかい眼が

ついただけの低級悪魔だった。その背中にあたる部分には、小さな紙が

貼り付けられている。

『最近出来たお友達です、私は忙しいので変わりに使ってください
ミヤ
By 魅夜』

丁寧なことに、手紙のラストにはハートマークまでついてやがった……。

「あの……クソアマ……」

俺は一つ目の悪魔を見る。手紙を握りつぶしながら、足を振り上げると、思いつきり
その悪魔を蹴り飛ばす。

「こんなもん、使えるかあああああ!!」

悪魔は勢いよく吹っ飛び、壁にぶつくと碎けて、ただの石の塊へと戻った。

そうこうしている間にも、少女は魔力を桜の花びらに変えて、周囲に撒き散らしていた。

「雛菊桜（ヒナギクザクラ）!」

少女が叫ぶと、その両隣に桜の花びらが集まり、人の形を作っていく。それはやがて

少女と同じ姿になっていく。

「そんなの見え見えだよ！！」

「待て、光喜！！」

俺の制止も耳に入っていない様子で、光喜がまっすぐに中央の少女へと向かっていった。

光喜がその少女の足に蹴りかかるが、その足は碎けて花びらに変わる。その後、残った胴体

部分は爆発を起こした。爆発といっても、炎が上がったわけではない、炎の変わりに大量の花びらが舞い散り、煙の変わりにむせ返るほどの桜の匂いが立ち込める。

光喜はぐったりと床に倒れ、動かなくなっていた。

その様子を、2人になった少女が見下ろしていた。やがて、動かなくなった光喜の体からは黒ずみ、

大量の虫に変わると虫は周囲へと不気味に散っていく。

「しまった！！」

少女が声を上げたとき、光喜は声を上げた少女の真後ろにいた。

最初に突っ込んで行った光喜は、俺の作り出した幻影。本体は幻術に身を隠し、

後ろに回りこんでいたのだ。

光喜の攻撃を、もう片方の少女が止めようとするが、俺はその少女に既に接近しており、

ダークで吹き飛ばす。その間にも、光喜は少女の腹部に掌底を沈めていた。

そのとき、ふと何か違和感のようなものが漂った。それを感じ取った瞬間、俺は光喜の襟を

掴んでそのまま飛び離れた。

そのすぐ後に、2人いた少女が両方花びらの爆発を起こした。

「チツ！！ 全部幻術か！！」

ギリギリまで俺に幻術と悟らせないとは、なかなかレベルの高い女の子だ……。

俺が気配を探りながら周囲を見渡すが、少女の姿はない……。

『もう準備OKだから……』

部屋内部に声が響く、どこか遠くから幻術を通して話しかけているようだ。

『この塔には、あらゆる仕掛けを施した……』

みたいだな、あんな石版や香水を使った手の凝ったトラップは珍しいよ。

『あと、あなたに魔方陣を悟られないための仕掛けもね』

少女の声が聞こえたとき、塔全体にすごい量の魔力を感じる。どうやら、この塔全体に

魔方陣を施したようだ……。だが、魔力の大きさよりも、この魔力の質が気になる……。

懐かしい……。というより、なんだか感じなれているような魔力だ……。

『さあ、発動して魔方陣！！』

そんなことを考えていると、ある1つ重要なことを思い出した。

「ちょっと待て!!」

俺の声など届かず、塔を包んでいた魔力がドンドン膨らんでいく。俺はとつさに窓側の壁にダークバスターを撃って大穴を開けた。その後、光喜にトリプルビートを使わせメアの手を引つ張りながら外へと飛び出した。すると、塔は異様なほどに光り出す。

『あれ？　へ？　な、なんで』

ほんの数秒後、塔は眩い光に包まれて爆発した。

爆破の衝撃で塔からどんどん吹き飛ばされていく。

俺は空中に防御用魔方陣を展開させると、その上に着地する。俺と俺にくつついていた

メアはうまく着地できたが、光喜は魔方陣に思いつきり衝突した。

「つたい……」

ギリギリ聞こえる声でそう言う。本当に痛い時はなかなか声が出ないって本当だな。

俺は飛んでくる塔の破片を適当にダークで払いのけると、塔であったものを見る。

いやゝ、気持ちいいくらいに塔の半分より上がぶっ飛んでる。

「爆破するための魔方陣だったのかな？」

光喜が衝突のときにぶつけたのであろう鼻を押さえながら言う。

そんなことしたら、術者も無事じゃすまないだろう……。多分、俺とお前がダンジョンの途中で壊した、壁に書かれた文字……。アレが魔方陣の文字列の一部だったんだろう……。つまり、塔の崩壊と爆発は俺らがきっかけでおこったんだ……。と、そんなことを考えつつも口には出さなかった。

「ドジな術師が失敗したんだろ……」

そうしておいたほうが、はるかに楽だと思う。メアが後ろで何か言いたそうにしていたが、手に大事そうに持っていたバームクーヘンを取り上げて、口にねじ込んだ。いいから、黙って食ってろ。

術者の少女がどうなったかは知らないが、まあ、死んではいないだろう……。死んでも、

この世界なら一般的に蘇生が可能だから、どこかで復活できる……。はずだ……。

それにしても、あの娘はなんだったんだ？ 陽河家に私念のある

人間か、それか、

魔女狩りの残党か……。いや、魔女狩りの残党にしてはやり口が甘い。黒魔術式の武器は

もっていなかったし、そっちの線は薄そうだな……。

しばらく考えていると、塔の反対側から大鷲や天馬などにのった人間がワラワラと飛んできた。

「……自警団」

メアがボソつという、つまりポリだな……。さてと、とんずらするか……。

「なんで、別に悪いことしてないのに？」

「ポリは敵だ……。俺はそう自分に言い聞かせて生きてきたからな……」

絶対にまねするなよ、変な人間になっちまうからな。俺の場合は四六時中煙草を吸っていたから、

ポリに見つかったら補導されちまうって理由で、敵とみなしていたんだ。

俺は空中に展開していた魔方陣を解除して、地上に着地する。メアは無事着地、光喜は二度目の

着地失敗。いい加減学習しような……。

そして、俺たちはその場から去っていった。正直、このときの俺は、あの少女のことをなんの脅威にも

感じてはいなかった……。心の中にとっかかりを感じてはいたが、魔女狩りを倒したことで妙な自信が

ついたんだろう……。あの少女が何度俺たちに向かってきても、平気という自信があったのだ……。

そう、この頃は……。

第9話「もう1人の・・・」

野球は九回裏からスタートだ。昔、聞いたことのあるワンフリーズだ。

この言葉によると、序盤にどんなに失敗していても最後の最後にどうにかなる、

チャンスはまだあるという言葉だそうだ。

では、先攻のチームはどうだろうか？ 先攻チームには最後のチャンス

というものは相手より先に訪れるということで、そこで奇跡が起きても、

相手にはその奇跡を挽回するチャンスがあるということだ。

俺がなぜこんな話をしているか、別に野球観戦をしているわけではない、

俺は人生のチャンスは、全ての人間に平等に訪れてはくれないということが

言いたいのだ。

「チェックメイト・・・」

俺は黒い騎士^{ナイト}の駒を取ると、白い王^{キング}の元に進める。

「げっ！！」

シャリーナが顔をしかめながら自分の白い兵隊たちを見る。過半数が死に絶え、残った数少ない兵隊たちも、黒い兵隊たちに囲まれている。

チェスは、元々戦争のシミュレーションに使った駒だという説があ

る。

この場合だと、シャリーナの国はほぼ壊滅状態にあるということだ。

「もう一回よ！！ 次はダウトで勝負よ！！」

シャリーナがその辺りに散らばっていたランプをかき集める。
さつき

大富豪をしたまま、ほったらかしになったものだ。ちなみに、いろいろな

ゲームを次々として、ただいま19勝0敗。

3時間ほど前にシャリーナが家に来て、賭けを持ちかけたのだ。
俺が負けたら、シャリーナとダンジョンに行き、あるアイテムを取ってくる。

シャリーナが負けたら・・・どうなるんだっけ？ 覚えてねえや。

さあ、ここで最初の野球の話に戻そう。俺は1度でも負けたら即アウト、

シャリーナは納得のいくまで勝負を繰り返す。これは平等なのだろうか・・・。

そんなことを10戦目までは考えていたが、ここまでワガママを突き通されると、

人類の平等さを悟るまでに至ったわけだ。

「ご勝手に・・・」

というか、2人でダウトをしても、相手がウソをついてるかどうかは

手札を見れば一目瞭然ということはコイツは気付いているのだろうか？

俺はテーブルに置かれていた禁煙ガムを1つ取り、口の中に入れる。

相変わらず不味い。これで、本当に煙草の変わりになるのかというくらい

不味い・・・まあ、気分の問題だな。

今日は、光喜は友人に誘われてダンジョンへ探索、昔から俺と一緒に

ダンジョンへ行っていた光喜は成績に似合わず、レベルは周囲の連中より

格段に高い。なので、少し難易度の高いダンジョンに行くとき光喜は引っぱりだこになる。

エルルは魔法学校の実習があると言ってたな、エルルだけ1学年下だからな、シャリーナと光喜とは行事日程が微妙に違っている。

「なんか、納得いかないな」

ランプをかき集めながらも、先ほどのチェスのゲーム盤を見る。

「何がだ？ 確実にお前の負けだろ」

これ以上、王は動きようがない、完全に詰みだよ。
キング

「なんかね、あんたの戦法って卑怯なのよ!!」

「お前がバカなんだ・・・」

シャリーナは、全てを生かそうとする戦法を取る。ポーンなんて捨て駒

なんだから、犠牲にしまえばいいのに下手に守ろうとする。だから、

逆に全滅の危機が訪れるんだ。

「何よ!! 犠牲を出さずに勝つのがベストに決まってるでしょ！」

「ガキみたいな理屈こねてるから負けるんだよ、使えねえ駒は盾でも囿にでも
しちまえばいいんだよ」

シャリーナは小さな声で、「冷酷な奴」とだけ呟いてトランプを混ぜ始めた。

それがチェスだろうが……。というか、マジでダウトするのか？
ジョーカーの
可能性を除いたら、ほぼ100%嘘を見破れるぞ。

俺の心配などお構いなしに、シャリーナは2人分のトランプを配り始めた。
俺は山となったカードを手にとると、手札の中のカードの場所を把握する。

「それで、そのアイテムって、どんなアイテムなんだ？」

興味なさそうに……。というが、興味などないが一応聞く。

「なんでもいいでしょ……。強化アイテムよ、強化アイテム!!」

シャリーナがぶつきらぼうに言いながらカードを出す。

「嘘だな……」

「う、嘘じゃないわよ!!」

俺はさっきシャリーナが出したカードを裏返す、シャリーナが出したカードは
嘘^{ダウト}だった。

何かがつまったような顔をするシャリーナを見ながら、小さな力

ードの山を
シャリーナに手渡す。

「それで？　なんで、欲しいわけ？」

「別にあんたには関係ないでしょ・・・」

ダウト
「嘘」

再びカードの山をシャリーナへと渡す。シャリーナは口を尖らせながら俺を見る。

自分の手札を見れば、相手のカードはすぐに予測できる・・・2人でダウトをすれば
こうなるさ・・・。

「アンタだつて、ホントは興味あるんじゃないの？」

「別にねえよ・・・」

俺は適当にカードを出した。

ダウト
「嘘!!」

シャリーナが高らかに宣言する。俺は一番上のカードをめくってみせる。

そのカードは鎌を持った死神、つまりジョーカーだった。三度目のカードの

譲渡を行うと、シャリーナの手番からゲームが再開する。

「それってさ・・・ただの、暇潰しなわけ？」

「暇潰しなわけないでしょ!!」

俺は宣言もせずに、シャリーナの出したカードをめくってみた。

そのカードは
俺がさっき使用したジョーカーで、嘘ダウトではなかった。

「これじゃ、いつまでたっても終わらねえ・・・ギブアップだ」

俺がそういうと、シャリーナは二パツと顔を明るくして、カードを投げ出した。

トランプの箱を素早く探し、チェスやその他のゲームを手早く直していく。

俺は味のなくなったガムをゴミ箱に吐き捨てると、暑くなってきたにもかかわらず
壁にかかっていたコートを羽織った。まあ、ローブを持たない俺の正装みたいなものだからな・・・。

「さっさと行くわよ!!」

シャリーナは俺の背中を勢いよく叩き、さっさと玄関へと向かっていった。

娘を遊園地に連れて行くような気分を味わいながらも、光喜やメアのせいで

その気分に違和感がなくなりつつある自分にため息をついた。

僻地？

「それで・・・どこまで行くんだ？」

シャリーナをバイクの後ろに乗せて、エンジンをふかす。
燃料は十分あるし、補給する必要はないだろうな。

「アレスタル山脈の廃坑よ」

また、マイナーな場所だな・・・。アレスタル山脈といえば、
数百年前までは魔石がよく採掘されていて、都市部にも負けないほどの

規模の町になりつつあったが、ある頃からパツタリ魔石が取れなくなり、

今は町の名前さえ地図に残っていない。

「少し遠いな・・・ワープゲートは繋がってるか？」

「繋がってるわよ、B地区に白くてでっかい施設があるでしょ」

まあ、あるっちゃあるな・・・。こじんまりとした老人ホームと
間違えそうな

地味で、古い公共施設が・・・。

「その8番ゲートからレイタムの町に行って、レイタムのA地区
の施設から・・・」

「ちよつと待て、アレスタル山脈に直行できないのかよ？」

しかも、レイタムって言ったらゴーストタウンじゃねえか！？
ワープ施設は生きてる

かもしれないが、そんな場所のワープ施設を使わなくちゃいけないのか？

「他の施設からだ、ワープゲートが撤去されてるのよ!!」

そりゃ、誰もあんなへんぴな鉱山に行きたいなんて思わんだろ。

「で、レイタムから、ネラサに飛んでー」

俺はバイクを走らせながら、シャリーナの長い長い道案内を聞いた。どうやら、

ワープ施設を5回以上乗り換えなくていけないらしい……。どれだけへんぴな場所

なんだよ……。今いち実感がわかないかもしれないが……。そうだな、電車を5回

乗り換えたらようやく着ける駅に行こうとしているわけだ、いや、バスを5回か……。

どっちでもいい、それぐらいややこしい場所にある。

「日帰りできるのか？」

「大丈夫よ、無理ならそのへんで野宿すればいいじゃない」

年頃の女性の発言とは思えませんね、というか、できなければ野宿ってことは

手ごろな場所には宿屋がないってことだな……。

まったく、迷惑このうえない話だな。

「何よ文句ばつかし、もし野宿にでもなったらお詫びに添い寝してあげるわよ」

「いらん、迷惑だ」

さつさとお目当てのアイテムを見つけて帰るしかないな・・・。
すると、後ろから

やかましく、聞き覚えのある甲高い音が聞こえてきた。ミラーを見ると、黒と白の

二色の車体に、赤いサイレンをつけた車が追ってくる。

「ポリかよ・・・」

「止まらないつもり？」

もち、止まってたまるかよ。ノーヘルで二人乗りだぜ？ 下手すりゃ補導もんだ、それに・・・

「それに？」

「無免許運転だ」

「え！？ あんた、免許持ってたんじゃないの！！」

いつ、誰が、どこで、なんのためにそんなこと言っただんだ？

俺がマジメに教習所に通ってると思ったら大間違いだぞ。

俺は赤信号を無視し、一通の道をフルスピードで突っ走る。しかも、このバイクは

タケシが作った特注品だ、普通のバイクとはエンジンの質が段違いで、

通常の倍近くのスピードが出る。

「今対向車が来たら・・・死ぬな」

「あんたそれマジメに言ってるの！！」

マジメもマジメ。狭い一通の道を爆走してた、対向車が来たら

避けることは不可能、

このスピードで急停車は出来ない。

それに動かない壁とは違い、向こうもこっちに向かってくるんだから相乗効果で、

ものすごいスピードと勢いで突っ込むことになるぞ。

おっと・・・そんなこと言ってる間に、車来た。

「軽くしろ!!」

「へ!？」

シャリーナはとっさに俺たちと、バイクを軽くする。俺はハンドルを引き上げ、

バイクの前輪が浮かせると、後輪の少し前にダークを放つ。軽くなつたバイクは

宙に浮かび、対向車であつた白いスポーツカーの上を飛び越えた。

車は驚きのあまりに止まり、ポリは対向車のせいで追ってこれない。

「あんだねえ・・・」

シャリーナは何か言いかけたが、続きの言葉はため息に変わり、言葉が続くことは

なかった。もういい、疲れた、みたいなオーラを背中に感じつつ、俺はバイクを走らせる。

そして、3時間後。俺たちは廃坑前まで来ていた。長かった・・・ホントにつまらないこと

この上なし、途中で昼飯を買って行こうかと思っていたのだが、コンビニすらない。

廃坑の前には、看板だったものの残骸が残っており、文字の判別は不可能となっていた。

足元には昔使われていたと思われる、トロツコの線路が赤いサビを纏いながらも、二本が平行を保ちながら永遠と伸びている。

「くそ・・・真っ暗じゃねえか・・・」

俺はポケットからオレンジ色の石を取り出す。

「『灯石』持ってたんだ」

シャリーナが俺の手元を覗き込みながら言った。普通はお前が持っておくものだと思

思うのだがな、人を誘っておきながら適当な奴だ。そのオレンジ色の石を軽く磨いてやると

直視できなくなるほどの強い光を放ちだした。まあ、簡易版懐中電灯だ。

廃坑に来るということで、家から持ってきておいたのだ。

「それで、目当てのアイテムはどんな奴なんだ？」

「瑪瑙めうの宝玉よ」

なんかそれらしい名前を出されるが、はっきり言って聞いたことがない。というか、こんな

整理のいきわたっていない廃坑にそんなものがあるのか？

「あ、あるわよ！！ 高いお金出して買った情報なんだから！！」

騙されてるんじゃないのか？ というか、高い金を出して情報を買うほど、貴重なアイテムなのか？

「それに思いを込めて他人に渡すと、その人とのパーティーポイントが高くなって、

生涯パーティーを組み続けられるんだって・・・」

なんだよその、ミサンガと風水を組み合わせたようないかがわしさは・・・というか、お前はなんでそんなものが欲しいんだ？

「エルルに渡すために決まってるでしょ!!」

じゃあ、エルルと取りに来いよ。

「エルルには渡すまで秘密!! あと、私は恥ずかしいから、渡すのはあんたよ!!」

それって、全然意味なくないか？ 本人が渡さなくても、そのいかがわしいおまじないは利くのか？
いくら神秘的な力でも、第三者が手渡したら神様だって混乱するだろ。

「別にいいのよ、そのときはそのときで、私があんたに付きまとうから・・・そうすれば、必然的に

エルルとはずっとパーティーを組めるでしょ」

こいつはバカか？ もう呆れて次の言葉が出てこないよ、それにこんなところで時間を浪費して

野宿するのはイヤだしな・・・俺は、じゃあ最初からエルルに付きまといばいいだろ、という言葉を

押し殺してさっさと廃坑へと入っていった。

暗闇の中？

「はぁ・・・はぁ・・・クソッ、舐めやがって」

あれから数時間が経過していた。俺は周囲を見渡し、シャリーナを探す。

だが、周囲は真っ暗でシャリーナの姿を確認することが出来ない。

数分前・・・。

「なぁ・・・ココってモンスターいねえのか？」

俺がぼやくようにシャリーナに言う。いつの間にか、灯石はシャリーナが

持って先頭を歩いている。まぁ、別にいいんだが・・・。

この廃坑は無駄に分かれ道が多いが、ずっと同じ景色が続き、その上

モンスターが一匹も出てこないという、退屈極まりない場所だった。

ぼやきながらも歩いていると、急に開けた場所に出て来た。ボロボロに

なったトロツコや採掘に必要な道具が当たりに放置され、掘り返した土が

山となっていた。

「なんかいるな・・・」

俺が呟いた瞬間、一閃の衝撃がシャリーナの持っていた灯石を砕いた。

砕かれた瞬間、それが銃撃であったことを悟り、俺たちは別々に物

陰に

隠れた。

音がしなかったのを見ると、銃にサイレンサーが何かをつけているようだ。

灯石は砕かれて光を失い、周囲は闇のみが広がっていた。

「シャリーナ大じよ——」

言いかけて違和感に気付いた。俺自身の声が聞き取れない、人間は自分の声を骨の振動を通して聞き取ることも出来るので、うっすらとは

聞こえているが、外に出て行った声が俺の元に返ってこない。

俺は試しに手元の石を投げてみた。結果は無音。

「これじゃ、シャリーナがどこにいるか分からねえ……」

俺はポケットに入っていたライターを取り出す、その瞬間に、そのライターは

銃弾によって弾かれた。俺はどこに飛んでいったかわからないライターの無視して、

他の物陰に隠れた。手探り状態で隠れるものを探しているので、やや時間がかかった。

一応、銃で狙いにくいように蛇行しながら走ったが、音がないので撃ってきて

外れているのか、撃っていないのかも分からない。

そして、現在に至るわけだ。

すると、突然どこから大気を振動させるような衝撃が起こる。多分、シャリーナが

しびれを切らして暴れてるんだろ。

待てよ、音っていうのは、いわば空気の振動だよな……肌で感じているほどに空気が

震えているのに、音がなくなっているってわけはない……。だとすれば、俺たちが音を

判別できなくなっているだけだ。だが、幻術の類ではない。幻術のエキスパートである

俺様が言うんだから間違いない。

となれば……。これは、呪術の類に分類される技だな……。だが、呪術というものを

相手にかける場合、魔力を直接ぶち込むか、呪術の課程で対象を指定しなくてはいけない。

しかも、対象を指定する場合は、相手の体の一部、髪・爪・血・魔力などが必要となる。

奴は前者ではない。魔力を直接ぶち込まれたら、誰でも気付く。ならば、後者。

つまり、奴は俺とシャリーナがここに来ることを知っていたことになる。つまり、罠だったわけだ。

「また罠かよ……」

俺はこの前メアと光喜で行った、ダンジョンにいた少女の事を思いうす。

また陽河家に対する恨みか……。いや、今回はシャリーナが含まれてるよな……。身辺調査でもしたのかもしれないな。

俺がいろいろ考えているとき、神経を尖らせていた肩に何かがめり込む感触が一瞬する。

その後、体をそらすと、肩にかすり傷ができた。銃弾が肩を掠めたようだ。神経を最大まで

尖らせば、致命傷は避けられるが、長期戦になると不利、それにシヤリーナも心配だ。

かといって、ところ構わず技を連発したら、生き埋めになるだろうな。

俺は試しに、銃弾が飛んできた方向に軽めのダークを放つ。音がないし、視界もゼロなので

着弾したかどうかはわからない。音がまだ聞こえないのを考慮すると、多分外れたな。

暗視スコープか何かを装着してると考えるのが普通だろう、距離もかなりありそうだし

回避も楽々できるだろう。

「仕方ない・・・、あまり手の内を見せるのは好きじゃないんだがな・・・」

昔、魔力の素質の話をしたのを覚えているだろうか？ 魔法使いには、その魔法使いの

素質というものがあり、その素質にあった魔法は習得が楽でより強力になっていく。

俺の素質は闇・呪・幻・氷・雷・炎・水・空・風・地・癒・樹の12個。闇が一番得意で、樹が一番苦手という順番だ。

つまりだ・・・。

俺が両手をかざすと、その間に青白い稲妻が走る。闇には劣るが、雷も俺は使うことが出来る。

その光を頼りに、シヤリーナがこちらに寄ってくる。雷だと、あまり広範囲を照らすことが出来ず、敵影は発見できない。

「よう、無事か？」

俺が言つと、シャリーナが口をパクパクさせている。音が聞こえないんじゃない、なに言ってるか
分からないだろうな・・・普通の人間なら。

『あんたねえ、雷の魔法使えるなら早く使いなさいよ!!』

読唇の結果、シャリーナの言っていることは分かる。俺が言っていることは、シャリーナには
理解できないだろうがな。

『といっても、聞こえてないんでしょうね・・・』

俺はシャリーナに向かって、嫌味たらしく笑った後、首を振る。俺が唇に指を当てながら、パクパクを動かしてやると、読唇術が使えることを理解したようだ。

電撃でうつすらと明かりのある中、シャリーナに飛んでくる銃弾が見え、とつさにそれを掴んだ。

掴んだ瞬間は、電撃が出せないで周囲は暗くなる。

俺は掴んだ銃弾を確認する。『魔女狩り』が使っていた、黒魔術式の銃弾ではない。

「バカな奴だ・・・銃弾にまだ魔力が残ってやがる・・・」

俺は電撃を止め、辺りは闇が支配する。元々、こんな場所を戦いに選んだのが間違いだな・・・

俺にとって闇は恐怖の対象じゃない、最高の武器さ・・・。

俺は魔力を高め、呪術を発動させると、そつと目を閉じた。

俺のまぶたの裏では、超高画質なダイジェスト映像が流れている。先ほど銃弾を放った位置から

離れて、また俺たちに狙いをつけている男の姿がくつきりと見えていた。

黒くてぴっちりしたスーツを着た、青髪の男だ。暗視ゴーグルをつけているのかと思ったが、金色の目には魔力が集中している。なるほど、音を消す能力以外にも、特殊な視力を持つ能力が有るようだな。

男が銃を俺に向けた瞬間、俺は目を開いてその方向を見た。

「・・・見つけた」

口に出して言ってやると、男はあわててその場から移動する。もう目を開けたままでも奴の位置がはつきりと分かる。俺がかけた呪術は、監視するもの。直接的な危害はないが、周囲の闇を味方にし、敵を監視し続ける。あと3時間程度は俺から逃げることは出来ないぜ。

この能力が発動したおかげで、シャリーナの位置もはつきりと分かる。

俺はシャリーナの肩に手を置くと、次に背中に指で字を書く。数分で作戦を伝え終わると、俺は魔力を高める。その間にも、銃弾は数発飛んできたが、この距離なら見えている弾丸は全て回避可能だ。

「教えてやるぜ・・・どっちが呪術師として格上か・・・」

俺は小さなダークを何発も、敵の頭上に向けて放つ。既にシャリーナとは魔力の波長を合わせており、第2派の準備も万全だ。

男は自分から逸れている弾道に安心したのか、ゆっくりと移動を始めた。

ダークは男の頭上の天井に当たった。威力的には言えば、破片がいくつかが降ってくるぐらいで、

少しずれた位置に移動した男には当たるはずもなかった。

シャリーナがいなければ・・・。

「潰れちまえ」

俺はそういうと、シャリーナの肩を叩く。すると、ダークに込められていたシャリーナの魔力が、

天井付近の岩石の重さを全て重くする。男が気付いたときには、広範囲にわたり天井が崩れ落ちてきた。

「俺を相手にするには、準備不足だな」

「あっ・・・聞こえるようになった」

シャリーナの声が間近で聞こえた。久しく聞いてなかった気がするな、何日も聞いていないわけじゃないのに、ひどく懐かしいよ。

「さてと・・・掘り出して、動機でも——」

俺がその場から移動しようとしたとき、あの時の塔で感じたのと同じ、感じ覚えがある

あの魔力が周囲に立ち込めた。それと同時に、岩石は吹き飛び、男がユラユラと立ち上がった。

すると、何もない虚空にひびが入り、亀裂が生まれた。俺が追おうとしたときには、男はその

亀裂の中に入っってしまっった。

「ウソだろ・・・」

「ちよっと、どうしたのよ!!」

何も見えていないシャリーナが騒ぎ立てる。呪術をかけた対象が、この場から消えて

しまったため、俺の視界もゼロになった。いや、この場から消えたなんて規模じゃない、

正確にはこの世界から消えた・・・。

「まさか・・・いや、でも、なんでアイツが？」

俺はパニック状態になった頭を抱えつつ、しばらくその場に立ち尽くしていた。

自分自身？

「何よ、アイツって・・・」

シャリーナが俺に尋ねたが、俺は黙って歩き出した。

雷も疲れたので、近くにあったトロツコを破壊して、炎の魔法で火をつける。

これを戦闘中に使っても良かったのだが、闇魔法に比べると、炎属性は

得意ではないため魔力の消費が数倍に跳ね上がるから、実戦ではあまり使いたくないのだ。

俺らは外に出ると、とりあえず傷の手当てを始める。

「なあ・・・誰からこのことを聞いた？」

俺はシャリーナに自分の限界値に近い、真剣な顔で尋ねた。シャ

リーナは少し考えて何か

言おうとしたが、俺は一言、嘘ダウトとだけ言う。嘘をつくなら、考える仕草を失くせ。

すると、諦めたかのようにため息をつく。

「アンタのおじさんよ、内緒にしてくれてことだったけど・・・」

親父が帰ってきてるのか？ 正直初耳だぞ、多分俺の親父と最後にあったのは、去年の盆くらいだ。

「手紙で届いたのよ、日時と場所まで正確に書かれてたわ」

シャリーナはその手紙を俺に手渡した。空も真っ暗になっており、

バイクのライトをつけて、その光で手紙を見る。

家族の俺から見れば、一目瞭然だった。これは、親父の字じゃない、

というか、親父がこんな丸字で書いてたら気持ち悪いわ……。

「私もね、女の人の子に見えたんだけど……。差出人が、おじさんになっ

てたし……。悠夜のこと詳しく書いてたから」

俺は自分の名前が出ている部分に目を通す。

『最初はかなり渋るかもしれないけど、ゲームを切り出してみるといいかもしれない。そういうの好きだから。何度か挑戦してたら、シャリーナちゃん可愛いから、すぐ折れると思う』

親父がこんな丁寧言葉な手紙を書くのも、未恐ろしい気もするが、俺の行動をここまで言い当てる他人も怖いな……。ていうか、なんかむかつく。

いや、他人とも言い切れないかもしれないな……。

「アンタって、親戚とかいるの？　もしかしたら、その人が代筆したのかも……。」

親戚か……。まあ、いるといったらいるな。正確には陽河家分家ともいうべき

もののだが、仲がいい人は少ないし、俺の行動を言い当てるほどの奴なんて

陽河家では光喜だけだ。まあ、光喜の言動も結構あてにならんが……。

「一度帰ろう・・・この話は光喜たちにもしておきたい・・・」

俺はそういうと、シャリーナを後部座席に乗せてバイクを走らせた。

かなり暗い山道だが、夜目は利くほうだ、さつきみたいな全く光のない

空間というわけでもないの、すすいと走らせることができる。

そして、その町のワープ施設に着く・・・。

「こりゃ、なんの冗談だ・・・」

ワープ施設は真っ暗だった。ゴーストタウンなのだが、来たときはワープ施設
だけはしっかりと稼動していたんだがな。

「この辺ってね、夜は電力削減のために、公共施設であろうとも、稼動しないんだって・・・」

つまりだ・・・、これは・・・。

「野宿にはならないんじゃない・・・ゴーストタウンなんだから、その辺の

ハイビルにでも入って・・・」

野宿と大差ないと思うがね・・・。あゝあ・・・コイツと一緒にだ
とろくなことになるな。

俺たちは、シャリーナの言うとおりその辺のハイビルに入っていた。
来たときに

言っていた添い寝はなかったが、シャリーナの寝顔は見れたよ。黙
つてれば、

可愛いところの一つや二つあるのにな・・・。

シャリーナがスヤスヤと寝息を立てている間、俺は寝付くことが出来なかった。

別に近くに女の子がいるから、というピュアな少年みたいな理由じゃない・・・。

ただ、今から相手する奴の事を考えたら、不安だったというのが本音だ。

「情けねえな・・・何ビビッてんだよ・・・」

ともかく、一度話をつけておかないとな・・・。この前の魔女狩りの手前、

勝手な行動は光喜たちが許してくれないだろうし、この問題は光喜も知っておく必要がある。

俺は1人、窓の外に移る大きな月を眺めた。月はやがて雲に隠れ、町は暗闇に支配される。

大丈夫・・・闇は俺のテリトリーだ・・・希望の光が見えなくても、俺は俺なんだから。

結局、一睡もしなかった・・・。朝日がやたらとまぶしい。

簡易式の防寒具に身を包んで寝ていたシャリーナは、朝日によって目覚め。目覚めた瞬間に

俺がいるという状況に寝ぼけ眼で驚きつつ、昨日何があったかをぼんやりと思い出していた。

「さっさと行くぞ・・・」

俺はそれだけ言うと、廃ビルから出て行く。俺がバイクにまたがったとき、異変に気付いた。燃料がゼロになってる。

待て、来るときは十分すぎるほどに燃料はあつたはずだ！！

俺はあわてて燃料タンクを見るが、燃料漏れをしているわけではない。かといって、昨日は

一晩中おきてて、燃料を誰かに抜かれたら気付いたはずだ……。

「畜生！！ シャリーナ、走るぞ！！」

俺はシャリーナに怒鳴りつけるに言うと、さっさと走り出した。
やばい胸騒ぎがしやがる……。

いや、もうバイクという足を潰された地点で、ヤバイに決まってる！！

俺たちは急いでワープ施設に向かった。ワープ施設が破壊されている可能性などを

頭の隅で考えていたが、ワープ施設は無事だった。俺たちをこの町に閉じ込めるつもりはなさそうだ。

ならば、何が目的だ？

数秒と立たずに、短絡的ながら一番考えたくない推論に至った。

「あの野郎、ぜってえーぶつ殺す！！」

何で俺はこんな簡単なことに昨日気付かなかったんだ。最初に会った女は、

俺と光喜に用があるといった。昨日の男は、暗闇でじわじわと時間をかけて戦っていた、

そして、一発の反撃をうけただけでさっさと逃げた。

この2つの状況を汲み取れば、狙いは俺じゃなかったことに気付けたはずだ。

クソッ！！ あいつら、光喜を狙ってやがったのか！！

「きっと大丈夫よ！！ 光喜だってバカじゃない……トリプルビ

ートを使えば、

どんなに強い相手からでも、逃げることはできるし・・・」

そう、普通ならそうなんだよ。エルルの知力とトリッキーな戦略、光喜の相手をよせつけないスピード、

運がよければ、バカだが攻防ともカバーできる能力を持つタケシに、リスクは高いが最終兵器のメアがいる。

メアがいればまだ希望があるかもしれない・・・。味方もヤバイが、圧倒的破壊力が有るからな・・・。

だが、もしも、光喜だけ・・・それか、光喜とエルルだけなら状況は最悪だ。

「なんでよ!？」

「光喜の能力じゃ、奴に勝てないんだよ!!」

俺が走りながら叫ぶと、少し後ろからメアも叫ぶ。

「さつきから、奴、奴って一体誰のことなのよ!!」

考えたくない、考えたくないさ・・・あいつが俺たちを狙ってるなんてな。

「・・・俺だ」

一言そういうと、後ろから聞こえる、俺の言動をバカにするようなセリフを無視する。

間違いないよ、あの魔力の波長・・・そして、あの世界から消えた力。

俺たちが家に着いたのは、その日の夕方だった。合計約4時間の

フルマラソン、盗品のバイク1時間、公共交通機関30分、タクシー1時間半。

それでも、弱音を上げずに着いてきたシャリーナを褒めるべきなのだが、今はそれどころではない。

俺は家の扉を力強く開け放つ。

「光喜！！ いるか！！」

俺はシンとした家内を見渡す。靴も脱がずにリビングへと向かう。リビングのドアを開けた瞬間、

夕陽でオレンジ色に染まった部屋の中に、4人分の人影を見つけた。1人は窓際に立ち、後の3人は床にぐったりと横たわっている。

「光喜、エルル、タケシ！！」

床に倒れている3人を呼ぶ。俺が3人に近づこうとしたとき、3人を取り囲むように魔法陣が出現した。

「どうする？ 100%毘だぜ？」

窓際にいた1人の男が俺に尋ねてくる。その声は俺とほとんどかわらず、身長も体格も、髪も目の色も同じ。

違うところといえば、長髪ではなく光喜と同じで乱した髪型だというくらい。服装も白いシャツの上から、オレンジ色のジャケットを羽織っていて、黒い長ズボンを履いている。

そいつは俺の事を見て、ニヤリとした笑みを浮かべた。

「よう、俺・・・というか、俺の一部か？」

「陽河 竜」
ひかわ
リョウ

奴は自分の名前を呼ばれ、クスツと笑いながら首を傾げる。シャリーナの俺の後ろで、状況がつかめない様子で部屋の中を見つめている。俺は3人のもとに歩き出すと、3人を治療するためのアイテムを出す。

「その魔方陣、畏だぜ？」

「知るか・・・」

俺が魔方陣に入ると、魔方陣は輝き始め、シャリーナも急いで俺の元に駆け寄った。

そして、俺たちは光に包まれていった。

新たな地？

俺が次に気付いたとき、そこは俺の家ではなく、どこかの廃棄された

寺院のような場所だった。いや今はどこに転送したかなんてどうでもいい。

まずは、光喜たちの手当てが先だ。

タケシは腹部にあざがあるが、たいした怪我じゃない。光喜はひどいな……。

リヨウはおそらく小さなナイフを使って戦ったようだ。そんな刺し傷や切り傷が多い。

多分、コイツが一番抵抗を見せたんだろうな……さすが、俺の弟だと言いたいところだが、

実力の差が明らかだ。

「そっちはどうだ!？」

俺はエルルを見ていたシャリーナに振り返らず尋ねる。こんな緊急時だが、流石に俺が

エルルの服を脱がして傷を確認するわけにはいかないからな……。

「傷らしい傷はないみたい……」

シャリーナはそこまで言って言葉を濁す。外傷がなくても、骨とか内臓をやってるかも

しれないからだろう、シャリーナにそういった知識はないからな……。

呼吸も脈も正常なようなので、多分問題はないだろう……。ならば、全ての力を光喜のみに

注いでやればいい。元々、治療は得意分野じゃないんだ、3人同時に完治させられるとは思っていないさ……。

俺はもう一度、光喜を見た。

「やられすぎだ……」

刺し傷が右腕に二つ、左手の平に一つ、横腹に一つ、右腿に一つ、左ふくらはぎに一つ……切り傷は頬に一つと、体にいくつもある……。全て致命傷にはならないが、動きは完全に塞がれてしまうだろう。スピードのある光喜の体を、ここまで正確に傷つけるとは……。

俺は全魔力を光喜に注ぐつもりで治療を始める。傷はみるみるうちに治っていき、数分後には傷一つ残っていないかった。

「はぁ……はぁ……」

俺は呼吸を荒くしながら、その場に倒れるように座り込んだ。魔力が全然残ってねえ。

くそお、闇や呪の属性はこれだからややこしい……。闇や呪を極めると、どうしても光や癒の魔法が苦手になってしまう。なんとか、癒の属性だけは努力で獲得できたが、一度使ったらこのざまだ。

「エルルの外傷を見るぞ……」

俺はシャリーナに任せていたエルルの元に這うように近づく。体がやたらとダルイ……。

脈をはかり、呼吸を確認し、エルルの魔力を感じ取る。戦闘の痕跡はほとんどない。

というか、ダメージを受けた痕跡がない……。

「健康そのものだよ……大丈夫……」

そういつた瞬間、周囲の空気に異変を感じ取る。どうやら、大丈夫ではないようだ。

俺はふらつく足で立ち上がり、寺院の入り口の方へと歩いていく。後ろからついて来たシャリーナは

俺に肩を貸そうとする。だが、俺はそのシャリーナの手を振り払った。

男の意地として、女の肩は借りん。というか、借りるわけにはいかん。

「やせ我慢するんじゃないわよ!! 半日走り続けて、あんなに魔力使って!!」

半日マラソンはお前も一緒だろうが。確かに、魔力も体力もほとんど残ってねえが、やることやらないとな。

「なんの話よ……」

「敵だ」

俺はそっぴいながら、ボロボロになったドアを蹴り破り外に出る。外には敵が1人突っ立っていた。

幸いなことに、リョウではない。だが、ひよろひよろなやし君でもない。目を合わせてみれば、

突っ立っていたという表現も少し違うような気がしてきたな。

「何よ、コレ……」

そこにいたのは、銀色の毛並みの獅子だった。大きさは大型トラツクぐらい、どうやら使い魔のようだ。

十中八九、リヨウの使い魔だろうな。畜生、俺の使い魔なんて呼んでもこない女の子なのに、

こんな強そうな奴が呼べるのかよ……。

「俺がひき付けるから、お前は上から一撃かませ……」

それしか言えん。幻術も呪術も魔術もろくに使えんが、隙ぐらい作ってやる。お前の一撃ならば、

あいつを一撃で仕留めることも可能だろう……もし無理なら……呪印の侵食を覚悟して大技を撃つ。

俺はフラフラとした足並みながらも、その獅子に向かって駆け込んだ。この間に、シャリーナは

自分の重さを軽くして、敵の上に……。いかないで、俺の真横にいた。

銀の獅子はその爪で俺に切りかかったが、その爪をシャリーナの剣が防ぐ。

「てめえ!!! 人の話聞いてたか!!!」

強がってそう言ったものの、あれは今の俺じゃ防御できなかった。回避したとしても、次の攻撃は

どうなったか分からない。デカイと思ってトロイ奴と思っていたが、想像以上のスピードだ。

「昨日のチェスの話だけ……」

シャリーナは銀の獅子の爪を弾き飛ばし、俺の前に立って剣を構える。

「やっぱり、たった1つの歩兵^{ポーン}でも、私は守りたい……」

シャリーナは久々に見せるマジメな目で俺をじっと見つめた。こんなときにチェスの話か、そのチェスというゲームの否定論は後にしてくれ。

「アンタみたいに、私は利口じゃない、だから私は感情で動くのよ！――」

シャリーナの口調には有無を言わさないものがあつた。まったく……俺を歩兵^{ポーン}扱いか？

「言つとくが、俺は歩兵^{ポーン}で収まるタマじゃねえぞ……」
「知ってるわよ……」

シャリーナは剣に魔力を蓄えていく。次の一撃、かなり大きなものになるだろうな。

シャリーナはツインテールをなびかせながら、俺を流し目でみる。

「アンタと私は騎士^{ナイト}よ……」

王は光喜^{キング}か？ それともエルルか？ タケシは……歩兵^{ポーン}で十分だ。

銀色の獅子は俺たちに飛び掛つてきた。まずいな、シャリーナの重力操作の一撃は、相手より上から振り下ろすから威力があるのであり、頭上の敵にはほぼ無力だ。

「重力、剛を制すつてね！！」

はい、柔よく剛を制すね。

シャリーナは剣を思いつきり頭上に投げ捨てた。その後、その剣はシャリーナの能力により

物理法則を完全に無視した重さに発展し、加速をつけながら落ちてくる。

ちよつと待て・・・あの規模は、不味いんじゃないのか？

「てめえ！！」

俺はシャリーナを脇に抱えると、残った体力と魔力を全部使つてその場から逃げ出す。

その刹那、剣は銀の獅子を貫き、地上に落ちた。衝撃は大気を揺らし、地鳴りは鼓膜を

圧迫する。ちよつとした隕石レベルだな。

「はあ・・・もう、だめ・・・」

俺と共に地面に倒れているシャリーナが言う。

「てめえ、バカだろ・・・今の一撃に全魔力注ぎやがったな・・・」

俺は倒れたままシャリーナに話しかける。荒くなった呼吸のせいでスムーズに話せない。

「言つたでしょ、私は皆が助かる戦いをするのよ」

本気のギャンブルだな、全員助かるか、全員死ぬかって感じたぞ。

シャリーナは倒れたまま、楽しそうに笑った。笑っているシャリーナのをよそに、俺は疲労がたまった体を無理やりに立たせる。シャリーナの笑い声は途絶え、俺の顔には引きつった笑顔が浮かんでいる。

「ギャンブルは、負けたようだがな・・・」

土煙の中から、骨の髄まで震わせるような雄たけびが木霊する。

銀色の獅子は右前足を失いながらも、器用に体勢を整えて立ち上がっていた。失った右前足の付け根は、まるでガラス細工のようにかけていた。

どうやら水晶のようだ、俺は土や石で使い魔を作るが、リョウの奴は水晶を使うらしい。こんな巨大な

水晶など存在しないだろうから、多分、自分で水晶を具現化できるんだろうな。

「シャリーナ・・・」

俺は後ろで倒れているシャリーナに話しかけた。額からは冷や汗が流れ、足は疲労からか震えている。

この震えが恐怖でないことを祈りたいよ・・・恐怖は決意を歪めちまうからな・・・。

「もしも、俺が・・・俺が狂ったら、なんとかして逃げろよ」

俺は使い切った魔力を体の奥底から引き出す。呪印に封印された、俺本来の魔力を・・・。

「ちょっと、待ちなさいよ!」

シャリーナがそう言ったとき、右前足を失いバランスの悪い銀色の獅子に向かって、
無数の弾丸が打ち込まれていく。周囲には水晶の破片が飛び散り、獅子は地に倒れた。

弾丸の飛んできた方向を見ると、赤い短髪を乱し、両手に巨大なガトリング砲を持った
タケシが仁王立ちしていた。

「悪いっす、アニキ！！　ちょっと、寝すぎました」

そういったタケシは、立ち上がりとする獅子の後ろ足をガトリングで碎いていく。
だが、水晶は少しずつしか碎けず、獅子は這いずりながら移動しようとする。

タケシはガトリングを投げ出し、今度は剣のようなものを具現化した。その刃はギザギザになっ
ており、やがてチェーンソーのように動き出した。

「はああああああー！！」

叫びながら獅子に突っ込み、その硬い体を切り裂く。獅子の悲鳴にも似た鳴き声を聞きながら、
火花と水晶の破片を散らすタケシを眺める。機械を具現化する能力。今ほど頼りがいがあると
思ったことはないだろうな。

「これで、終わらせてやる！！」

今度は右腕を覆うように機械を具現化し、それはミニチュア版の大砲のようになる。

白と青のパーツが混じりあい、肩辺りからは水蒸気が漏れ出す。タケシの周囲は、陽炎を生み出すほどに温度が上昇し、先端からは光があふれ出す。

「ブレイブ・バスターー!!」

言葉と共にタケシの腕から光の帯が放たれる。それは、銀色の獅子の体を貫き、

衝撃で残った体も砕いていった。数秒でバスターは消え、その後、俺に向かって

ぐっと親指を立てると、そのまま後ろに倒れていった。どうやら、タケシも魔力切れのようだ、

さつきから足がピクピクと痙攣しているように見えるのは、一度に魔力を極度に疲労したせいだろう。

「お前らさ・・・魔力のセーブって知ってるか？」

といいながらも、俺も立っているのがやっとだったので、その場にへたれこむ。

後ろにいたシャリーナは安心した顔で空を見上げ、タケシにいたっては魔力の

全力放出により気を失っている。

まあ、今回ばかりは助けられたわけだしな・・・この盤上では、シャリーナの方が優れた策士だったわけだ。

第10話「捕らわれたエルル」

それから全員がともに動けるようになるまで、半日かかった。夜も明けて、

空が明るくなってきた。

俺、エルル、シャリーナ、タケシ、光喜の順番で完全回復する。やはり、光喜が一番

消耗していたようだ、最後の最後まで気を失ったままだったからな。幸いだったことは、その間にリヨウの刺客がまったくなかったことだな。

まったく、奴がいつたい何を考えているのか検討もつかん。狙いが俺と光喜なら、

光喜だけ生かせておけば、それで餌は十分なはずなのに、エルルとタケシを生かした。

それに、さっきの銀色の獅子もそうだ、使い魔1匹だけをよこさずに、もう1人ぐらい

よこしておけば、俺は呪印を開放せざるを得なかっただろうに。

まあ、相手の思惑がどうであれ、全員が無事だったことに感謝するべきか・・・。

「お前らに説明しないといけないことがあるな・・・」

俺は輪になつて座っているメンバーの顔を見る。全員が俺の次の言葉を待つように、

俺の視線を注いでいる。さてと、どこから説明しようかな・・・。

「まず、ここは俺たちの元いた世界ではない」

そう、ここはおそらく陽河^{ひかわ} 竜^{りゅう}が生まれた世界だろう。

見た目にそれほど差がなくて助かったよ……。この世界は、いわば普通の世界という奴だ。

「陽河 竜^{リョウ}って……。お兄ちゃんの親戚の人？」

事情がまったくつかめていないエルルが質問する。その意見には、光喜が首を振って否定した。

リョウの話は後にしよう、まず、この世界での一番の注意点を説明しよう。

「いいか……。この世界と前の世界では、輪廻の仕組みに大きな違いがある。他にも、物理法則や宗教、食物、文化……。しまいめには生物の進化の過程にすら違いがあり――」

俺はいいかけて、ここでやめた。しっかりと状況をつかめているのが、エルルだけのようだ。

残りメンバーは、漠然と話を聞いて具体的な想像が出来ていない。もう少し、噛み砕いて

説明してやる必要がありそうだな。

俺は今度は、重要で具体的な違いだけを説明してやることにした。この世界には、魔法というものは一般には知られていない。科学と物理法則だけで成り立っている。

つまり、多くの人間は魔法を知らず、信じてもないということだな。

「は？ 何それ？ 魔法がなくてどうやってモンスターたちと戦うのよ!？」

そこも大きな違いだな、この世界ではモンスターというのは架空

の存在であり、動物はごく一般的な猫や犬などの簡単な進化しか行われていない。したがって、町に行っても亜人なんてものひといない。

「タケシ・・・コレ飲んでみる」

俺はポーションをタケシに渡す。持つてゐるならなんでさっさと使えばよかったのに、というシャリーナの声には耳を傾けず、タケシに早く飲むように進める。

タケシは首をかしげながらも、一気飲みする。だが、タケシの体力はまったく回復しない。

「ポーションなどの回復アイテムに入っている成分は、この世界の理にのつとるならば、ただの栄養素にしかない」

つまり、いまタケシが飲んだのは、向こうの世界では傷を治す回復アイテムだが、この世界では栄養ドリンクぐらいの効果しかもたらさない。

「じゃあ、蘇生アイテムとかもダメなの？」

光喜は俺が一番危惧していたことに関する質問をした。そう、この世界で一番大事なのはここなんだ・・・。

「最初に言つたら、輪廻の仕組みが違ふんだ・・・魂は肉体に戻らない・・・」

向こうの世界の常識を身につけている人間には理解しにくいことだろう、この意味を理解したのは

エルルだけのようだ。エルルは顔をこわばらせて、息を呑んで俺に尋ねた。

「それって、一度死んだら・・・」

「ああ、蘇生なんてものは、この世界にはない」

その言葉に全員が現在の状況を理解したようだ。

「ちょっと待ちなさいよ、そんな馬鹿げたことあるわけじゃない！？」

シャリーナは思わず立ち上がりながら、叫ぶようにしていった。
馬鹿げてるか？俺から見れば、俺たちが元々いた世界が狂ってたんだよ。この世界は、魔法というものが

影でくすぶっているものの、かなり正常な形を保った世界だぞ。

俺の説明にまだ信じられないという顔をしているメンバーだが、世界の違いについて伝えなくていけないのは

これぐらいだろう。天体の構造だとか、時空転送論の有無とか、クリスマスなどの宗教的行事とかは、もうどうだっていいだろう。

他に、もう1つ大事なことがあるからな。

「アイツのことね・・・いったいどういうことなの、アンタ、光喜を狙っているのは自分だって言ってたわよね？」

シャリーナが俺に尋ねる。ああ、確かそんな話をマラソンの途中でしてたな。

「パラレルワールドって奴だよ、もしも、あのときこうなっていれば・・・そういう無限の可能性と同じだけ、

異世界っていうものは存在してるんだ」

少々漠然な話をしすぎたか、これにはエルルも首を傾げる。それでも、考える仕草をするだけエルルはマシか・・・
他の連中は論外だ。エルルはしばらく考えた後、口を開いた。

「それって、もしかしたら、私が男の子に生まれている世界とか、この中の全員がどこかの国の王様とかになってる世界があるってこと？」

まあ、極端な話をしてしまえばそういうことだろうな。無論、俺が無限に存在する異世界をすべて知っているわけではないので、有るとも言い切れないし、無いともいいきれない。人類が宇宙にある全ての星を把握できていないのと、同じレベルの話なのだ。

「その中の世界には、俺と光喜・・・俺たちは一卵性の双子だが、これが1人として生まれた世界もある」

この言葉は、全員が理解したようだ。そう、つまり、それが陽河^{ひかわ}竜^{リョウ}という、俺であり俺ではない、光喜であり光喜ではない存在だ。

「だからか・・・」

光喜は少しうつむいて考える仕草をしながらそう言った。おそらく、リョウと戦ったときの事を思い出したんだろう。
俺はリョウがどのような戦いをしたか尋ねる。

「武器は小さな果物ナイフだった・・・でも、俺の時間操作がま

「まったく歯が立たなくて・・・」

「だろうな、予想通りだ。おそらく奴も時間操作の能力を有している。俺はエルルに視線を移す、俺の推測が正しいければ奴の能力はそれだけではないはずだ。」

「私は、リヨウって人の目を見た途端、すごいレベルの幻術をかけられて・・・幻術って分かってるのに、自分じゃ解除できなかった・・・」

「やはりな・・・。俺と光喜が1人として生まれた存在、ならば、俺と光喜の両方の能力が使えたって、なんら不思議なことは無い。」

「俺が考えていた最悪の状況だろうな・・・。同じ存在であっても、世界が違えば能力が違うことだってある、それならば、まだ望みがあつたかもしれないが、今回は絶望的と言つてしまつてもいいだろう。」

「俺と光喜が束になつても、リヨウには勝てないだろうな・・・」

「悔しいが、呪印があるぶん俺は完全に不利。呪印がなくても、実は奴のほうが上だろう。」

「残る希望はエルルやシャリーナ、タケシだが・・・今確認しているだけで、向こうは2人の能力者がいる。」

「桜の花びらを使う幻術使いと、音を消す呪術使い、それに、水晶で作った使い魔だっている。」

「総力戦になったとき、明らかにあちら側に分がある。」

「話しているうちに、自然とエルルと目が合った。」

「じゃあ、相手を分断させて1人ずつ倒していくってことだよな」

「ああ、エルルは物分りが良くて助かるよ」

そう、総力戦で勝てないなら、敵の位置を出来るだけ早く把握し、敵戦力を分断、その後総力で叩く。

まあ、簡潔に言うならば袋叩き作戦だ。

「なんか、汚いわよね・・・」

シャリーナが俺のパーフェクトと言えないまでも、妥当な選択のプランにいちやもんをつける。

「これが、ポーン1本も失わないための俺の作戦だ・・・文句あるか？」

俺がそういうと、シャリーナも納得する。まあ、元からこの中に捨て駒がいるとは思っていないがな。

スピードと援護の光喜、遠・中距離のタケシ、近距離アタッカーのシャリーナ、洞察力と汎用性のエルル、
プラス万能型の俺。コレだけの人数とメンツならば、相手がリョウでも1人ならば倒せるだろう。

「でも、どうやってリョウを見つけるんすか？」

タケシが一番重要な点をズバリと聞いてくる。人海戦術には人数が足りず、その上、バラバラで動くのはかなり危険だ。なので、俺たちにはできるだけ一箇所に集まっておく必要がある。

「じゃあ・・・どうするんすか？」

お前はもしかしてわざと聞いているのか？ 人数などを含めた全ての条件をこなせる奴がいるだろう・・・

「アニキ、そんなことまで出来るたんですか!？」

「お前がやるだ!！」

俺の能力で使い魔を作ってもいいが、俺から離れすぎると情報伝達はできないし、魔力負荷も大きく

非常に効率が悪い。だが、お前の能力で偵察用の機械を具現化して、映像データとして俺たちのもとに

送らせるだよ。わかったか、わかったらYES、分からなければ今すぐ分かれ!!

「でも、俺の能力じゃ、熱や音は探知できても魔力は探知できませんよ」

タケシの質問に俺はポケットから1つの物を取り出す。それは、

先ほど戦った銀色の獅子を構成していた

水晶の破片だった。この水晶には魔力が微妙にだがまだ残っている。かなり、心もとない魔力量だが、

これでなんとかリョウに呪術をかける。

「音を消す能力者にかけたアレ？」

シャリーナの質問に無言で頷く。相手の魔力を閉じ込めたものを使って、その魔力の持ち主を追跡を続ける

呪術のことだ。あまりの広範囲になると不可能になるが、タケシの能力と組合せばなんとかなるだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779b/>

ツイン～クエストヒーローズ?～

2010年10月10日15時19分発行